
夏空

たこねぎ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏空

【Nコード】

N0461T

【作者名】

たこねぎ

【あらすじ】

ある事故がきっかけで野球をやめた少年は平和で地味な高校生活を送ると誓うが……？

(モットーは楽しく・明るく・すこやかにです)

第1話 こんなのが見つかるから？（前書き）

『お前のモットーは教育方針か！？』 的な突っ込みは無しの方
向でお願いします。

第1話 こんなのが見つかるから？

眠い……これこそ放課後の教室で自分の席に座り欠伸する俺の気持ちを一言で表している。

高校に入学して一週間、授業も始まりそろそろ生活リズムが整ってくる頃だが。

寝不足は否めない、夜遅くまで何をしてたかつて？

そんなこと言えるわけねえだろ、R指定の物語になっちまう。

……とりあえず、自己紹介からしようか、俺の名前は神谷^{かみや}功^{こう}。
兵庫の県立開成高校に通う、高校1年生。

これといった特徴は無いし俺は何かを自慢するのは好きじゃない。普通に日常が過ぎるならそれが一番だと思っただけの平和主義だ。そんな、俺を厄介ごとに巻き込もうとする奴に一週間前から付きまとわれている。

そう、入学式からだ。これってもうストーカーじゃね？
とか思っているのも事実だ。

家まで尾行してくるとかそんなんじゃないよ？

あいつの言い分は

「一緒に野球やろうやー!!」

今日も懲りずに来たよ……

「だから、何度も言ってるが俺は中学で野球をやめたんだ。勧誘な

「他当たれ」

「んなこと言わずにワイと一緒に野球やるつや、きっと楽しゅうてしゃあないで！」

こいつの名前は『山中^{やまなか}淳^{じゅん}』俺に付きまとうストーカー、もしかしてあつちの奴か？

だとしたら、俺の身が危ない。

……まあ、今は置いておこう。

公共の場では襲われる心配は無いはずだ。

「しつこい奴だな。」

第一なんで、お前みたいな奴がこんな公立にいるんだ？
強豪校からの勧誘だってあったはずだ」

そう、この山中は中学時代、近畿圏内では名の知れ渡ったスーパ
ー中学生だった。

あえて、甲子園への困難な道を選び選んだバカなのだろうか？
現実はその甘くない。

「何いってんねん。」

そんなこと言うたら、お前もやるが。

弱小チームを全国大会ベスト4まで導いたエース 神谷 功」

あーあ。行き成りやってくれたよ。

俺、自慢するの好きじゃないって言っただばかりなんですよ？

「野球は中学でやめるって決めてたんだ。
金のかかる私立より家から通えて金のかからない公立に来るのは当

然だろ？」

「よし。」

なら今日からまた始めよ」

このやり取り。

かれこれ一週間続いてるんだぞ？

いい加減あきらめろって。

「お前がどれだけ真剣でも俺の気持ちは変わらない。じゃあな」

「ホンマにええんか！？　今しか甲子園を目指せへんねやぞ！！！？」

「……お前と違って俺はその場所にそこまで興味を持てねえよ」

全く今日もあいつのしつこい勧誘に疲れたぜ。

自室のベッドでとりあえず昼寝でも……

「ん？ おかえり」

「貴様、人の部屋で何をしている？」

「掃除。」

だつて、功の部屋汚いもん」

今、俺の部屋否、俺の家に上がり勝手に掃除していたのは、俺の幼馴染の女の子『さいとう まい齊藤 舞』

地毛の茶髪にセミロングの髪、顔は可愛い部類に入って相当モテる。

俺が聞いた話だけでも中学時代から何回も告白されている。

それなのに一度も彼氏が出来たことないのには不思議だが、こいつは中学時代ある伝説も持っている。

中学時代、近所の不良を無双し一掃。

その後、この付近一帯に平和をもたらしたと言うプチ都市伝説。こいつはとにかくモテるが女子とは思えないほどケンカが強い。これもきつと中学2年までやってた空手のせいだろう。

「いくら幼馴染とはいえ最低限のプライバシーは守れ」

「あんた、いつからあたしに意見するようになったの？」

「やっやばい！」

指をならすあの動作は戦闘態勢に入ろうとしている！！

山中の勧誘に少しイラついていた！

このままでは俺の命が！！

「まつ待て！　俺が言いたいのは思春期の男の部屋に入るなという意味だ」

「へー、なんで？」

察してくれそのくらい！

「なんででもだ。お前だって部屋に見られたくないものくらいあるだろ？」

「無いよ」

……年頃の女の子ってそうなの？

「とつとにかくだ！　自分の部屋くらい自分でするから勝手に荒らさないでくれ！」

「こんなのが見つかるから？」

そっそれは！！　ベッドの下というベタな場所に隠していたあの本！！

何かは男の子なら分かるよな。

「とりあえず返せ」

「まだ18歳でもないのにこんなもの持っていていいと思ってるの？」

俺だって男だ！ 興味持って何が悪い！！
なんて、恐ろしくて言えない。
こうなったら……

「じゃあ、お前を襲えって意味か？」

「へ？ ちょちょっと何言ってるの！！？」

よし、動揺したな。
意外と押しに弱いことは知ってるんだぜ。

「だって、仕方ないだろ。
お前は見知らぬ子を襲えって言っのか？」

「スっストップ！ なんで、そうなるの！！？ 一回離れて！！」

「嫌だって言ったら？」

「そっそれは……」

まったく、赤くなりやがって顔が可愛いつてことを自覚しろ。
このままだと俺の理性が危ない。
目的の品は返してもらっぞ。

「あつ！　こらー！！」

「これは返してもらっぞ」

「あんた……あたしをからかったわね？」

落ち着け俺、ここで選択を誤れば俺はあの世へ一直線だ。

ここで打てる最善策は無言でこの戦闘区域から脱出することだ！！

「……………！！」

「な！？　待ちなさい！！」

第2話 この変態！

「本当にすいませんでした」

俺は今、舞に土下座中。

なんでかって？ 捕まったからに決まってるだろ。

「まあ、いいわ。

あの本は捨てとくから。今度似たようなもの見つけたら……分かってるわね？」

俺の命が消えるってことだろ。

バッチリOKだぜ

「はい」

「よろしい」

じゃあご飯にしましょ」

あああ。あの笑顔が怖いよ。

晩御飯に毒をもつてくるとかそんな裏技は無いよな……

残りの物もいますぐどうにかせねば！

S i d e 齊藤 舞

ホント信じらんない！

あんな本をベッドの下に隠し持ってたなんて！

まだ、出てくるかもしれない、今度は詳しく調べなきゃ。

……それにしても、あたしを襲うって……

そつそりや、それはそれで悪い気はしないけど、もっとこう……
段取りつてものが……

ダメダメ！ 思い出しただけでも顔が熱くなってきた。
早く忘れなくちゃ。

にしてもあの鈍感バカも気づかないかなー？

いくらあいつの両親が仕事でアメリカに居て家で1人だって言う
ても。

普通こうやって毎日ご飯つくりに来るわけないでしょ。

ホント鈍いんだから……功のバカ！

「功、ご飯出来たよー」

S i d e o u t

「功、ご飯出来たよー」

「へーい」

ケンカ強いくせに料理とか女の子らしいことは割りとよくこなすんだよねー

こいつの腕っ節の強さを知らない男子からしたらもうそりゃ最高なんじゃない？

「んー、相変わらず。美味しい」

「バカ言つてないで。早く食べなさい」

満更でもないくせに。

でも、美味しいのは事実だ。

俺も料理は少しくらいなら出来るが舞には全く敵わない。

それにしてもこいつは3食全部俺の世話をしてくれるのに俺に何も見返りを求めてこないな。

一体求めているのだろうか……俺にはさっぱりだ。

「功、あんた。」

何か運動部に入らないの？ 運動神経良いのにもったいないよ」

「やらねえよ。しんどくせえ」

「……そっか。そうだね、功が野球以外するわけないか」

「その野球をやめるんだ。」

他のスポーツなんてやる気は無いし、俺にそんな資格は無い」

「そんな言い方しなくても……」

「これは俺なりのケジメだ。

……ごちそうさん。今日も美味かったよ」

そうだ、俺は野球をやっちゃいけない。

あんなことを…… 1人の野球人生を奪った俺が野球をするなんて許されないんだ。

S i d e 斉藤 舞

あいつは何時になったら自分を許すのだろう。

あれは事故だったのにいつまでも引きずって……

あんなに楽しそうに野球をする功をもう見られないのかな？

自分の感情を押し殺して、他人と距離を置いて過ごしていく日々
の中にあんたは満足なの？

S i d e o u t

ん？ 朝か……

昨日はメシ食ったあとそのまま寝たのか。
学校まで時間あるしシャワーくらい浴びるか。

「ふあゝ、舞の奴に起こされずに起きるのは久しぶりだな」

あいつのおかげで遅刻は免れてるし目立つことなく高校生活がスタート出来た。

たまに口うるさいこともあるけど至少くらい感謝しないとバチが当たるってもんだ。

あゝ、朝のシャワーは気持ちいい。

「あ、パンツしか出してねえ」

なんてこった、まだ4月上旬だぜ。
ぬれた身体には寒すぎる。

早いところ上を着ないと……あ……

俺の目線の先には目を丸くする舞の姿。

「よっよう。おはよう」

「……きゃあああー!!」

はい、朝から素晴らしい絶叫ありがとう。

何これお約束ってやつ？

母さんが舞に渡した家の合鍵返してもらった方がよかったかな？
たまに早起したらこれだよ。

「なんで朝からパンツ一枚なの！！？」

「シャワー浴びて出たら、お前がたまたまいたんだろ！！」

ちなみに俺もう服着てるからね

「昨日といい……この変態！！」

「な！？ ちょっと待て。

昨日のことは俺に非があると認めよう。

だがな、風呂場から出てきてパンツ一枚くらい別にいいだろ！！」

「女の子にそんな格好して。

恥ずかしいとか思わないの！！？」

「お前と俺の仲なんだからいいだろ！！」

決して幼馴染の裸を見て興奮しないって意味じゃないからな。

最近女の子らしい体つきになってきたスタイル抜群の年頃の異性の裸なんて耐えられるわけねえだろおお！！

……俺は何を言ってるんだ？

にしても、今日も山名の奴来るのかなー？
いい加減諦めて欲しいもんだ。

第3話 勝負やな（前書き）

主人公を野球に誘うやつ＝関西弁をしゃべるやつ

すいません、作者の勝手な偏見とこだわります。

第3話 勝負やな

ん、すばらしい晴天だ。

昨日テルテル坊主を逆さまに吊るした意味を疑うほど、すばらしい晴天だ。

「はあ、何が体力テストだ」

疲れるだけじゃん？

正直めんどくさい、俺だけじゃないはずだ、この気持ちを抱いているのは。

適当にやって過ごすか。

「よう！ 神谷！ 気は変わったか！？」

元気のいい声で山中が俺に話しかけてきた。

ふう、朝からめんどくさい野球バカに絡まれた。

こいつ、隣のクラスだからずっと一緒じゃん。めんどくせえ

「あのな。

いい加減しつこいんだよ、あきらめろ」

「よし、ならこの体力テストでワイより上やったら諦めるわ」

おいおい、すでに超高校級の身体能力を持つてる。
お前に勝てるわけねえだろ。

「嫌だね。そんな勝負だれが受けて「受けるわ！」な!？」

舞!？ お前何勝手に答えてくれてんだ!？

「どうせ、功が勝つんだからいいでしょ？」

「バカ野郎、こいつに勝つとなると俺も本気でしないと」「よっしゃあ！ 勝負やな神谷！」はい？」

山中、お前も話を聞け！ 俺は一切認めてないぞ！ そして、返答を聞く前にどこかへ行くな!!

「嬉しそうだったわね。彼」

「お前のせいだぞ、どうしてくれんだ？」

「負けなきゃいいのよ」

めちやくちや言いやがって。
にしてもキレイな太ももしてるな

「っ！ 見るな変態！」

なっ!？ 下心がばれたか!？
今度から注意せねば。

「見てない」

一応、否定はするよ。

「よく、言っわ。まあ、とにかく頑張ってね」

「おう」

しんどくせえ。

山中のことだからそりゃ凄い記録出すんだろっなあ。

はあ、本気でやらないと負けんじゃん……俺目立つのって嫌いなんだよね。

疲れたあ。残す種目も後、50m走のみ！ 長かった……ここま
でホント長かったよ。

とりあえず行けるとここまで全力できたが、身体がもたん。
俺も歳だな……

「よう！ 調子はどないや？」

またお前か……

「ぼちぼちだ」

俺は点数の種目の成績によって記入された紙を見せ付けた。
我ながらなかなかの点だ。

「ふん。なんやワイと同じか」

「マジかよ」

つまり、この50m走で決着てわけね。

「ワイと一緒に走ろうや」

「嫌だ。第一、名前順なんだから無理に決まってるだろ」

「ちょっと待つとれ、先生説得してくるわ」

ほんとに行つたよ。

あいつキャッチャーだったよな？

足速いのかな？

「よっしゃ、勝負やで神谷」

……ホントに横に来たよ。
どんな手使ったんだ？

「はあ、覚悟決めるか。
お前中学時代のタイムは？」

「6秒7や」

本気で走れば問題無いか。
俺の身体が鈍ってなければだが。

「位置についてよーい……」

「俺の勝ちだな」

「ちょちよつと待て！ お前がそんな速いなんて聞いてへんぞ！」

「誰が遅いだなんて言っただよ」

結果は俺が6秒2で山中が6秒5。

周りからは賞賛の聲が上がっている。

「まあ、諦めてくれ」

さてと、点数記入してカードを提出だったな。

俺の点数は……6秒5以下で10点か。

じゃあ、俺は10点……待てよ。

これって山中も10点ってことじゃ。

「あつ、ワイも10点や」

気づくな！ 引き分けなんてまた話がややこしくなる！

「引き分けやなあ、でも約束は約束や。
ワイはお前の勧誘あきらめるわ」

えらくあつさり手を引いたな。
もっと、絡んでくると思ってたんだが。

「そうか、熱心に誘ってくれたのに悪かったな」

「気にすんなや。」

ワイらだけでもなんとかなと思うわ」

どれだけの面子が集まってるか知らないけど。
そんな甘いもんじゃないだろ。

「本気で行けると思ってるのか？」

「それは今からのワイら次第や」

真っ直ぐな目だな。

お前みたいなバカが一緒だと考えることが少なくて楽そうだな。

……神鳥。

お前は今どうしてる？

第4話 こうにいい！

山中の勧誘から解放され2週間がたった。

これは噂だが山中はもうレギュラーで試合に出てるらしい。

まあ、そこら辺の高校生とは格が違うからな。

「俺は宿題でもこなすかな」

ん？ これは誰の靴だ？

学校から帰り玄関を開けて俺の目に飛び込んできた見慣れない靴。

どろぼう？ でも、男の物にしては小さいし第一きちんと並べ過ぎだ。

人の家を泥棒しようと言うのにまるで危機感がない。

この家はなめられてるのか？

「つたく。誰だ……」

「あつ。」

「こうにいい！！」

何故、お前がここに居る！？

それに人の家のリビングでくつろぎすぎだ！！

「こうにいい！」

会いたかったよぉー！！」

「おいこら！」

抱きつくな！ 離れる！」

キレイに並べられていた靴の持ち主は斉藤 愛。
舞の1つ年下の妹。

ショートカットの髪をしていて舞と同様キレイな顔をしているが妹とあって少し幼い顔をしている。

ソフトボールをしていて、最近部活も忙しく顔を見たのは久しぶりだった。

「久しぶりなんだし、いいじゃん！」

「いいから、離れる」

「愛。功から離れなさい」

なんだ、舞も居たのか。

靴は無かったと言うことはまた、ほぼ舞の部屋に隣接している。俺の部屋から入って来たのか。

「やだ！ まいねえ何時でもこうにいの部屋に出入り出来るじゃん。だから、今は愛が甘える！」

むちゃくちゃだ。

誰か助けてー

年下に手を出すつもりはまだ無いよー

「功が困ってるでしょ」

お前の勝手な出入りにも困ってんだよ。

玄関から入れ玄関から！

「まいねえ、いつも理由こじつけてこうにいと2人と一緒にご飯食べてるくせに」

「な！？ あたしが作ったんだからそこで食べるのは当然でしょ！」

何が当然なんだ？

作ってくれるのはありがたいが……

「ずるい！ 愛もこうにいと一緒にご飯食べる！」

お前も何を言っているんだ？

「あんたねえ！ ちょっと来なさい！」

「こうにい！」

まいねえがいじめる」

俺を巻き込むな！

お前らの姉妹喧嘩に巻き込まれたら俺の身がもたん！

「まっまあ、舞、落ち着けて。

愛が怯えてるぜ」

「功…… あんたならどうすればいいかわかるわよね？」

指を鳴らすな！

仕方ない何より自分の命が一番大事だからな。

「許せ、愛」

「やだやだ！

まいねえ、最近容赦ないもん！！

こうにい、一緒にご飯食べてもいいでしょ！！？」

うつ、そんな上目遣いで見られると……

「まっまあ、いいじゃんねえか？

人数多いほうがにぎやかだよ」

「やったー！

こうにいがOKしてるからまいねえも文句ないよね？」

「つち。

勝手にしなさい」

こえー

今、舌打ちしてましたよ？

これに動じない妹とは……なかなか愛も頼もしく育ったな。

兄ちゃん嬉しいぞ！！

……ホント俺は何言ってるんだろうか。

「こうにい。

よろしくね！」

だから、抱きつくな。

第5話 俺。食べ物じゃないぞ？

Side 斉藤 愛

始めまして斉藤家の次女、愛です。

今、こうにいと2人でゲームしてます。

まいねえは今、後片付けで忙しいから、2人っきりです。

ああ、この時間がずっと続けばいいのに。

「ねえ、こうにい。

彼女できた？」

「出来てないよ」

よかったあ、こうにいモテるからなあ。

実際あたしの同級生にも紹介して欲しいという子はけっこう居た。
全部断ったけど。

「まいねえと進展は？」

「なんのだよ？」

こうゆう時こうにいが鈍くて助かる。

でも、あたしの気持ちにも気づいてくれない……それどころかず
っと妹扱いで女としてみてくれない。

こうなったら、中3には少し早いけど……

「ねえ、こうにい。

今、2人っきりだよね」

「それがどうした？」

「これから、こうにいのこと食べちゃおうと思って」

まいねえごめん！

妹のわたくし、こうにい押し倒します！

「……俺。

食べ物じゃないぞ？」

そうだ、こうにいつてちょっと天然だったんだ……

「ちつちがつよ！

そうゆう意味じゃなくて！」

「じゃあどうゆう意味だ？」

こうにいひどい……

S i d e o u t

「じゃあ、どうゆう意味だ？」

急に意味不明な言い始めるし。

急に顔を赤くしてもジモジし始めてどうしたんだ？

「そっそれは、その……」

「その？」

「こづゆつことー!!」

うわ！ 行き成り抱きつくな！

「えーっと、愛。

どいてくれるかな？」

「やだ」

やだつて、この構図はどう見たって俺がお前に押し倒されてるだろ！

やばいってこんな状況舞にでも見られたら俺の命が！！

「お前、ホントに急にどうしたんだ？」

「ねえ、こうにいはどうしたらあたしの事、1人の女としてみてる？」

「はい？」

思わず声が裏返っちゃった。

て、言つか愛、お前が乗ってるのは俺の息子の……

「こうにい、気づいてるんでしょ？」

あたし……こうにいのこと……「お二人さん何をしてるのかな？」
え！？」

やべえ、終わった……

「まったく！ あんたはあんな本を隠し持つといてあげく！
幼馴染の妹！ しかも中学生に手をだすつもりだったの！？」

俺は今、舞に説教くらってます。

愛は自宅へと強制送還。

「ちっ違う！ そこまで飢えてねえよ！
あれは愛が押し倒したって言うてんだろ！」

そして、俺はさっきから、弁解をしているんだが聞く耳を持って
くれない。

このままじゃ俺の身があぶない。

でも、さっきのあれは結構惜しいシーンだった。

「何考えてんの！」

「ぐふ！」

相変わらず、素晴らしいパンチだ。

見事に俺のボディを捕らえたぜ。

今は悶絶してるがこのまま引き下がる俺様じゃないぜ

「少しは反省しなさい！」

まずは深呼吸だ。

ス〜ハ〜ス〜ハ〜、よしこれで話せるぞ

「まあ、待て。

反省するよりも俺はお前にやってもらわなきゃならんことがある」

「なっかなによ？」

お前が動揺するパターンなんてこっちは把握済みなんだぜ！

「男としてはさっきの状況はなかなか惜しいものだった。

そこでだ……」

「そこで？」

許せ、舞！

お前を押し倒すのはあくまで理性ある行動だ！

断じて本能に任せた行動ではない！

「ちょちよつと、どいて！」

「やだよ、お前にさっきの続きやってもらつから」

「じょ冗談よね？」

それいけ！

もう一押し！

「マジだよ。」

愛も帰ったし今、この家には俺とお前2人つきりだろ」

「でっでも、あつあたし。」

こうゆうの初めてだから……」

そんなに顔を赤くして言わなくてもいいのに。

もう少しいじめてみたいが俺の理性も結構やばいんでこの辺で。

「冗談に決まってるんだろ」

「へ？」

……そう、そうゆうことね、何か言い残すことはある？」

この後、俺は顔を耳まで赤くする舞に木っ端微塵に粉碎された。

第6話 何がオリエンテーション合宿だ

見知らぬ新生どうしが仲良くなるきっかけは？

もちろん色々あるだろう、いつの何か友達になっっていることなんてザラだ。

ただ、中には人見知りで友達の出来にくい人だって居る。そんな人たちのためにあるのが……

「何がオリエンテーション合宿だ」

俺は合宿場へ向かうバスの中ため息混じりにそう呟いた。

そう、うちの新生、学校恒例行事『オリエンテーション合宿』

別名『とりあえず、色んな子と仲良くなるうぜの会』

なんでも、ある場所に2泊3日するんだとさ。

「友達つくるチャンスじゃん。

元気だしなって」

窓際の俺の席の隣に座るのは幼馴染の舞。

クラスが一緒とはいえ何故お前が俺の隣なんだ？

「功が席決めのとき寝てたからでしょ」

俺の心を読んだ発言をするな。

お前はまず他の男子に人気があることを自覚しろ。

周りからの視線が痛いんだよ！

「とりあえず黙れ。」

それにオリ合宿で友達を作る気なんてない。
ああ、早く帰らせてえ」

「あら？ もうホームシック？
功は相変わらず子供だね」

くそ、反論はしたいが……
俺はまだ自分の命が惜しい。
ここは変化球で攻めるべしだ。

「うるさい。

お前こそ自分の家以外で寝れんのか？
中学の時はびびって寝れなかったくせに」

「あんた……それをあたしが気にしてたこと分かったの発言？」

やっやばい！

地雷を踏んだか！？
隣から、その距離20cm以下の距離からバシバシ殺気が！

「じょ……冗談です」

「帰ったら覚えときなさい」

怖いよあ。

俺は一体何されるの！？
はあ、短い人生だったなあ。

「ふあ、疲れた」

俺はあくびをしながら宿舎1階のロビーを歩いていた。
泊まる場所は少し小さめのホテルみたいな場所だった。

1階から8階までであるが俺らが使えるのは5階まで。

1階はただのロビー、2階は食堂や風呂やら男女共同で使うもの
だらけ。

3階は男子、4階は女子が泊まる部屋があり階同士での行き来は
禁止。

5階は先生たちが使うから、異性と会いたいなら1階か2階しか
ないと言うのが現状。

そして、各階には巨大な体育館に繋がる通路がある。

合宿中のオリエンテーションはそこでするらしい、開会式もそこ
で行った。

そして、現在夜7時。

「よう！ 神谷、こんな所で何しとんや？」

めんどくさいのが来ましたよ。

「山中か、別にその自動販売機で飲み物買ってただけだ」

「ほーう、確かに持つとるけど、ほんまか？」

実は彼女と会ってたとかちゃうんか？」

「彼女なんていねえよ」

「いつも一緒に来てるあの子、斉藤とか言う子や。付き合ってるんのやろ？」

いつの間に俺と舞がそんなことになってるんだ？
あんな奴と付き合ったら身体がもたん。
これは早く誤解を解かねば。

「あいつはただの幼馴染。

彼女とかそういうやましい関係じゃない」

「なんや、おもんないわあ。

でも、これは喜びそうな女子がたくさんいそうやな」

「どうゆつことだ？」

「お前結構女子の間で噂になつとるで。」

斉藤と付き合ってるから、皆ほぼ諦め状態やけど」

まあ、確かに容姿だけ見たらかなりの美人だしな。
あの暴君のような性格さえなんとかなれば……

「これは神谷争奪戦が勃発しそうやな」

何をこいつは言ってるんだか……

「冗談は……ん？」

「どないした？」

ロビーを歩く俺たちの目に飛び込んできたのは

2人の男とうちの女子生徒、軟派かな？

男たちが何やら色々言っているが女の子は断固拒否の意思を見せ
ている。

「ワイが止めに言ってもいいけど、ここは女子にモテモテの神谷君
の出番やな」

「やつかいごとに巻き込まれるのはごめんだ、先生でも呼んでくれ
ばいいだろ」

「まあ、そう言わず、行つて来い！」

「ちょ！」

バカ、やめ……ぶ！」

いってー、山中に押された勢いで鼻をぶつけた。

……ぶつけた？ 何に？

「おい、ガキ。

ケンカ売ってんのか？」

今なら安売り！

って関西らしく答えたいけど、何この状況？

男2人がバシバシ睨んでくるんですけど……

「お願いです！ 助けてください！」

ああ、女の子にそんなこと言われたら逃げられない……って山中お前は何楽しそうに笑ってたんだ！

少しは手伝ええええ！！！！

「死ねガキ！」

はあ、ホントめんどくさい。

第7話 今日は何日だ

「これで終わりだな」

そう呟く俺の目の前には腹を押さえて倒れる軟派男×2
幼少期から伊達に舞の猛攻に耐えてるわけじゃねえっての。
正直そこら辺の不良なら俺は負ける気はしない。

「どうも、ありがとうございました！」

私、北川 沙希って言います、本当に助かりました」

これって何か変なフラグ立ててないか？

「別に気にしなくていいよ。」

俺は神谷 功、北川さん、何組？」

「1組です、神谷君同じクラス……」

なにい？ こんなかわいい子覚えていないぞ。

黒髪のロングをしているかわいい子……ダメだ。

俺の検索にはHITしない。

「そっか……一緒のクラスか。」

ごめん、全然覚えてないや」

「神谷君、いつも寝てるもんね」

この子結構、直球勝負だな。

「なんで知ってるの？」

「そっそれは……その……」

そんな目線を逸らさなくても……
もしかして、俺避けられてる！？
初めて話す女子に避けられるって……

「こら！ お前たち何してるんだ！」

やば！ 先生来ちまった！
山中あああ！ 笑ってないで助けるおおお！

「くそ、今日は厄日だ」

現在夜の10時、約3時間の説教を受けて俺は釈放された。
北川は30分で釈放だったんだが……。

「ごめんね、私のせいで」

どうやら、俺が取調室（という名の説教部屋）から出てくるまで
待ってくれてたようだ。

「気にすんなって、山中が全部悪いんだから」

そう、あいつが全ての原因だ。
今度あったらぶっ飛ばしてやる。

「じゃあ、私はこれで。
おやすみなさい」

「ああ、お休み」

俺もさっさと部屋に帰って寝るか。
今日は疲れた。

Side 北川 沙希

私が部屋に戻ると同室の斉藤さんが話しかけてきた。

この子……確か神谷君といつも一緒にいるけど、どうゆう関係なんだろう？

「北川さん、大丈夫？ 変な男たちに絡まれたんでしょ？」

「大丈夫だよ、神谷君が助けてくれたし」

「へ？ 功が？」

「うん、男2人倒しちゃった。

ねえ、前から聞こうと思ってたんだけど。

斉藤さんって神谷君と付き合ってるの？」

「あつあたし？

ないない、ただの幼馴染ってだけ」

顔を赤くして否定……まさかとは思っけど。

「神谷君のこと好きなんだ？」

「いついきなり何言ってるの！？」

これは凶星っぽい。

斉藤さん男子から人気あるのは知ってたけど神谷君が意中の相手

だっ
たとは。

「なるほどねえ……」

ねえ、神谷君について色々教えてくれない？」

「いいけど、功のこと知っても面白くないと思つよ？」

「いいの、興味があるだけだから」

そう、興味があるの。

だって、私は彼のことを恨んでいるんだから……

第8話 デート！

「えー、ではこれでオリエンテーション合宿の閉会式を終わります」
終わったあ、この謎の2泊3日も残すは帰宅のみ！

「ねえ、神谷君」

「ん？ 北川か。
何かよう？」

このオリ合宿中やたらと俺は北川に話しかけられた。
初日にあつたことを「気にしなくていい」と言っただけなんだが

……

「少し聞きたいんだけど。

野球はやらないの？

山中 淳君だっけ？ 彼に熱心に誘われてたじゃない」

「……中学で野球はやめたんだ。

高校では特に何もするつもりはない」

「それだけの才能を持っていながらもつたいない。
舞ちゃんも野球してほしそうだったよ」

舞ちゃんって……

いつの間にそんなに仲良くなつたんだ？

「俺の知ったことか。

高校は適当に3年間過ごすよ」

そうだ、何もせずに3年間過ごすんだ。
もう忘れるんだ、野球のことなんて。

3日も離れてるとなんだが懐かしいな我が家は。
久しぶりに自分のベッドで寝るか。

―ガチャ―

ん？ 今のは玄関のドアが開く音。
まっまさか、泥棒か！？

この家には盗ものなんて何も無い……

「こつにい！」

「ぶはー！」

愛、入ってきたのはお前だったのか……

行き成り抱きつくな、勢い余ってこけそうになっただろうが。

「愛…… お前なんで俺がいるって分かったんだ？」

「女の勘！」

ねえ、こつにい今日こつちの家で寝ていい？

こつにいても明日休みなんですよ？」

女の勘って恐ろしいですね……

加えてこの子は何意味のわからないことを言ってるんだ？

「そんなことは舞が許さないだろ？ それに俺も許すわけ「ダメえ？」「うつ」

くそ、女の子の上目遣いに俺は勝てないのか！？

現在俺は携帯で舞と会話中。
内容はもちろんあの娘さんのことで。

『愛が泊まる！？』

「ああ、どうあっても帰る気は無いらしい。
着替えも持ち込んで準備万端ってやつだ。
晩飯は2人でどっか食べに行くよ。
お前も今日は疲れてるだろうからゆつくりしといてくれ。」

『ちょ……はあ、あの子ったら。
何かあったらウチに追い返していいからね』

「了解」

ふう、舞にも話をつけたし、後は晩飯だけだな。
何を食べに行こうか……

「こうにいい。」

まいねえ、怒ってた？」

「ん？ あー、別に怒っては無かったぞ。
なんかあったらお前を家に送り返していいとは言われたけどな」

「じゃあ、大丈夫だ。」

「こうにはそんなことしないもんね」

「お前がいい子にしてたらな。」

「支度は出来たか？ さっさとメシ食い行くぞ」

「うん！」

外に出て行き成り抱きつくな。

誰かに見られたらどうする気だ。

「愛、頼むから離れてくれ」

「少しくらいいいじゃん。」

「これくらいいしなきゃ雰囲気出ないし」

「何の雰囲気？」

「デート！」

中学生とデートってねえ。

みなさん、どう思います？

第9話 お腹空いてないか？

「こうにいい、ご馳走様でした」

「どういたしまして」

はあ、俺の残り少ない今月の小遣いがファミレスの料理となって消えたよ。

来月からは使い方を改めよう。

「さて、帰るか」

「ええー、少し遠回りしてかえろ」

「却下だな。」

一応俺はお前を預かってる立場なんでな、何かあったら責任は取れないしな」

「こうにいのけち！」

その代わり夜は知らないからね！」

これは危険な予感……

ここは1つ……

「愛、小腹空いてないか？」

あの店のクレープ買ってやるよ」

「ホント！？
やったー！」

フツ、ちよろいな所詮は子供か。
舞も甘いもの好きだからな、この姉妹は似ていて助かる。

「でも、愛の機嫌はなおらないからね」

……俺の心が読める所までそっくりだな。

ブーブー

愛が風呂に入っている間、漫画を読んで寝転んでいた俺の耳に響く携帯の振動音。

こんな時間に誰だ？

ーメール1件ー

『北川です。明日空いてる？』

もし、空いてるなら10時に駅前に来てくれない？
少し用事があつて』

そういえば北川にアドを教えたな、俺はオリ合宿に携帯忘れたから登録はまだだけど。

……しかし、これはもしや、あれな展開ですか？

「大丈夫、じゃあ、10時に駅前ね。了解つと」

送信完了。

用事ねえ……ややこしい用事じゃなきゃいいんだけど。

「こうにい、今だれとメールしてたの？」

愛か、お前の寝室は両親が使っていた隣の部屋だと言ったはずなんだが……

「クラスの女子だよ。

あ、俺明日、10時前に出かけるからそれまでに家に帰れよ」

「まつまさか!？」

その人とデート!？」

「ちげえよ、ただ、呼び出されただけだ」

Side 斉藤 愛

「ちげえよ、ただ、呼び出されただけだ」

こうにいは恐らく嘘は言っていない。

でも、休日に女の子と会うなんてデート以外考えられない。
それにこうにいが休日にまいねえ以外の女の子と会うなんて初め
てのはず。

中学時代は野球で忙しくて休みの日もずっと野球してたし。

じゃじゃあ、こうにいの初デートが愛の見知らぬ女!?

わーん、何気にショック……

「その人、なんて名前?」

「は? お前が知ったところで仕方ないだろ」

「教えて!」

「そんな、身を乗り出すなよ……
知ってどうする気だ?」

だって、気になるもん!

でも、こうにいはきつとちゃんとした理由がないと教えてくれな
いし。

かといって愛の理由はこうにいには言えない理由だし。

「お願い教えて!」

「何わけの分からないこと言ってるんだ?
それにもう寝ろ、もうすぐ日付が変わるぞ」

むゝ、どうしても教えてくれないなら。

「愛、今日はこうにいと一緒に寝る!」

「は？ お前何言って……って、俺のベッドに入ってくるな！」

これでこうにいは逃げれない。

普段甘えないしついでに今甘えておこつと！

「電気消すよ〜」

S i d e o u t

「電気消すよ〜」

はや！

人のベッドに潜りこんでからの一連の動作。

その無駄の無い動きはもはや芸術の域と言っていいたいだろう。

「愛、頼むから、隣の部屋で寝てくれ」

「なんでえ？」

そんな物をねだる様な目で俺を見るな！

何より俺の理性が危ないし、こんなこと舞に知られたら俺の命が！

「なんででもだ、それに愛が出ないなら俺が隣で寝る」

「それはダメ！」

脱出間際に愛に抱きつかれそのままベッドへ再ダイブ。
愛と向き合うような形になってしまった。

この状況はいろまづくありませんか？

「……こうにい」

不覚にも名前を呼ばれて一瞬ドキつとしてしまった。
だって、息が少しかかる距離だよ？
これもう俺の理性と本能の戦いじゃん。

「愛のこと嫌い？」

「嫌いなわけないだろ。
愛は俺にとって妹みたいなもんだ」

「こうにいのバカ！」

うぐ！

いざ言われると結構ショックだな。
そんな怒ることか？

「愛、なんで怒ってるか知らないけど機嫌直せって」

「スー……スー……」

「おい、無視してないでって寝てるのか」

そりゃもう、可愛い寝顔で寝てるよこの爆弾娘さんは。
はぁ、いきなり怒るし気づいたら寝てるし一体俺が何したってんだ。

誰か教えてくれ……

第10話 俺のお気に入りだよ（前書き）

そろそろ野球タグを発動させます。

第10話 俺のお気に入りだよ

「えーでは、これより試合を始めます」

「「お願いします!!」」

……今の状況を説明しよう。

俺は草野球に参加中、つーか今試合が始まった。

ここに至るまでを今日の朝から順を追って説明しよう。

10時に北川との約束通り駅前に行った。

←
何故か山中が居て、「ついて来い」と言われ、連行された。

←
気づけばボロい野球場に着いた。

←
強制という名の草野球参戦。

……俺の意思は？

「おい、山中。

なんで俺が参加しなきゃいけないんだ？」

「さっきも言ったやろ。

1人、遅れてくるまでやって」

「だから、神谷君よろしくね」

なんでも北川は野球部のマネージャーらしい。
それで山中と繋がりがあったのか。

「おまえ神谷が投げたら試合にならんからな。
外野で勘弁してや」

「……エラーしても怒るなよ」

「楽しい草野球しようや」

はあ、ピッチャーしないならギリギリOKか。
今すぐ逃げ出したいが北川に笑顔で「頑張つて」とか言われたら
なあ。

適当に頑張りますか。

・ ・ ・ ・ ・

「神谷あ！

一本頼むでえ！！」

「神谷君ファイト！」

ノーアウト ランナー二・三塁。

打席には9番を希望したのに『若いから』を理由に3番になった俺。

ネクストには4番の山中。

相手ピッチャーは30代ぐらいの人でボールの速さは100km
ぐらい。

速さも問題ないし、右投げのピッチャーのボールは左打ちの俺には見えやすい。

その初球、甘く入った外寄りのストレートにバットを振り切った。
痛烈金属音と手にボールの重さを残して打球は左中間へ抜けて行
った。

先制タイムリーツーベース、我ながらなかなかの当たりだった。

神戸にあるとあるスポーツ雑誌を出版する事務所。
休日のオフィスに2つの影。
パソコンに向かう男が画面に向かって口を開いた。

「ふあゝ、だりいゝ」

「藤井さん！
早く仕事してください！
雑誌の締め切りもう過ぎてるんですよ！」

「まあ、そう急かすなよ、飯村。
それより、昨日の『阪神対広島』見たか？
阪神惜しかったなあ」

飯村と呼ばれた女性。
長い腰まである髪に眼鏡の奥にある少し釣り目の瞳は
相手に強い印象を与えていた。

「はいはい、分かりましたから。
早く仕事してください！」

まだ新人の彼女にとって雑誌の締め切りを遅れるなんて考えられないこと。
仕事がかどっていないにも関わらず、のんきに手を動かす自分の上司に気も立っていた。

そして、その上司藤井と呼ばれた男は無精ひげを生やし。
体からは煙草の匂いが立ち込めている。

「にしてもよ。」

こうやって、今年の高校野球の記事作っても今年の1年で目玉になりそうな選手はいねえよ」

「それは前も聞きました。

そう言えば『神童』と呼ばれた子はどこに進学したんですか？」

「さあな、去年の硬式の全中に出場した全選手中、進学校が分らないのは2人。

『神童』はその内の1人だ」

「もう1人は？」

「10年に1人の逸材と言われた『神童』と唯一互角の勝負を演じた、無名選手だ。

よし！ 残業終わり！

じゃあ、飯村後は頼んだ、俺は草野球行ってくるから」

「え！？ まだその無名選手の話終わってませんよ！」

「俺のお気に入りだよ」

藤井は不敵な笑顔を残しオフィスを出て行った。

第10話 俺のお気に入りだよ（後書き）

作者は関西に住んでいるため阪神ファンです。
野次を飛ばすような過激派ではないのでご了承ください。

第11話 懐かしき場所

試合は進んで5回裏相手の攻撃中でスコアは7対5。

草野球らしい、エラーも多発した割には思ったより点は入らなかった。

ちなみに今はツースアウト、二・三塁で我がチーム（うち）のピンチ。

打席には相手チームの4番打者。

カキーン！

痛烈な当たりが一・二塁間を瞬く間に破りライトを守る俺の元へ。

「ライト！ バックホーム！！」

キャッチャーを守る山中の声が聞こえた時には俺はすでに捕球体勢に入っていた。

腰を落とし、グローブをつけた左手でボールつかみ、素早く右に持ち替え送球の体勢へ。

三塁ランナーはすでにホームを踏んでいたが二塁ランナーはホームから3mくらいの所を走っていた。

その先で山中が大声でボールを呼んでいた。

ーこれなら間に合うー

山中の待つホームへ思いつきり腕を振った。

ほぼ1年ぶりに全力でボールを投げた。
俺の投げたボールはノーバウンドでホームで待つ山中のミットに収まった。

「アウト!!」

審判の声を聞いて「ふー」と息を吐いて送球がうまくいったことに安心しながらベンチに帰ると。

山中に「さすがやな」と嬉しそうに話かけてきた。

その他の人たちも「すげえな」とか口々に俺をほめてくれた。

……久しぶりだなこの感じ。

中学時代は結構いいチームメイトに恵まれてた。

支えあい・競い合って日々を過ごした。

野球を忘れたと思うと一方でそいつらのことも忘れたと思っていたのかもしれない。

あいつら、元気にしてるかなあ。

「おい……おい！」

神谷！ 聞いたんか!？」

「ああ？」

わりい、聞いてなかった」

少し昔に浸っていた俺の脳は山中の声で引き戻された。

「ったく。

次の回、投げてくれ。

ピッチャーの人が肘が痛いそうや。

2回ぐらいならいけるやろ?」

ピッチャーか……

試合前だったら絶対断っていたけど、今は何故かそんな気はしない。

中学時代を思い出したからかな？

「ああ、分かった。

ちゃんと捕ってくれよ」

「まかしとけ！

ほな、いくで！」

嬉しそうにはしゃぎやがって。

いや、嬉しいのは俺も同じか。

マウンドに立てば心臓の鼓動が大きくなる。

全身の血が沸騰したかのように熱くなっていく。

『俺は根っこから投手なんだ』そのことを自覚してしまう。
こんなどうしようもない俺なのに……

「よっしゃ！ 来い！」

そう言いながら、ミットを力強く山中は構えた。

その顔はどこか嬉しそうで充実感が溢れていた。

思わず自分の口元が緩んだのことに俺は気づかなかった。

だって、俺の頭の中にはもう山中の構えるミットへ最高のボールを投げることしか頭に無かったから。

さあ………いってみようか。

「くそ！ この時間じゃ試合終了間際じゃねえか！」

藤井はそう吐き捨てると車を降りた。

ただでさえ、残業で試合開始には遅れたと言うのに加えて道に迷った。

月に一回程度の草野球、楽しみにしてるがゆえの焦り。

しかし、それは試合を見て、正確にはマウンドに居る投手を見て消えた。

S i d e 藤井 高志

あの荒々しいフォームに威力のあるストレート。

まさか……あの投手か！？

忘れもしない、去年の夏。

毎年見に行っている全日本中学野球選手権大会。

この中から後に甲子園で怪物と呼ばれる選手が生まれることも少なくない。

しかし、今年は1人の選手に俺も含めスタンドに居る監督・野球関係者も視線が釘付けだった。

『神童』と呼ばれる天才打者。

後に日本の高校野球界を牽引すると誰もが信じて疑わなかった。

しかし、その天才打者を圧倒する謎の無名投手。

大会前は評判の低いチームが勝ちあがってきたのも一応は納得のいく投手だった。

スタンドで見ていた俺以外の奴らは「打者のほうの調子が悪いだけだ」と口をそろえて言っている。

しかし、俺は荒々しいフォームではらつきはあるが
抜群の球威をもったボールを投げるその投手の未完成で荒削りな
才能に惚れてしまった。

あの事故もきつと乗り越えてくれると信じて疑わなかった。

後にその投手が全ての高校からの推薦を蹴り行方をくらました時はもう見れないと思ったが……

まさか、ここで再び見れるとは。

ーバシイイー！

最後までストリートで試合を終わらしてしまったか。
おっと、こんなチャンスは滅多にない。

今のうちに色々聞いておかなくとな。

S
i
d
e

o
u
t

第12話 ピッチャーを……だろ？

「ナイスピッチング！」

試合後、そう言っただけで山中は俺に声をかけてきた。気がつく俺は試合終了まで投げた。

相手のバットにボールはかすらず、6者連続三振で試合は終わった。

「そりゃ、どうも」

「なあ、やっぱもったいねえよ。ワイらと野球しようやあ」

「それは終わった話だ」

この試合で湧き上がってきた『野球をしたい』という感情を俺は自分の心の奥へとしまった。そうさ、俺はもう野球はしないんだ。

「よう！ ナイスピッチングだったな。」

神谷 功くん、それに山中君も久しぶり」

俺の名前を言っただけで近づいてきた、剃り残しの無精ひげを生やした、タバコ臭いおっさん。

山中とは知り合いみたいだけど。何者だろう？

「まあ、そう警戒しないでくれ。」

君の代わりに今日出る予定だった男さ」

お前のせいかな！

と思わずつつこんでしまったが心にしまっておこう。

「俺は野球雑誌の記者なんだが、去年君のピッチングを全国で見てファンになったんだ」

「そうっすか」

「素っ気ないな……山中君と居るってことは県立の開成高校ってことか。」

打倒・報明高校ってところかい？」

「俺、野球は中学でやめたんです」

「これマジなの山中君？」

「マジですわ。」

僕の熱烈の歓迎も木端微塵ですわ」

「いい加減あきらめろ。」

俺はもう野球はしないと決めたんだ」

「ピッチャーを……だろ？」

なんだよおっさん、その自信ありげな顔は？

「どうゆう意味ですか？」

「実はな俺、君のあの試合を会場で見ってたんだ。
君がああ事故を気にしているのは分かるさ。
自分のせいで1人の野球人生を奪ったんだからな」

「……」

「俺は別に君を責めてるわけじゃない。
ただ、あの時、君の見せた底知れない才能に惚れたんだ。
甲子園という大舞台で投げる君を見たい、1人の野球ファンとしての期待だよ」

「それは期待を裏切ってすいませんね」

「まあ、いいさ。」

「するかしないかは君の自由だしな。
俺の名前は藤井^{ふじい} ^{たかし} 高志。
縁があればまた会おう」

あれを見てなお、俺に期待するのかよ。
あのオッサンは。

『物好きな人だ』それが藤井 高志と名乗る男の第一印象だった。

S i d e 山 中 淳

「なあ、神谷あ。

あの試合ってなんや？」

「お前には関係ないよ」

んなこと言われてもなあ。

ワイとてここまで断固野球をしないと言い続けるこいつの原因には興味ある。

「山中君、誰にだって聞かれたくないことあるよ」

「北川、お前の言うことは理解できるけど、ワイだってちゃんとした理由を聞きたい」

「勘弁してくれ」

こいつは断固言わん気が。

野球をやめるほどの原因になった試合ってどんな試合なんや？

S i d e o u t

Side 北川 沙希

「ごめんね、神谷君、家まで送ってもらっちゃって」

「家の方向が一緒だったただだよ。」

山中は駅から逆方向だし」

私は今、神谷君と家までの道を歩いている。

彼が「家まで送ると」言いだして付いて来てくれた。

正直、私は自分の気持ちに戸惑っていた。

私は神谷君を恨んでいた、少なくとも始めて話す日まで。

彼は思っていた人と違って、優しくてどこか少し抜けた所のある人だった。

今、私は彼との会話を純粹に楽しんでいる。

彼のせいで私の家族はバラバラになったと言っのに……

「北川？ おーい、どうした？」

「え？ あ、うん。」

ちよつと、考え事」

私の顔を覗き込んだ彼は「そっか」と優しく微笑む。

どうして、君はそんなに優しい人だったの？

君がもっとひどい人なら……思った通りの人だったなら……

「ねえ、神谷君」

「ん？」

「神鳥 哲也って、知ってる？」

「え？」

きつとこんなに苦しまずにすんだのに。

S i d e o u t

第13話 知って欲しいだけ（前書き）

少しばかりシリアスです。

第13話 知って欲しいだけ

『神鳥 哲也』 どうして、北川はその名前を？

俺にとって忘れたくても忘れることのできない名前。

「なんで……お前がその名前を……？」

近くで鳴り響くドラムのように心臓の鼓動が耳に響いてうるさい。
体が、本能が北川の言葉を聞くことを拒否している。

「神鳥 哲也は……」

やめろ、聞くな。

「彼は……」

やめろ！

「私の兄なの」

「あ、おかえり」

「んあ？」

なんだ、おまえか舞」

毎度のことながら家に入る時は一言頂きたい。

「デートは楽しかった？」

「なんの話だ？」

「愛があんたがデートするって騒いでたわよ」

あの爆弾娘め、余計なことを。

「そんないいもんじゃねえよ」

知りたくもない、事実を知っちまったただけだ。

「わりい、俺、今日はもう寝るわ。

少し疲れたみたいだ」

「そう……じゃあ、また明日」

「ああ」

舞から逃げるかのように俺は2階の自分の部屋へと入った。

俺はどうすればいい？

まさか……まさか、北川が。

あいつの双子の妹だったなんて……

今更、謝つてすむ問題とかそんなレベルの話じゃない。

俺は……俺はどこまで行ってもあの試合の呪縛から逃げ出せないのか？

忘れることも出来ない今年の夏。

俺は全国大会のマウンドに立っていた。

相手は優勝候補筆頭の強豪チームで相手の4番打者は今大会？1の強打者。

その打者の名前は『神鳥 哲也』2つ名が『神童』と呼ばれるほどの天才打者。

しかし、試合は俺たちのチームのリードで終盤を迎えた。

そして、俺と神鳥との3回目の勝負でその悲劇は起こった。

ツーストライクと追い込んでからの3球目、俺が投げたのは渾身のストレート。

もちろん三振を取るつもりで思いつきり投げた。
試合の興奮で自分の体が思っている以上に限界だと言うことも気づかずに。

俺のストレートは神鳥の頭部に直撃した。
鈍い音を立てたヘルメットが吹き飛び、神鳥は地面へと倒れそのまま病院へと運ばれた。

数日後、俺は神鳥が俺の当てたデッドボールが原因で下半身が不自由になり、もう野球が出来ないことを知った。
周りの人は事故だから気にするなと言ってくれたけど俺の中ではそう簡単には整理は付けられなかった。

1人の将来を奪ったことは必然的に俺を野球をやめる方向へと導いた。

「私の兄なの」

昨年の夏の出来事がフラッシュバックしていた俺は次に北川の言葉の信憑せいを疑った。

北川は何を言ってるんだ？
神鳥と北川が兄妹？
あり得ない、だいいち名字が違うじゃないか。

「あの試合の後、パパはお兄ちゃんを治せる医者を見つけたと言い残し、彼を連れて家を出て行った。
ママと私は帰りも待ったけど、パパがママを捨てたことが数ヵ月後、送られてきた手紙でハッキリした。
両親はそのまま離婚した、北川の名前はママの名字。
去年までの私の名前は、神鳥 沙希」

うつうそだろ……こんなことってあり得るのかよ。

Side 北川 沙希

神谷君は動揺して声も出ないみたい。

そうだね、まさか私が『神鳥 哲也』の妹だなんて誰も分からないよ。

「私は神谷君のこと憎んでる」

あれ？ 私、何言ってるの？

「あなたがお兄ちゃんにあんなことしなかったら……」

違う、そんなことは今言いたいことじゃない。

「私の家族は……」

お願いもう止めて！ 私は神谷君に事実を知ってもらいたいだけ！
彼を責める気なんてもうないの！

「バラバラにならなくて済んだのに！」

嫌……違う！

それは神谷君に会うまでの私の気持ち。
今は……そんなこと思っ
てない！

「あ……う……」

どうして、なんで急に上手くしゃべれないの！？
早く言葉を出さないと！
私は彼を傷つけたままになっ
てしまう！

「北川……俺……」

お願いそんな悲しい顔しないで。
私は君のそんな悲しい顔見
たくない。

「……ごめんなさい！」

気がつくとは私は神谷君を置いて1人家へと走り出していた。
頬を伝う熱いものに気付かずに。

第14話 名門校のスーパーキー

高校に入学してから3カ月がたった。

制服も夏服へと移ってとうとう本格的な夏って感じの雰囲気だ。照りつける初夏の日差しよりも俺には気になることがある。

この学校にクーラーは無いのか？

暑すぎてやってられん！

「ああ、暑すぎる」

「だらしない、男なんだからもうちょっとしゃっきとすれば？」

くそ、なんで席替えで舞の隣になっちまったんだ？

席替えが始まってずっとだぞ、もう誰か仕組んでいるとしか思えない。

ちなみに北川とはこの3か月の間、口を聞いていない。

向こうが俺のことを避けているようにも思えた。

一方で山中は夏の予選も近いせいにかたまに見かけると緊張感ある顔つきをしていた。

この3カ月は俺に話しかけてきても野球部への勧誘はしてこなかった。

「もうすぐ夏休みかあ」

「7月中は補習があるから学校だけだね」

いちいち、落ち込むようなこと言いやがって。

ああ、そうですよ、俺は期末の点悪かったから皆より補習の数多いですよ！

「つーか、お前は期末どうだったんだよ？」

「ん？ はい」

舞が出したのは期末テストの点や順位が書かれた紙。
……学年4位だと？

「お前！ いつの間に勉強してたんだ！？」

「少し勉強したらこの程度のテストなんて簡単よ」

ぐう……なぜこいつはこんなチートキャラなんだ？
これで性格さえ大人しい性格だったら……

「よからぬこと考えてたらひっぱたくわよ」

心を読むのも殴るのも勘弁して下さい。

S i d e 藤井 高志

「飯村あ、俺、取材行ってくるから」

「は！？ まだ、仕事残ってるじゃないですか！」

「んー……じゃあ、お前も来い」

・ ・ ・ ・ ・

「なんで私まで……」

「編集長には俺から言っとくからよ」

そんな落ち込むなって。

こいつはもう少し融通が利くようになる必要があるな。

「で、どこの取材行くんですか？」

「報明学園のスーパールーキーの所だ」

「前、記事にしてたじゃないですか」

「直接見たいんだよ」

春・夏合わせて甲子園で3度の優勝を誇る兵庫の名門・報明学園で1年生ながらレギュラーを勝ち取ったその実力をな。

「そら、着いたぞ」

「うわー、相変わらず部員が多いですね」

新人のこいつが圧倒されるのも無理はない。

100人近い部員が2面あるグラウンドで縦横無尽に動き回っている。

一切の無駄を省いた機械的な動きで部員たちは練習を行っている。

相変わらず血の通ってない練習だな。

結果が全ての勝負の世界、しかし、俺は近年の高校野球は何か大事なもの失っているような気がしてならなかった。

「監督、御無沙汰しています」

「ああ、君か。」

また取材か？」

「まあ、そんな所です」

報明^{ほうめい}の監督は相変わらず威圧感半端ねえな。

「新井君はどこです？」

「あそこだ」

監督の指先には体中泥だらけになり三塁^{サード}手でノックを受けるスパールキーの姿。

ただひたすらにがむしゃらに練習する姿は1年生らしい初々しさを感じずにはいられなかった。

「今年の夏は（甲子園に）いけそうですね？」

「勝負はやってみないと分からん、しかし、新井の加入によって、戦力的には報明^{ほうめい}が1番だ」

確かに……いや、新井君が加入する以前から報明学園は参加校数160校を超える兵庫の絶対王者。

ここ数年はほとんど夏の甲子園は報明が出場している。

そこに近畿屈指のスラッガーの加入はまさに鬼に金棒だな。

「新井君に対抗出来る1年生は居ると思いますか？」

「そつだな……どこかの公立に進学した山中 淳ぐらいではないか？彼にも報明^{ほうめい}に来て欲しかったのだが……」

「神谷 功はどう思いますか？」

「あの子か……ダメだな。

まだ、荒すぎる。

才能が開花するには3年は短すぎる」

「しかし、もし、この3年で開花すれば……」

「他の追隨を許さないほどの圧倒的な選手になるだろうな」

やはり……あれほどの才能が歴史の闇へ消えていくのは、よくないのではないか？

何か……きつかけさえあれば。

彼は再び野球を始めるはずだ。

第15話 やっぱ悪魔だ

「こうにいい」

「ん？ なんだ？」

ただいま夕食後、部屋で愛とゲーム中。
野球ゲームなんだが0対0のなかなかの接戦だった。

「明日、愛の試合があるんだけど見に来てくれない？」

「いいよ、どうせ暇だし」

愛が試合を見に来てくれなんて珍しいお願いだな。

何回かは見に行ったことはあるけどほとんど舞に誘われて見に行
った。

「ホント！？ わーい」

ありがとう、こうにいい！」

まさか、そんな喜んでくれるとは……ハっ！

いつの間にか0対1になっている！！

「愛、お前いつの間にスクイズをした？」

「んー？ しーらない」

いつの間に人の隙をつくなんて邪道なこと覚えたんだ？

純粋な子に育ってほしかった……

「これで愛の勝ちだから、約束通りなんでも聞いてくれるよね!？」

実は試合開始前に俺が負けたら愛の頼みを1つ聞くと約束したんだが……

そんな興奮して聞くなよ。

っーか、

「そのお願いが明日の試合見に行くことじゃないのか？」

「それは別、それに、愛が誘わなくてもまいねえが誘って」

そりゃ言えてるな。

「で、何してほしんだ？」

「キス、して欲しいな」

……ワン モアー プリーズ。

「2回も言うのはずかしいよお」

「……さてつと、風呂にでも入るかな」

「ずるい! 逃げるのこうにい!？」

あつたりめえええだ!!

俺は別に愛のことが嫌いなわけじゃない。

だが、中学生に欲情するほど落ちぶれちゃいない!

「逃げるも何も無茶な頼みをするからだ。
だいいちお前なあ、最近意味の分らないこと言い過ぎだ」

「……バカ、こうにいのバカあ！」

「な？ 行き成りバカは失礼だろ……って殴るな！
痛い！ 痛いから！！」

マジで誰か愛がこんなに怒る理由教えて。
だって理不尽すぎるっしょ……

「愛、そこらへんにしときなさい」

「まいねえ……」

おお！ 舞、ナイスタイミングだ！
まさに救いの天使！

「あとはあたしが功をボロ雑巾にしとくから」

訂正、やっぱり悪魔だ。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

「で、なんで俺は愛に殴られたんだ？」

「さあ？ また、あんたが勝手に愛を怒らしたんでしょ」

愛は明日試合と言うこともあつて家へ帰宅。

舞は……なんでいるんだろうな？ 夕食の片づけは全て終わっているはずなんだが。

「はあ、最近の女の子の考えはわからん」

Side 斉藤 舞

それはあんたが鈍すぎるからでしょ！

ホント功の鈍さ……ここまで来たらただのアホね。

「一生そうやって悩んどきなさい」

「えー、理由もわからず殴られるのかよ」

「そうゆうこと」

……正直、たまに愛が少しだけ羨ましい時がある。
あたしだって功に甘えてみたい。

でも、功とはずっとこんな関係だから中々機会が無い。

この前みたいに向こうから来てくれたらチャンスなのかな？
でも……ああゆう時あたし舞い上がって何も考えられなくなるし

……

「おい、生きてるかー？」

「え？ きゃあ！」

「うお！」

いつの間にか目の前にあった功の顔にビックリしてあたしが功の上に乗る形で2人して倒れた。

功の心臓の鼓動が聞こえる。

あたしと違って全然速くないのが少し残念だけど。

「いって……舞、とりあえずどいてくれないか？」

「いやだって言ったら？」

S i d e o u t

おいおい、こいつも一体何言ってるんだ！？

それに少し上目遣いに俺を見てくるその瞳は危険すぎる！
理性が外れる前に脱出せねば……！！

「とにかく離れろ、それとも何か？」

このままお前を襲えってことか？」

「そっそれは……その……」

ヤバい……なんだこの空気？

舞が俺を突き放して脱出完了のはずだったのに、顔を赤くしやがって。

すべて行動が裏目に出てるぞ、やばい……マジでやばい、助けて誰かー！

「まいねえ！ 母さんが帰って……こ………いって……」

おいおい、その誰かが愛じゃなくてもいいだろ。

ホント勘弁してくれ……

第16話 一応だな

「で、なんで愛の試合より3時間も前に家を出なきゃいけないんだ？」

俺の目の前には手を組んで少し不満そうな顔する鬼まいの姿。

「いいから、黙ってついてきなさい」

眠い……せつかくの休みに9時起きって……

え？ そんなに早くないって？ いつもなら昼まで寝てるんだよ。嫌だゝ帰りたいゝ、なんて怖くて口が裂けても言えない。

ちなみに昨夜あったことを愛に見られた件は何やら姉妹で取引して解決したようだ。

……どんな取引があったかなんて怖くて考えたくもない。

Side 斉藤 舞

はあ、昨日あたしは一体何してたんだろ……

あれは、あれで惜しかったけど……もう忘れよ。

それにしても、このバカ（こう）はホント鈍くて頭が痛くなるわ。たまには2人で出かけたってことぐらい察してくれてもいいのに……

「なあ、どこいくんだよ?」

あんたが居ればこっちはどこでもいいの。

「ちょっと、買い物付き合って」

理由なんて適当でいい、少しでも長く一緒に居ることが出来るなら。

S i d e o u t

「へー、お前が服を買いにねえ」

舞に連れてこられたのは駅前のショッピングモール。

「あのねえ、あたしだって一応女の子なんだからね」

「一応……だな」

小声で「バカ」と聞こえた気がしたがスルーしよう。

変な突っ込みは己の命を投げ出す結果につながりかねん。

「ねえ、功はどんな服が好み?」

「服……なんて着なくていいんじゃない?」

「土にかえれ!」

「ぐは！」

ちよつと冗談言っただけなのに右ストレートですか。
お前のパンチ痛いんだよ！

「~~~~っ。」

ちよつと、ふざけたただけだろ！

第一、俺が服のことなんてわかるかよ」

「そうね、功に聞いたあたしが悪かったわ！」

なんで、キレてんだよ……

「お昼、ご馳走様♪」

「どづいてしまして……」

なぜ昼は俺の全額持ちだつたんだ？
おかげで舞の機嫌は直つたが俺の懐が寂しいことに。

「あ、わりー。」

忘れ物したみたいだ、ちょっと待っててくれ」

我としたことが席に携帯を忘れるだと？

あー、恥ずかし。

S i d e 齊藤 舞

まったく、どこか抜けてるところは相変わらずね。
早くしないと愛の試合始まっちゃう。

「ねえねえ、彼女1人？」

「俺たちと遊ばない？」

何このチャラそうな男たちは？
あたしは功を待ってるのに。

「人を待っているので結構です」

「そんなこと言わずにさあ！」

自分たちの言いなりにならないと分かったら力づく？
情けない男たちね。

S i d e o u t

急がないと舞の機嫌が悪くなる！
急げ俺！

「ぐわあ！」

入り口から男の悲鳴？

まさか舞の奴！

「あら、もう帰って来たの？」

「お前こそ俺のいない間に男殴り倒してんだ？」

「だってしつこいんだもん」

あーあ、ご愁傷様だな。

「女だからってなめやがって……ふざけんなあ！」

男が本気で女（一応）を殴んなよ、情けない。

俺は舞と男の間に入り男の拳を受け止めた。

いとも簡単に止まり、思ったいたより軽いパンチだった。

Side 齊藤 舞

功が出てきちゃったか。

あの男も終わりね。

正直、あたしは功に殴り合いで勝てる気はしない。

ケンカの腕以前に身体能力が違いすぎる。

男と女、そんな問題じゃなく、功の身体能力はハッキリ言って異

常。

本人は自覚してないけど功は日本時離れしたバネを持っている。

それを生かしたピッチングが功の武器だったんだけど……今更関係無いか。

「功、もう行きましょ。

愛の試合が始まっちゃう」

「ん？ そうだな、じゃあな。

今度からは人を選んで軟派しろよ」

……遠まわしにあたしを選んだから殺されると言ってるのかしら？
あのバカ（こう）は。

S i d e o u t

第17話 見てくれた？

Side 山中 淳

「すみません、僕のせいで負けてしもて」

そう言つてワイは先輩たちに頭を下げた、チャンスで打てず本当に申し訳ないことをしてしまった。

高校生になつて始めての公式戦、すなわち甲子園への1回目の挑戦は3回戦で終わつてしもた。

「やっぱり、投手か……」

ワイはボソツと呟いた。

長い険しい甲子園への道を進むには開成高校^{うち}の投手力じゃ足りない。

やっぱり神谷^{あいつ}を……いや、無理やな。

「山中君、先輩たち行つちやつたよ」

「ああ、すぐ行くわあ」

以前、北川からワイは神谷と北川の兄との間にあったことを全て聞いてしまった。

それを聞いてしまった以上、ワイは神谷を誘うことをあきらめた。

「でも、山中君つてやっぱり凄いだね。

三回戦までこれたのも山中君のおかげだね」

「北川、慰めは勘弁してくれや。」

ワイがもつと打てば勝てた試合やったしな」

「最後の打席以外は敬遠されたんだから仕方ないよ。」

それに3試合で2本ホームラン打った、山中君を誰も責めないよ」

「そりゃありがたい」

でも、ワイや他の1年で投手を出来る奴はおらん。

本気で甲子園を目指すならどのみち全国区の投手が必要だな。

S i d e o u t

「こうにいい、愛の活躍見てくれた？」

「もちろん、相変わらずお前は凄いな。
さすが暴君の妹だ」

「功……誰が暴君ですって？」

落ちつけ俺、後ろからの殺気はスルーするんだ。

しかし、愛はホントすげえな。
エースで4番、打っては4打数4安打、投げては2安打完封、もはや怪物だな。

「えへへ、伊達にこうにいと一緒に遊んでたわけじゃないよ」

確かに少し前までは一緒に野球をして遊んでいたが、もう俺より上手いんじゃない？

どうやれば4安打も打てるのか是非とも俺が聞きたい。

「でも、これで愛は推薦で高校に行けそうだな」

「愛は推薦来ても行かないよ」

「は？ 高校でもソフトやるんだろ？」

「こうにいとまいねえの高校にもソフト部あるんでしょ？
だったら、愛は開成に行くよ」

このお嬢さんは一体何を考えてんだ？
それだけの才能を持ちながらなんと勿体無い、いや……俺も似たようなもんか。

「あんたはまだ言っているの？」

母さんは別に私立でもいいって言ってるのよ」

「絶対嫌！」

だって、こうにいやまいねえと一緒に高校行きたいもん！」

「まったく我が妹ながら頑固ね」

舞よ、お前も十分頑固だからな。

さて、愛とも合流したことだし帰るか……ん？

「あ、神谷と斉藤やんけ」

「山名君に沙希ちゃん……2人でどうしたの？」

「今日、試合でな。
その帰りや」

人ごみの向こうから現れたのは試合帰りの山中と北川。
山中は別にいいが正直、北川は気まずすぎる。

「舞、悪いけど俺、先に家に帰っとくから、愛のことよろしく」

「え？ ちょっと功！」

「わりい、北川。」

ワイも先、帰るから後はよろしゅう」

「山中君まで何言って……行っちゃった」

「じつにい……」

2人の男が去った場所には3人の少女のため息が聞こえるだけだった。

第18話 交差する想い

「で、なんで山中おまえがついて来たんだ？」

「まあ、気にすんなや。」

少し話がしたいと思ったただけや」

……こっちはあんまし、そんな気分じゃないんだが。

「なんだよ、話って？」

勧誘なら断ったはずだ」

「お前に謝ろうと思ってな。」

ワイ、北川から話を聞いてん」

「……そうか」

「だから、すまんかったな。」

お前の傷も知らず、しつこく勧誘してもうて」

本当にそれを言うただけについてきたのか？
結構律儀なやつなんだな。

「気にすんな、言わなかった俺が悪いんだよ」

「でも、神谷おまえと野球したかったなあ」

「俺としても面白くないぞ」

「何言ってるねん、お前とワイがバッテリー組んだら日本一も夢やないと思うで」

「現実見るよ、良いバッテリーが居て勝てるほど野球は甘くないだろ」

「ワイとお前やから勝てるんやろ？」

「はは、お前はホント面白いやつだよ」

……お前とならいいバッテリーになれたかもな。

Side 斉藤 舞

「へー、沙希ちゃんって野球部のマネやってたんだ」

「うん、まあね」

なんか元気ないなあ

それに気のせいか愛が沙希ちゃんのことを敵意を持って見つめている気が……

「北川さんはこうにいとどうゆう関係なんですか？」

この子は行き成り何言って……

「……別に何も無いよ。」

ただのクラスメートそれだけだよ、斉藤 愛さん」

「嘘言わないでください、こうにいが北川さんの顔を見たとき明らかに表情を変えました。」

中学のある時を境に人と関わらなくなった、こうにいが何も無い人を見てあんな表情をするなんてありえません」

確かに功の表情は明らかに曇ったけど、功が言わないんだからほっとけばいいのに。

でも、功は昔から嫌なことため込むタイプだからなあ。

「そんな目で私を見ないで、少なくとも私はもう彼のことを敵だとは思っていないわ。」

彼はどうだか知らないけどね」

それってどうゆうこと？

以前の沙希ちゃんは功を敵視していたってこと？

あのバカ、まさか沙希ちゃんに手でも出したんじゃ。」

「こうにいに因縁でもあるんですか？」

愛は熱くなりすぎね、功が絡むと周りが見えなくなるんだから。そろそろ潮時ね。

「愛、もうやめなさい。」

功や沙希ちゃんが言わないならそつとしといてあげなさい」

「でも、まいねえ！」

「それ以上、言つと力ずくで黙らせるわよ」

「……分かつよお」

そんなふてくされない。

あたしだって凄く気になるけど。

本人たちに言う気が無いなら仕方ない……でも、今度功に力ずくではかせてみようかな？

S i d e o u t

っ！！

なんだこの寒気は！？

あああ、怖いよお、俺が何したってんだ？

「どないしたんや神谷？」

「なんでもない、少し寒気がしただけだ」

「ハッハーン、さては斉藤のことやな？」

「半分当たりで半分外れだ」

お前らは知らないからな暴君のようなあいつの性格を。

「ええなあ、お前にはあんな可愛い幼馴染がおつて。
あ、心配すんな、別にワイは斉藤を狙つてへんから。」

他の奴は割とおるって噂やけどな」

それはご賢明な判断だな。

そしてその他の者どもよ、ご愁傷様だな。

「じゃあな、ワイこつちやから」

山中はそう言い残し去って行った。

1人になった俺が空を見上げるとそこには夏の夕暮れが広がっていた。

キレイなグラデーションを施した空は高く、そしてどこまでも続いて、自分がいかに小さいか教えてくれる。

——自分は一体何をしているんだろう？——

ふと、そんな感情が湧き上がった。

あの夏を……あの試合を……あの一球をやり直したいとどれだけ思っただろう。

記憶だけでも無くなればいいとどれだけ思っただろう。

でも、俺のしたことは頭の中に事実として残っている。

きつと、俺の夏はもう一度、神鳥と会わなきゃ……始まらないんだ。

夏が過ぎるのは早く、俺の気付いた時には夏の甲子園。
『全国高等学校野球選手権大会』が開幕した。

第19話 神鳥 哲也

——甲子園——

高校球児の憧れであり最終的な目標。

中学時代は俺も高校になれば目指すと決めていた。
でも、今となってはもうどうだっていい場所だ。

「あんたいつまで寝てんの!？」

俺の朝（現在の時刻は12時）を邪魔する暴君^{まい}。
その声は頭にも響いて俺の脳内をかき回す。

「うるせえなあ、今日の昼からの補習はさぼる。
じゃ、おやすみ……」

昨日は愛がゲームをしようとしてこくって寝るのが遅かったのさ。

「何言つての、早く起きなさい!」

バツバカ! 掛け布団を取り上げるな!

「な…… あんたって奴は……
ちゃんと下を履いて寝なさい!!」

パンツは履いてます!

「仕方ないだろ!
寝起きなんだから!!」

この後、俺の横つ面にはキレイな紅葉。
理不尽すぎるっしょ……

「報明の5番打ってる人、私たちと同じ1年だつて」

「あー、新井だっけ？
中学から有名じゃん」

現在、朝食と言う名の昼食を食べながら、甲子園をTVで観戦中。
地元の兵庫代表『報明学園』が2回戦を戦っていた。
ちなみに1回戦は6 - 1で圧勝だったらしい。

「山名君とどっちが凄いの？」

「同じぐらいじゃない？
あいつ山中も高1の中じゃ飛びぬけてると思うよ」

まあ、1人で甲子園に行けるほど甘くはないと思うがな。

実際、山中を有して3回戦で負けたわけだし。

さて、飯も食ったし補習でも行きますか。

「ウッス、神谷あ」

「山中……そう言えばお前も1学期は成績不振だったな」

「やかましいわ、どうも英語がワイのことを嫌ってるみたいや」

「フツ、英語だけだからいいじゃねえか」

「うひあゝ、数学もアカンかったんか」

それこそほつとけ。

ちくしょー、数学って数の学問だろ？

なのに、なんでXとかYが出てくるのがどうにも理解できん。

・ ・ ・ ・ ・

「山中、お前何してんだ？」

「ん？ 甲子園の経過や」

補習の授業中に携帯で試合の途中経過見るって。

お前はどれだけ野球好きなんだ。

おいおい、先生こつち睨んでるぞって、前の席の奴らほとんど寝てるじゃん。

こりゃ、先生怒るぞ。

「山中、先生怒りそうだから携帯閉じろ」

「……」

「おい、聞こえてんのか？」

「あ？ ああ、すまん」

「っ？ どうかしたか？」

「いや……神奈川代表の高校に気になる名前見つけてな」

「は？ なんて名前？」

「神鳥 哲也」

S i d e 藤井 高志

「マジかよ……なんであの子が神奈川の高校にいるんだ？」

「藤井さん？ 神奈川の『聖王高校』がどうかしたんですか？」

夏の甲子園が開催されている間は出来るだけ会場に足を運ぶが、これほど衝撃を受けたのは初めてだ。

聖王高校の1年生4番がまさかあの子だとは。そんな情報どこにも無かったぞ。

「飯村、あの4番をよく見とけよ」

「は？ 1年生のあの子ですか？」

「ああ、彼こそ10年の……いや、並ぶ者無しと言われた『神童』
神鳥 哲也」

食い入るように試合を見守る俺達の耳に金属音が響いた。

夏の空を切り裂いた彼の打った白球は甲子園の熱に煽られ熱狂する観客席へと消えていった。

今年の夏は彼から目を離すことが無くなりそうだ。

S i d e o u t

第20話 私は君のこと

『神鳥^{かみとり} 哲也^{てつや}』の名前は甲子園での活躍で一気に全国へと広がっていた。

当然、俺は連日甲子園の舞台で打席に立つ神鳥の姿を見ながら夏休みを過ごしていた。

「これでベスト8か」

3回戦、神鳥のいる神奈川代表・聖王高校が報明学園に勝利しベスト8入りを決めた。

神鳥は4打数3安打3打点の活躍、1年生4番ながらすでに実力は3年生に匹敵する。

「でも……なんで復活したんだ？」

そうさ、あいつは俺のせいでもう野球が出来ないと言っていたのに。

この手の情報に詳しくそうな人物は1人しか思いつかない。

「やあ、よく来たね。

神谷君」

「どうもです、藤井さん」

藤井さんが勤める事務所、近くの喫茶店で2人で会った。
高校野球の雑誌を取り扱う藤井さんなら裏情報に詳しいはずだ。

頼んでいたコーヒを一口飲むと藤井さんはゆっくりと口を開いた。

「君の言いたいことは大体察しはついている。

残念だが神鳥君の詳しいことは分からない。

ただ、ハッキリしているのは彼にとって君が起こした事故はもはや過去でしかないと言うことだ」

「神鳥にとって、終わったことでも俺の中ではまだ……」

「そうやって、自分を責めるのはもうやめにしないか？

自分の気持ちに正直になっただろうだ？」

黙りこみつつむく俺に藤井さんは言葉を続けた。

「野球をやるんだ。

山中君に誘われているんだろ？

それに君はプロになれるだけの資質がある。

今のままでは宝の持ち腐れだ」

そんな簡単に割り切れるかよ。

人の幸せをぶち壊しにしろって自分のやりたいことをやるだと？
俺にとってはナンセンスな話だ。

「俺はもうしないと決めたんです。
今になって変える事は……」

あれ？　なんで後の言葉が出てこないんだ？
言え……言うんだ！！

「そこで詰まるってことはそれが君の答えだよ」

「……」

「おっと、もう時間か。」

お勘定は済ませておくよ、今日は君と話せてよかった。

これは個人の希望だが、君と神鳥君が勝負する所を見てみたいよ」

そっぴい残し藤井さんは夏の日差しが見え始めている、街へと姿を消した。

1人になった俺は、自分の顔が移るコーヒーの水面を眺めることしか出来なかった。

頭の中が何かで一杯のときは時が過ぎるのが早く感じる。
夏の甲子園はすでに終了していた。

神鳥のいる聖王高校は結局ベスト8止まりだった。

「今日で補習も終わりやなあ」

横にいた山中が腕を天に突き上げ身体を伸ばしながら呟いた。

「そーだな。」

これから夏休みを謳歌するだけだ」

「ワイも県大会へ向けて頑張らんとアカンわ」

開成の野球部は夏休みに行われた地区大会で3位に入り、秋季県大会への出場を決めていた。

上手くいけば春の甲子園が狙える大会だ。

「勝てそうか？」

「お前がいれば楽になるかも」

「はいはい、分かったって」

「真剣に考えてくれへんか？」

山中の口調が急に真剣なものへと変わった。

「ワイはなんとしても甲子園へ行きたい。

今回の大会を含めて、チャンスは残り4回しかない。

その中で出るにはお前の力がどうしても必要なんや！」

「……それはお前の都合だろ。

俺に押し付けんな」

・ ・ ・ ・ ・

「はあ、俺は一体何やってんだろ」

山中から逃げるように去った俺は学校の屋上で寝転びながら空を眺めていた。

神鳥のことを知ってから頭にかかった霧が晴れない。

光の差し込まない霧の中に俺はずっと立っている。

「俺に……俺にどうしろってんだ」

そう呟く俺に声をかける人がいた。

「神谷君？」

起き上がった俺の目線の先には北川が立っていた。

「北川……」

それが俺の口から出た精一杯の言葉だった。
きつと今、俺の顔は最高に冴えないだろう。

でも、それは彼女も同じだった。

「何、考えてたの？」

「色々だよ」

「私のこと気にして野球をやりたいけどやらないとか？」

「北川は関係ないよ、俺が決めたことだ」

「関係ないこと無いよー！」

S i d e 北川 沙希

私は神谷君に謝らなきゃいけない。
彼が前に進むために。

「私ね……嘘ついちゃったの」

「は？」

「ホントはね、神谷君のこともう恨んでたりはしてないの。そりゃ、初めて話すまではそうだったかもしれないけど、今もういいの」

君は優しくて、私なんかよりもずっと弱い人だから。

きつとこの先も自分で十字架を背負って行くのだろうけど、そんなことは誰も望んでいないよ。

「だって、神谷君はホントは野球したいんでしょ？だから……」

「北川、変な同情は要らない。

お前が俺のことを恨んでいようが恨んでいなくても、俺は……」

「同情なんかじゃないよ」

そう、これは同情なんかじゃない。

私の中に芽生えた気持ちが私を動かすの、彼を助けてあげたいって。

そつだよ……私は君のこと……

「私、神谷君こと好きなの」

「え……？」

驚いた顔してる、それもそつだよね。

私だつてまさか告白することになるとは思っていなかったけど、
なんかスツキリしちゃった。

「いや……北川……いきなりそんなこと言われても……」

「神谷君の返事は1しかないよ」

「はい？」

「野球、やろうよ。」

返事は野球部入ってから聞いてあげる！」

S i d e o u t

めちゃくちゃだ……告白の次は野球部に入れたと？
つか、北川の顔、赤すぎだろ。

「北川、それ本気で言ってる？」

「もちろん！」

それとも、乙女の告白を冗談として流すつもり？」

そんなつもりは毛頭もございません。

「でも、俺は「これは野球部いり、決定やの」は！？」

山中！？ いつからそこに！？

「ちょー！ 山中君なんているの！？」

北川も知らなかったのか。

つーことはさっきのはマジ告白……

「安心せい、ワイは何も聞いとらん」

そんなニヤニヤした顔で言われると確信犯にしか思えねえよ。

「山中君……ひどい……」

「まあ、ええやないかい。
で、神谷、返事を聞こか」

「……1週間、待ってくれ。
少し時間が欲しい」

でも、今回は前向きに考えてだけどな。

第21話 目指す場所はハッキリしてる

山中との約束から3日がたった。

俺の気持ちは8割以上決まっていたが、残りの2割弱が決断を鈍らせていた。

——本当に野球をしてもいいのだろうか？——

そして

——俺の力は役に立つのだろうか？——

それが、2割弱を占める、少しばかりの不安。

「愛、久しぶりにキャッチボールしないか？」

「え？ いいよ。

硬球？」

「ああ、久しぶりに……な」

隣でテレビを見てた、愛を連れて近くの公園へと向かった。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

「こうにいが誘うなんて珍しいね」

「気が向いたただだよ」

とても、中学生とは思えない、良いボール投げるなあ。
愛は相変わらず。

「野球、する気にもなったの？」

そして、相変わらずするどい。

「まだ、分からないよ」

「でもさ、最近こうにい、顔つきが戻ってきたよ」

「は？ 俺はいつでも一緒だよ」

「うっん、去年の秋頃から、ずっと浮かない顔してたもん」

Side 斉藤 愛

あの事故があつて、こうにいは別人みたいになつてしまった。
笑つていても、それは心からの笑顔ではなく。
優しい、けれどそこに、こうにいの心は無くて。

見てることしか出来ない自分が齒がゆかった、きっと、それはま
いねえも同じ。

でもね、今は

「こうにいは愛の知つてゐる顔をしているよ。
おかえり、こうにい」

S i d e o u t

そんな心配をかけてたとは……
舞もそうだったのかなあ、そうだとしたら俺はホント情けないや
つだ。

もし……そうなら俺のすることは決まつてゐる。

「ありがとうな、愛」

前へ進もう、少しずつ、ゆっくりと……

「舞、少し話があるんだ」

「功からなんて珍しい、どうしたの？」

珍しい……珍しいのか？
まったく心当たりがないぞ。

「俺、野球部入るよ」

「へ？ 突然どうしたの！？」

「んにあ、山中にずっと誘われてたろ？
それに、神鳥も復活したし、もう一回やろうかなって」

「ホントに…… ホントにいいの？
もし、また野球を嫌いになるようなことになったら……」

愛の言った通り、かなり心配されてたんだな。
俺、どんだけ頼りないんだ…… なんか泣けてきた。

「大丈夫、今度はあんなことにはならない。
それに…… いや、なんでもねえ」

「なにになに？ 言いたいことあるならいいなさいよ」

そんな詰め寄るな！

くそ！ いらんことを口走ってしまった！

「何でもないって言ってんだろ！
とりあえず、離れる！」

「へー、そんなこと言っていていいのお？
フッ！」

「ぐふ！」

ゼロ距離、ボディブローだと……色んな意味で悶絶もんだ。

「これで、今回は許してあげる。
次の機会にでも……ね」

次の機会に俺は何をされるんですか……？
死にたくないよお。

でも、あんなに嬉しそうな顔する舞を見たのも久しぶりな気がする。
頑張ろう……周りの人の期待に応えられるように。

「さてつと、返事を聞かせてもらおか」

山中との約束の日、俺は山中を約束の取り付けた屋上へ呼び出した。

目的はもちろん1つしかない。

「……やるよ、もう一度野球を。」

中学の頃はやる理由なんて漠然としていた、でも、今度は違う。目指す場所はハッキリしてる」

「……甲子園……やな」

「それは、最終地点の通過点だよ」

「は？ どうゆう意味や？」

「やるからには頂点。」

全国制覇だ、どのみち神鳥と甲子園で会うならそれくらい本気でやらなきゃ会えない」

「ハハハハ！！ 行き成り大きく出たなあ！
ええでえ、その無茶のらしてもらおうやないか！」

「まあ、そうゆうことでよろしくな」

「ああ、目指そうやないか。
全国？１バツテリー！」

神鳥……少し待ってるよ。
すぐにお前に追いついてやるからな。

― 第１部 ― 完

第21話 目指す場所はハッキリしてる（後書き）

最後にもあったように第1部終了です。

第2部なんですが作者の都合で少し間をおかして頂きます。

出来るだけ早く始めるんで勘弁して下さい！

次は功が野球部に入るところからスタートします。

第2部は野球が中心になると……（多分）

第22話 まともな奴はいないのか？（前書き）

長く間をあけたことをお詫び申し上げます。
それでは、第二部開幕です。

第22話 まともな奴はいないのか？

緊張……今の俺の気持ちを表すと間違いなくこの一言だ。

だって、このタイミング（2学期開始）に入部届け出すバカ野郎がいるか？

きつと、俺だけだ、うん、間違いない。

緊張を抑えつつ職員室のドアをノックした。

ドアを開けると冷房の利いた、冷たくて心地いい風が顔をなでる。

たしか……顧問の先生の名前は。

「^{かじ}加持先生いますか？」

「ん？ 俺が加持だが？」

何かようか？ 1年の授業には行っていないはずだが？」

語尾が全部疑問形って……

つか、マジでこの人が監督か？

整った顔つきに、そり残しの無精ひげ……いかにも適当そうな人だ。

そして、長い髪は後ろで束ねてある、そして、纏うオーラは緩い

……

なんか、こう、もつといかついのを想像してたのに。

「野球部に入りたいんです。

これ、入部届けです」

「ほー、『神谷 功』ね。

山中が言ってた子か。

中学のころなんでも、全国ベスト4だったらしいな」

あいつ、どこで一体何を話してんだ？

「まあ、そんなところです」

「丁度うちは投手が不足していてな。

お前が いいのなら、すぐにでも試合で投げてほしいくらいだ」

いやいや、同期はともかく、先輩たちの目が怖いっす。

「まあ、キャプテンの奴も、山中の話聞いて入って欲しそうだったから、大丈夫だろ」

ホント、あいつはどれだけの人にしゃべってたんだ？

今度からは注意しておこう。

入部は済んだ。

よっしゃ、部室にでも行きますか。
横にいる奴と一緒にな。

「まあ、そう緊張せんでも、ワイが話してるから大丈夫やって」

ある程度は感謝するが、いい加減しゃべりすぎだ。

「はいはい、そりやどうも。

それより、1年って何人いるの？」

「お前、合して5人や」

おいおい、来年の新入生の数次第では試合できないぞ。
マジ、大丈夫か？

・ ・ ・ ・ ・

「おう！ 野郎ども！ 噂のピッチャー連れて来たで！」

部室へ勢いよく山中に便乗して入ったのはいいが。
なんだ、この空気？
誰かしやべろうぜ。

「どないしたんや？ 誰かなんかしやべれや」

野球のユニフォームを着た、3人の男たちは完全に俺を見て固ま
っている。

……俺、なんかしたっけ？

「どうも……神谷です。
よろしく」

右手を挙げて、あいさつしてみたけど……誰かほんとマジ、どう
にかしてこの空気！

「へー、君が神谷か。
思っていたよりも普通の体型をしてるんだね」

一番に右にいた、眼鏡をかけた男が言葉を発した。
俺の体を見つめ、何やらぶつぶつ呟いている。

「あいつの名前は関本せきもと陽一よういち。
ポジションは遊撃手ショートや」

隣に居た、山中が解説してくれた。
眼鏡「関本、この方程式で間違で決まりだな。

「先に名前言わなくて、スイマセン！」

そう言つて、猛烈な勢いで頭を下げている真ん中の男。
気の弱そうな奴だ……

「あいつは桜井さくらい大樹だいき。
ポジションは二塁手セカンドや」

山中に紹介された桜井はいまだに「スイマセン！」と言つて、頭を下げている。

桜井「スイマセン、こいつはこの方程式でOKつと。」

さて、残る1人は俺を物凄い睨んでくるんだが……俺なんかしました？

「てめえが、神谷か」

ちょ……顔近い。
しかも、超怖い。

「そうだけど、なんだよ？」

「俺様の名前は丸川まるかわ林太りんた。
ポジションは外野だ」

お前は俺様キャラか。
なんか、まともな奴居なくね？

「で、帰りになんで、ラーメンなんだ？」

「おまえ神谷の入部歓迎会やないか」

「そうそう、せつかく1年生増えたんだしさ」

部活帰り、1年（北川も含め）全員でラーメン屋へ。
なんでも、桜井がかなりのラーメン好きらしく、この店はかなり
美味しいとか。

そして、とうの本人は……

「スイマセン！ 僕のせいで、スイマセン！」

そんなに謝らなくてもいいんだが……

「桜井！ てめえ、うるせえんだよ！
俺様の食事の邪魔をするな！」

そして、丸川よ。

ラーメンにコシヨウを入れ過ぎだ。

「このスープの味！

具材はおそらく……」

関本よ、眼鏡を曇らせながらスープの解析はやめてくれ。
マジで食欲が無くなる。

くそ！ まともな奴はいないのか！？

「どないしたんや？ 食わんのか？」

山中、この状況で冷静に食べれるお前の神経を尊敬するよ。

「いつも、こんなに賑やかなのか？」

「まあな、悪くないやろ？」

そう言われ、周りに目をやった。

騒がしい、だけど、その空間に広がっている空気はどこか心地いい。

こんなのも悪くないかもしれない。

「今、神谷君笑ったでしょ？」

「別にー」

「……野球部、入って正解だったでしょ？」

「かもな……それより、北川。
麵延びてるぞ」

「嘘！ ホントだ……スープが無い……」

ハハハ、麵が倍くらいになってやがる。

「おい、神谷あ。」

てめえ、えらく沙希ちゃんと仲がいいようだな？」

丸川は俺のこと嫌いなのか？

「気のせいだろ。」

変な誤解はやめてくれ」

「フン、まあいい。」

俺様の狙う女子は1人しか居ない」

「誰だよ？」

「斉藤 舞ちゃんだ」

……もう、言葉がみつからねえよ。

「丸川にあんな可愛い子が落とせるわけないだろう。
自分の顔と相談したらどうだ？」

「関本！ てめえ！」

冷静な分析ですな。

関本博士。

「関本さん、そんなこと言ったら。
ダメですよ！」

「いいんだよ、早めに言ったほうが本人のためになる。
桜井だってそう思ってるから。
否定しないんだろ？」

「そっそれは……」

「桜井……貴様……」

「ヒイ！ すいません！」

また、謝るんだな。

桜井よ。

第23話 俺の分析によるとだな……

Side 藤井 高志

思わず、口元が緩んでしまう。

なんせ、俺の一番待ち遠しかった、あの投手が復活したんだからな。

現在、行われている、県大会での活躍で評判も右肩上がりだ。

「見ろよ、飯村。」

俺の予想通りだろ？」

「開成が秋季県大会、ベスト8に入ったことですか？」

「そうだよ、この秋からエースになった、神谷君は逸材だぞ。」

140km越えのストレートに高速スライダーを武器に全試合で二桁奪三振だ」

「でも、フォアボール四球も多いじゃないですか。

バック守備の助けが無かったら、もっと失点してるはずですよ」

こいつは分かってねえなあ。

その、不安定さが魅力的だったのに。

「それに、藤井さんお気に入りの開成も次で終わりですかね」

「なんでだ？」

「その手元にあるトーナメント表、見て下さいよ」

「……こいつは確かにきついな」

そこに書かれていた開成高校の次の相手は夏の甲子園ベスト16、
報明学園だった。

S i d e o u t

「ラスト！」

「んっ！」

放課後の投球練習。

俺の投げたボールは山中の構えるミットに乾いた音を響かせながら収まった。

「OK！」

疲れは大丈夫そうだな」

「まあな、夏の予選と違って、土日にしかな試合がないからな」

「それはいいとしても、少し四球が多すぎとちゃうか？」
フォアボール

「もともと、コントロールが良い方じゃないんだよ」

「それはそうやけど、次の相手は甘いところに入ったボールは打たれるで」

「分かってる」

なんせ、次の相手はあの新井が4番を打つ、報明だからな。
ここまで全試合コールド勝ちの強豪校。

俺たちのような県立校がどこまでやれるか……

S i d e 加持 幸一

「北川、報明のデータ、頼んでいたのは出来たか？」

「加持先生、はい、どうぞ」

「ご苦労さん」

こうして報明の各打者のデータを見ると凄いな。

さすが、全国クラスって感じた。

うちの神谷がどこまでやれるか。

「先生、次の試合勝てますよね？」

「さあな、ただ、神谷が打たれれば、^{あいつ}うちは終わりってことだけはハッキリしてる」

「大丈夫かなあ……」

俺が監督を始めてあれだけの投手が入ってきたのは初めてだが……

……まだ、甲子園では通用しないだろうな。

しかし、山中や他の1年の力があればなんとかなるかもしれんな。

……どうも、あいつらを見てると、どうも昔を思い出してしまう。

甲子園なんて、あの最後の夏以来、再び行けるとは思っても無かったのにな。

「北川、俺は職員会議があるから、もう練習終わるように言っといてくれ。」

後、明日は試合だから、早めに帰るように。

特にお前ら1年は寄り道せずに帰れよ」

まったく、1年全員でなんで今ときラーメン屋なんだ。

「はい、今日は大人しく帰ります」

S i d e 山中 淳

「……山中、もう一度言ってくれ」

「だから、北川と2人で一緒に帰れや」

「なんでだ？ 全員で帰ればいいだろ？」

神谷こいづは少し頭が弱いんとか？
今のセリフを北川が聞いたら泣くぞ。

「おいおい、山中ちよい待ちな。
そのご指名、俺様が受けるぜ！」

「丸川……残念やけど、お前じゃ話ならんねん」

「なんだと！？俺様が神谷に劣っているものなど何も「少し、黙つてろ」ぐは！」

ナイス関本！

ボディブローで悶絶してる丸川とそれ見て謝っている、桜井はおいておこう。

「いいかい、神谷、俺の分析によるとだな……」

また、なんか変な分析が始まったで……

・ ・ ・ ・ ・

「……っと、言うわけだ。

とにかく、お前は北川と帰るんだ」

「30分黙って聞いてたけど、結局何が言いたかったんだ！！？」

神谷が驚く気持ちも分かるわ。

30分かかって、意味不明な理論を展開しておいて、進展なし。

「いいから、帰れってことだよ!」

「関本! お前も黙つとけえええ!」

S i d e o u t

まったく……こいつらは何を考えてんだ?
いつも通り、皆で帰ればいいのに……

「みんな、まだあ?」

「お! 北川、神谷と一緒に帰りたいそうやで」

「待て! 山中、誰もそんなこと「関本、黙らせえ」ふが!」

くそ! 関本離せ! そして、口元から手をどける!

「なんか、神谷君凄い暴れてるけど、大丈夫なの?」

「少し、テレてるだけや。

全然大丈夫や」

勝手に決め付けんなあああ!

「神谷……あきらめな」

関本、耳元で囁かないでくれ、寒気がする。

後は北川が断るのを期待するしか……

「
いいの？　じゃあ、一緒に帰ろっか」

俺の期待は北川の笑顔の前に儚く散った。

第24話 なにがや？

「で、さあー困っちゃうわけ」

「へー、北川って、ゴキブリとか大丈夫なんだな」

「まあね」

今の話の内容は『家に出てくる害虫』について。
どこで、こんな話に発展したのかまったく分からない。

あれこれ、くだらない話をしている間に北川の家に着いてしまった。

「じゃあ、また明日」

「うん……」

早くこの場所を去ろう。

出てきてほしくない話題が出ないうちに。

「ねえ、少し待って」

立ち止まるな、聞こえないふりをして足を動かせ。

「振り返る気がないならそれでいいよ。
そのまま、聞いて」

……無視するわけにはいかない……か。

「なに？」

「告白の返事だけどさ」

やっぱり、それが。

触れてほしくない話題だったんだけどな。

「そのことだけど」「まだ、いいよ」「はい？」

Side 北川 沙希

彼は驚いた表情で私を見てる。

そんなに驚かなくてもいいのに。

「私、少し勢い余って告白した感じだったでしょ？
だから、返事はまだいいかなって。
それに……」

今の君の答えは分かり切ってしまっているから。

「神谷君が私を好きになってくれるまで私、頑張る。
だから、返事はまだしなくていいよ」

きつと、これが今の私に出来るベストなんだ。

Side out

「いいのか？」

本当にそれで？」

「うん、だから、大会終わったら2人で何処か行こうよ」

「分かった、考えておくよ」

「ホント！？ 約束だよ」

そう言つて、彼女は小指をピツと立てた。

「約束の指きり」そう言つて、彼女は俺に手招きをした。
俺は何も警戒せずに招かれるがまま彼女に近づいた。

それは一瞬だった。

「ありがとう……」

そう呟いて、彼女は自分の唇を俺の唇に重ねた。

あまりに突然過ぎて、彼女の顔が離れた後も俺は声が出なかった。
そんな俺の瞳に映ったのは

「明日の試合、頑張ろうね！」

そう言つて、忙しく家へと入る北川の姿だった。

「調子は良さそうやな」

試合前のブルペンでの投球練習を終えた俺に山中が話しかけてきた。

いつも、明るい表情には緊張の色。

まあ、相手が相手だしな。

視線を相手のベンチにやった。

ベンチの前で新井が凄まじい、スイングスピードで素振りしていた。

「新井^{あいつ}を一試合抑えるのは、しんどそうだなあ」

そう呟く俺の背後から声がした。

「フン、俺様の所に打たせれば全部さばくぜ」

そう言っ^{センター}て、5番、中堅手の丸川はすでに鼻息が荒い。

「神谷君、エラーしたらすいません」

2番、二塁手セカンドの桜井はそう言っ、頭を下げたが、桜井がエラーしたところを見たことがない。

「俺の分析にはすでに終わっている、安心して投げろ」

眼鏡をかけなおして、1番、遊撃手ショートの関本は微笑した。

「無駄口、たたく暇があったら、バットでも振っとけ」

自分のミットの形を入念に確かめながら、4番、捕手キャッチャーの山中は言っ
た。

実に頼もしい奴らだ。

こいつらがバックにいるから俺は安心して投げられる。

やがて、主審の人の合図で両チームが整列した。

俺たちにとって、春のセンバツをかけた、大一番の試合が始まっ
た。

S i d e 藤井 高志

「飯村あ、まだ、着かないのか？
試合はとつくに始まってんだぞ」

「そんなこと言うなら、先輩が運転してくださいよ！」

「悪い悪い、できるだけ急げよお」

開成対報明を楽しみにしてたんだからな。
神谷君が初めて対戦する、全国クラスの高校だ。
報明打線にどれだけのピッチングが出来るか、力の差は歴然だが、
どうしても期待してしまう。

「着きましたよ」

「よし、見に行くか」

車を降りて、球場のほうへ向かった。
報明の攻撃、開成のマウンドにはエースの神谷君か。
点差は？ イニングは？

「8回表……0対1か」

投手戦か……開成の打線では報明からそう何点も取るのは難しい

からな。

しかし、神谷君が報明打線を1点で抑えているとは。

Side out

「ナイスピッチ」

8回表の報明の攻撃を抑えた俺に山中が嬉しそうに話しかけてきた。

「どうも、でも、無得点のままじゃ勝てないぞ？」

「わかつとるよ、ぼちぼち、反撃せなアカンな」

.....

「.....お前、やっぱすげえな」

「なにがや？」

山中はそう言って、とぼけた顔をした。

一番点の欲しい時に逆転ツーランって……話が出来すぎだろ。

8回の裏、ヒットで出塁した桜井を2塁に置いて、山中はバックスクリーンにボールを叩き込んでしまった。

打った瞬間にホームランとわかる完璧な当たりだった。

改めて、山中が敵でなくてよかったとつくづく思う。

「それより、神谷。

最後の1イニング頼むでえ」

「任しときな」

山中と言葉を交わした俺は9回……最終回のマウンドへと向かった。

第25話 調べてみつか？

Side 藤井 高志

「藤井さん、開成惜しかったですね」

帰りの車で飯村がそう言って口を開いた。

「まあ、現実はその甘くないってことだな」

開成対報明の試合は、新井君のサヨナラ逆転ツーランで幕を閉じた。

最終回、マウンドの神谷君はツーアウトまでは簡単に取ったが、3番打者にフォアボール。

そして、続く4番新井君に粘られた末に力尽きた。

「よく、やった方さ。」

他はコールドで負けているんだからな」

ただ俺は、何ともいえない疑問を頭に抱えていた。

中学時代見た、神谷君のボールは、今日見たモノよりも凄かった気がする。

自分の印象でしかないが、力が落ちている気がしてなかった。

「……思い過ぎだな」

自分の勘をそう信じたと思った。

たとえ、もし、そうだとしても彼なら大丈夫だと信じている。

神谷君がいずれ甲子園で旋風を巻き起こしてくれる……と。

「あゝ！　ちくしょう！」

「最後の一球だけ甘く入ってもうたな」

試合の帰り、俺と山中は近くのファミレスで反省会。
と、言うよりも、敗戦後のあの空気に耐えきれなくて、俺が強引に誘ったに等しいが。

「神谷おまえはよう投げた。
援護わいらできんかった野手が敗戦の原因や」

「変な慰めはやめてくれ、最後の最後に打たれて負けた。
事実はそれだけだ」

負けるのは初めてじゃないし、次があると言っても負け方が負け方だけに、結構精神的にキツイ。

「でも、今回でハッキリしたな」

「何が？」

「神谷のピッチングは全国クラス相手でも十分通用する。
今日はそれ証明出来たと前向きにとらえようや」

確かに、ある程度自信にはなったが……負けたら意味ないからなあ。

「この力りは夏かえそうや」

「当たり前だ、次は勝つ」

今日の敗戦でセンバツは無くなった。
甲子園へのチャンスは後3回。
しかも、次の夏は先輩たちにとって最後の夏だ、せめて悔いの無いように引退してもらわないと。

「まあ、それは終わった話として……」

山中は俺の目をまっすぐ見つめ、俺の様子を窺うような視線を浴びせてくる。

キャッチャーらしい、相手を観察するような目で。

「昨日は北川と何かあったみたいやな」

「……何を根拠に言ってる？」

「アホ、ワイの洞察力なめんな。」

今日のお前らの態度見てたら、何かあったことぐらいすぐに分かるわ。

試合になったら、頭の中から消えてたみたいやけどな」

なんだとう！？ 確かに試合前は何となく気まずくて距離を置いていたが、違和感のない程度のはずだ。

「……まさか、思うけど、お前朝帰りぢやうやろな？」

バツバカ野郎！！ それこそR指定の物語になっちまうだろ！

「お前が考えてるような、やましいことは何も無かった」

「ほー、嘘は身を滅ぼすぞ？」

「神に誓って本当だ」

そんな、疑いの目で俺を見ないで……

「じゃあ、ホントのこと聞かせえ」

……俺、なんか悪いことした？

・ ・ ・ ・ ・

・
・
・
・
・
「——と、言うわけだ」

ちくしょー、なんで俺は全部吐かされているんだ？
何も悪いことしてないだろ。

「はあ！？　じゃあ、なんや、北川への返事は保留かいな！？」

「まあ、そうゆうことだな」

「このヘタレめ」

やかましい、向こうがそれで良いって言うんだから仕方ねえだろ
お。

「まあ、早めに答えはだすつもりでいるよ」

「んなこと言つて、グダグダ引つ張る気ちやうやろな？」

「安心しろ、善人でないと自負しているが、そこまで悪人ではない」

「なら、ええけどなあ」

にしても、こいつは一体何を考えてんだ？
そこまで、俺と北川を近づけたいのか？

「お前は、なんでそこまで、俺と北川の仲を気にするんだ？」

「こっちは、何かと相談持ちかけられとんやぞ？
結果を気にするのは当然やろ」

北川と山中はグルだったのか……っ！？
まっまさか！？

「まさか、昨日ことも貴様の陰謀か？」

「今更なにいつとんや？
当然やろ」

そこまで、堂々と言われるとなんか清々しいな……

「その話は終わりにしよう。
それよりも、うちの監督についてだけど……」

「加持先生か？ やめとけ、あの人の素性は誰も知らんのや」

「は？ 本人に聞けばわかるだろ？」

「自分ことは一切、話さない人やからな」

マジかよ、経歴不明の監督って……ある意味公立らしいけど……

「山中、お前、今まで加持先生の采配に疑問を感じたことは？」

「あまりに的確過ぎて驚いたことはあるで。」

それに、驚くような采配でも結果的には良いほうになってたのかな」

そうだ、あの人は公立校の監督だって言うのに監督としての腕は悪くない、それどころか間違はなく上位クラスだ。

それに、勝つことにどん欲だ、でなきゃ入部して1カ月の奴にエースを任したりはしない。

そんなことしたら普通はチームの和は乱れるものだけど、あの人が監督のせいかなそうゆうことは一切起らなかった。

「調べてみつか？」

山中がいたずらを思いついた子供のような顔で提案した。

「どうやってだよ？」

高校生の俺らが個人の経歴など調べる手は口コミ以外見当たらない。

俺らが映画とかに出てくるスパイとかなら話は別だけだな。

「藤井さんがおるやないか。」

以前、学校に来た時も加持先生と仲良さそうやったし、何かと知ってるんちゃうか？」

「なら、決まりだな」

結局、藤井さんに話を聞くと言うことで意見はまとまった。

「さて……そろそろ、帰るか」

「せやな」

山中と席を立ちあがり、勘定をすませ、店を出た時だった。

「あ……」

「お……」

「ん？」

俺たち2人と鉢合わせになった、今日の試合を決めた本人、新井と。

今日、戦った奴、少なくとも負けた相手とは話す気分にはなれなくて、無言で立ち去ろうとした。

「ちょっと、待てよ」

勝者が敗者に声をかけるのはタブーだろ、普通は……

「なんだよ？」

「神谷^{おまえ}なんで、夏は居なかったんだ？」

「色々あったんだよ」

「……まあ、いい。」

戻ってきたのはありがたい話だからな」

「どうゆつことだ？」

「俺は中学時代、お前に負けたんだよ」

記憶にないな。

今となつてはそつちの方が格上だろうに。

「それに、今日のお前のピッチングはあれで本気なのか？
中学時代のほうが凄かったぜ」

新井にいづつて、結構性格悪くないか？

「大きなお世話だ、それともケンカ売ってんのか？」

「まさか、ただ、気になつただけだ。

それに、あの程度がお前の力だつて認めたく無かつたしな」

「どうゆうことだ？」

「俺は神谷おまえに勝つために報明に入つたことだ。

夏は怪我とかつまらないことで、欠場すんなよ。
一番楽しみにしてるんだからな」

新井はそう言い残し、背中を向け、右手を挙げて去って行った。

「手え、抜いてたんか？」

俺と新井のやり取りを黙って見ていた、山中が口を開いた。

「まさか、全力に決まってるんだろ」

「今のつて、ことやる？」

「力が落ちていたと言っのなら、この冬で取り返してみせるさ」
神鳥との再戦よりも、まずは新井の度肝を抜くのが先決だな。

第25話 調べてみつか？（後書き）

しばらくは中3日で更新しようと思います。

第26話 嘘はダメだよ

さて、ややこしいことになった。

加持先生のことを聞くために藤井さんに連絡を取り、約束を取り付けた所まではよかったんだが……

「は！？ 北川も連れ来いだって？」

『ああ、それが藤井さんが出した条件や』

「はあ、分かったよ。」

じゃあ、当日は俺とお前と北川と3人で『何いつてんねん？』へ？」

『わいは行かんぞ、関係無いしな。』

北川にはお前が連絡いれとけ。

まあ、頑張れや、じゃ』

「おい！ こら、待て！」

と、まあ、こんな感じで昨夜の電話は切れたんだが、メインの問題はそこじゃない。

「ごめん！ 待った？」

「いんや、今来たところ」

「そっか、それで、今日はどこに連れて行ってくれるのかな？」

そうメインの問題とは、北川がこれを約束していたデートと勘違いしてることだ。

なんで勘違いしてるんだって？

電話の向こうの北川の勢いに押されて言いだせなかったのさ……

念のために言うが、俺はヘタレでは無い……と自負している。

「——ねえ、聞いてる？」

「ん？ ああ、聞いてるよ」

「嘘はダメだよ」

っ！ 地味に痛いです、手の皮をひねられるのは。

なんか、すでに機嫌悪くない？

やべえよ、もし、ホントのこと言ったら機嫌悪くするんだろうなあ。

「はい、ごめんなさい。

で、なんだっけ？」

「言い訳は後で聞いてあげるから。
今日の本題を話して」

……なんで、ばれてるんだ？

「電話の前で神谷君、挙動不審だったじゃない。
あれだと、誰でもわかつちゃうよ」

「じめん……じゃあ、ちょっとついて来てくれ」

「——で、なわけで、加持先生の素性を教えてもらっていいですかね？」

「なるほどな……加持のことを知りたかったのか」

藤井さんの要件は、個人的な話だった。

俺とは本当にそれだけだった、ただ、北川を呼び出した理由は分からない。

彼女にはまったく、話題を振らず、藤井さんの要件は終了。

本当に無駄に連れて、来ただけだったんじゃないか？

「まあ、加持は自分のことを話さないからな^{あいつ}」

「ですから、藤井さんなら何か知ってると思って、親しそうだし」
「そうだなあ、なんて言えばいいのか……」

藤井さんは頼んだコーヒーに一口つけると、遠くを見るような眼で口を開いた。

「俺とあいつは高校時代、同じチームで3年間過ごした。
愛知県にある、館鳳高校^{かんほうこうこう}、そう言えば大体分かるだろ。
まだ、知りたいなら加持に聞くといい」

Side 北川 沙希

私なんで、呼ばれたんだろ……ただ、座って話聞いているだけなんて、暇すぎる。

神谷君は私を置いて、トイレに行っちゃうし、私にこの無精ひげを生やした人と何を話せて言うの。

「君が、神鳥君の妹か？」

「え？」

驚いて思わず顔をあげた。

私を見る彼の瞳は確信を得ていた、それだけは間違いない。

「この仕事から、色々な話を聞くんた。」

神奈川の友人から、神鳥君が妹のことを心配していると聞いてね。名前は間接的に知ってたから、君だとすぐに分かった」

「それで、仮にそうだとしたてなんですか？」

「伝言があつてね、『すまなかった』それと、『また、必ず会おう』だそうだ」

お兄ちゃん……もしかして、ずっと心配して……

「俺が今日、君を呼び出したのはそれを伝えるためだ、じゃあな」

藤井と名乗る人は、そう言って、爽やかな笑顔で去って行った。

「あれ？ 藤井さんは帰ったのか？」

「え？ うん、さっき帰ったよ」

お兄ちゃん……また、会えるよいいな。

S i d e o u t

『館鳳高校？ 確かにそう言ったんか？』

「ああ、知ってるか？」

『当たり前や、15年前、甲子園に旋風を起こした伝説の高校や。なるほど……加持って、あの加持 幸一か』

電話の向こうで山中は1人で納得した様子。

「詳しく話せ」

『また、今度な、ほな』

切りやがった……まったく、話せてんだよな。

「こうにい、誰と電話してたの？」

「ん？ 部活の奴だよ」

「北川さん？」

「その隣に居た奴だ」

「山中君か……ホント？」

疑うことか？

「つーか、俺の顔を覗き込む愛の顔が近すぎるんですけど……」

「愛、ちょっと近い」

「最近こうにいい、部活ばかりで全然かまってくれないから。甘えていい？」

その、上目遣いの顔で俺を覗き込むな！

誰だよ、愛に男を誘惑するようなことを教えた奴は！？

危険な中3だ、まだ、身体が発展途上でホントよかったと切に思う。

舞はスタイルいいからなあ、愛もあんな感じになるのだろうか？だと、したら俺の理性は将来本当に危ない。

「1階^{した}に舞も居るのにダメに決まってるんだろ。舞が洗いもの終わったら、お前も帰れよ」

しかし、舞に家事をほとんどしてもらっている、俺は相当情けない男だな……

Side 斉藤 愛

むー、こうにいい最近冷たいよお。

部活始めて、毎日充実してるのは分かってるけど……

「もう少し、かまって欲しいな」

「十分かまってるだろ？」

そう言つて、こうにいは愛の頭に手を置いて、髪をくしゃくしゃにする。

昔からこうにいが愛にしてくる、ちょっとしたクセみたいなもの。

その手から伝わってくる暖かさは、優しくてどこか、切ない。

大事には思われているけど、特別には思われていない。

何も語らない、大好きな人の手はいつも、そう言っている。

「ねえ、こうにいは好きな人とか居る？」

「……居ないよ」

「愛はね、居るよ」

ずっと……ずっと、大好きな人が。

こうにいを独占したい。

自分だけものにしたい。

きつと、こうにいが他の女と仲良くしてるのを見てると、きつと自分が自分じゃ無くなるほどに、愛はこうにいのこと……

「ふーん、愛にもとうとう、好きな男が出来たか」

えー？ この流れって普通、誰か聞く流れじゃない！？

こうにいつて愛にそこまで興味無いの！？

もう、泣きそう……

「泣きそうな顔してどうしたんだ？」

こうにいのせいだよ……

S i d e o u t

急にそんな、泣きそうな顔してお前、一体どうした？

「なっなんでもないよ。」

それより、早くゲームしよ」

「ああ、分か……」

愛の提案に乗ろうとテレビの前に座った時だった。

聞こえたのは何かガラス類が割れる音、そして、誰かが倒れる音。

「なんだ!？」

慌てて部屋を飛び出した、俺と愛の目に飛び込んできたのは、割れた皿の残骸と床に倒れる舞の姿だった。

第27話 リンゴ食べたい

「38度9分か、ただの風邪っぽいな」

「まいねえ、大丈夫？」

「大丈夫よ……すぐに良くなるから……」

明らか、大丈夫そうには見えんがな。

「とりあえず、家まで運ぶか、すぐだしな」

「でも、家には誰も居ないよ」

「……それは、ホントか愛？」

「うん、仕事で3日ほど、戻らないって」

困った、看病する人が居ないってことか。

それに運よく明日熱が下がったとしても、下がらなかつたら面倒なことになるし、仕方がないか。

「愛、今日は俺の家に泊れ、舞も今日はこっちで寝させよう。」

で、明日1日、俺が看病するから、お前はちゃんと学校行けよ」

「それなら、愛も看病する！」

「ダメだ、お前は中3で部活のほうも最後の大会へ向けた大事な時

期だ。

投打の中心のお前が居なきゃ、練習にならん」

「わかったよお」

そうすねるなって……

ふぁゝ、眠いぜ。

朝練以外の目的でこんなに早く起きたの久しぶりじゃね？

朝食は適当にすませた、学校にも連絡入れた。

よし、後は舞の体調が良くなるのを待つだけっと。

「よく、寝てるな」

薄明りで眠る、美少女はなかなか、絵になる。

……俺は何考えてんだ？

「でも、改めて見るとキレイ顔してるよなあ」

眠っている、舞の顔を覗き込みしみじみ1人呟く。

これで、性格がもう少し大人しかつたら……いかん、相手は今寝
ているんだぞ、煩惱滅却つと。

状況を間違えば俺は確実に変態だ。

「ん……？」

やべえ、起きちゃいましたよ。
しかも、完全に目が合った。

「あ……よつよう。
気分どう？」

「……変態」

起きて一言目がそれかい！

しかも、布団で顔隠して背中を向けられました……

おかしいな、俺っていいことしてるはずだよな？

「なんか、食べるか？」

「いない……」

「でも、なんか食わないと治らないぞ」

「……」

舞は依然として背中を向けたまま。

……出て行けってことですか？

「分かった、分かった。

出て行くよ、ゆっくり寝とけ。

何かあったら呼べよ」

「え？ まっ待ってっ」

力の無い、細い腕で服を掴まれた。

「なんだ？」

「リンゴ食べたい……」

昼のスーパーは思っていたよりも人が少なかった。
つか、リンゴってなあ。

あいつ、リンゴ好きだったっけ？

「これでいいか」

果物売り場のリンゴを1つ適当に選んで、家へと帰った。

「皮をむくのって小学校の家庭科の授業以来だな」

よし、どれくらい長く出来るか試し……10?で終了だと?
……くだらないことしてないで、早く舞に届けてやろう。

「ほれ、ご希望のリンゴだ」

「ありがとう……」

舞は出されたリンゴをつまようじで口へと運ぶ。

「上手いか?」

「……身が少ない」

「わがまま言っな」

「だって、ホントのことだもん」

まだ、遅く弱い声だけど、体調が少しは回復したみたいだ。

額から染み出た汗が舞の毛先を濡らし、女としての色っぽさを増幅させていた。

いかん、いかん。

よからぬことを考えている場合じゃない、相手は一応病人だぞ。

「どうかしたの……?」

舞の言葉に引き戻された俺は慌てて首を横に振った。

「また変なこと考えてたの……？」

「または余計だ」

「ねえ……ちょっとこっち来て」

っ？ なんだ急に

「うわ！」

舞に手を取られ、引きずられる形でベッドに舞とダイブ。

腕には舞の体のラインがハッキリと分かるぐらい密着している。

そう、ハッキリとだ。

「えーっと、離してくれるかな？」

恥ずかしすぎて、目を見れねえ。

「功はもしも、功が考えること何をしてもいいよって、言ったらどうするの？」

おいおい、こいつは何言ってるんだ！

自分がやばい発言してることに気づいてないのか！？

「頼むから、離れてくれ」

「あたしを見て」

アホなこと言うなあああ！
すでに、理性は臨界寸前だぞ！
直視すれば間違いなく理性が壊れ……

「お願い……」

……普段強気な女の子にそんな弱々しくお願いされたら、断れません。

持ってくれよ、俺の理性の防波堤。

「なんなんだ、突然？」

「功の顔、見たかっただけ」

それだけの理由に俺の理性を攻撃するな。

「毎日、見てる顔だろ？」

「……だって、寂しかったんだもん」

こいつ、熱にうなされて自分が何言ってるか分かってないんじゃないじゃね？

それに、俺の理性、限界突破だよ……

「舞、俺ホントにもう「スースー……」は！？」

物凄く可愛い寝顔で寝てるよ……離れてくれそうにもないし。
うん、あれだ、こいつの発言は無かったことになったんだな。

OK、それでいこう。

にしても、今日は早起きだったから眠いな。
少し、俺も寝るか。

脱出不可だからこのままで。

Side 齊藤 舞

「ん？」

なんか、功に抱きついてた夢を見……！？
どうしょ、ホントに功に抱きついて寝てる！
なんで、なんで！？

この状況に至るまでの過程が全然思い出せない。
どうしょ、変なこと言ってたら……にしても。

「無防備な女の子の横で平然と寝るとはどうゆうつもり？」

眠っている功の横顔を指でつついて呟く。

そりゃ、寝込みを襲うのはいけないけど、堂々と寝られると異性
として見てもらえて無いみたいで結構ショック。

あたしは、今こんなにも心臓が高鳴っているのに。

「……君のことが大好きです。」

他のものは目に入らないくらい」

いつか、君はあたしの思いに気づいてくれるかな？

もしかしたら、今のままかも知れない、だから……

今だけ、この時だけはあたしだけの君で……

S i d e o u t

次の日、風邪の治った舞の代わりに功が風邪をひき2日続け学校を欠席した。

第28話 クリスマスの予定は？

「くそ、このメニュー絶対俺を殺す気だろ」

肌寒さが増し始めた12月、年内の練習試合もすべて消化し練習はオフシーズン独特の地味で苦しい基礎トレ中心。

ただし、俺だけ加地先生特製の特別メニュー、ただし、このメニュー半端なくきつい。

「どうした？ もうギブアップか？」

しかも、走りこみ以外の時は加地先生が監視役で練習を管理する。そんな、目を光らせなくても逃げませんって……

「まだまだ、行けますよ」

「そうこなくてはな。」

お前には夏頑張ってもらわないといけないしな」

自覚しております。

「夏は絶対負けません」

そうさ、俺には足踏みしている暇は無いんだ。

過去は消えない、それでも前へ進むと決めたのだから。

「神谷、貴様クリスマスの予定は？」

部活の帰りに1年全員で寄ったファミレスで隣に座る丸川が話しかけてきた。

「ん？ 今のところは何もないけど」

「ホントか？」

「嘘をつく理由が無いだろ」

「よし、じゃあ、クリスマスはお前の家でパーティだな」

「……なんですと？」

「俺の分析では神谷は1人暮らしだろ？」

だから、騒いで家の人に迷惑のかからないお前の家だ」

解説と分析ありがとう。

そして、俺への迷惑は考慮しないのか？

「すみません！ お酒とかは持ち込みませんから！」

そこは関係ないだろ、桜井よ。

「まあ、あきらめろや」

「神谷君の家、行ってみたい」

貴様らには、遠慮と言うものが無いのか？

「ふざけんなあああ！！」

なんで、いちいち俺の家なんだ！？

あと、理由が意味わからねえだろ！！！」

「何か困る理由でもあるのかな？」

やべえ……北川が今以上黒いと思ったことねえ。

何か言い逃れ出来る理由を考えろ。

このままでは俺の家がパ^{戦場}ーティ会場になっちまう！

「何も無いね、じゃあ決定」

「「「イエーイ！！」「」「」

そんな盛り上がるのかお前ら？

結局断れなかった……嫌じゃないんだけど、問題がっと言つより高い壁があるんだよねあ。

「功、今年のクリスマスはどうするの？」

「今年もこうにいの家でパーティーでしょ？」

お前ら姉妹が俺の家に居ることに違和感が無くなってきたな。

そう、今俺の直面している問題とはこの何故か恒例となった俺の家でのプチクリパ。

いつその事、一緒にするか？

おお、そうすれば一気に問題は……解決しないな。
丸川に俺と舞が幼馴染だと言うことは言ってない。

言ったらアドを教えるだのしつこそうだからな。

つまり、その場に舞が居ると俺が丸川にやられることに……

「それなんだが、今年は無しだ」

「え！？ なんてこうにい！！」

「愛ももう中3でもうすぐ受験だろ？」

それに俺と舞はもう高校生だ。

クリスマスぐらいお互い静かにだな「言い分はそれだけ？」はい！
？」

んな！？ 何故、舞の奴は指を鳴らして戦闘態勢に入っているんだ！？

もしかして、ここが俺の命の終点？

認めん、俺は断じて認めんぞ！

「待て！ 落ち着くんだ！

早まったことするんじゃない！」

「何、言ってるの？

あたしは極めて冷静ですけど？」

顔は笑っているが、覇気がみなぎっている。

危険だ、俺の命は極めて危険な状況だ。

……開き直るか。

「実は……」

・ ・ ・ ・ ・

・
「……と、言うわけだ」

舞の覇気に負けて、すべて話してしまった……悪いことはしてないはずなんだが、なんか尋問に負けた気分だ。

「一緒にすればいいじゃない？」

「えー！ やだやだ！
断つてよ……こうにい」

くつ、相変わらず愛の上目づかいは強力だな。
しかし、約束してしまった手前断ると言うのは俺の信用に関わる気が。

「功、沙希ちゃんも来るんでしょ？」

「北川？ ああ、その予定だな」

気のせいだろうか、愛が北川の名前に反応したのは。

「だって、どうするの愛？」

「……こうにい、愛の言うことなんでも聞いてくれる？
聞いてくれたら、合同クリパで我慢する」

……
なんでもだと？

この上なく危険な香りがするんだが……なんとなく、ムフフな展開があるような気も……

「何、考えてんの！」

「ぐふ！」

何故、俺の思考は舞に筒抜けなんだ？
読心術でも、使ってんじゃないかと最近疑いたくなる。

「あんたは全部顔に出てんのよ。
愛を変なことに巻き込まないで」

「勝手な言いがかりはやめ」でも、愛はこうにいが初めての人だったらしいな」は！！？」

おいおい！

この中3何言ってた！！

「愛、あんた意味分かって言ってる？」

さすがの舞も顔が引きつっている。

「うん、学校でそれくらい習うよ」

ああ、純粋なままで育って欲しかった……

「功！ あんたが変な物持ってるばかりに愛に悪影響出てるじゃない！
い！」

「ふざけんな！ お前の教育不届きだろ！
俺に責任押しつけんな！」

「あんた、これ以上言うなら、また捨てるわよ」

隠した場所に無いと思っていたらお前か！

「人の部屋に勝手に入るなと言っただろ！」

「だったら、変な物置いとかないで！
見てるこっちが恥ずかしいでしょ！」

「見なきゃいいだろ！」

「まいねえはきつと、こうにいがどんな属性持ってるか気になるんだよ」

は！？

この爆弾娘は何言っただ？」

一応言っておくぞ、俺は年上属性だ。

「愛、あんたこれ以上何か言ったら力づくで黙らせるわよ」

「だって、本当のことじゃん。」

まいねえもこうにいのこと気になって仕方ないもんね」

意味は深く考えないでおう。

「……ちよつと、こっち来なさい」

おお、舞の顔が耳まで真っ赤だ。
愛のやつ、地雷踏んだんじゃない？

「え！！？ やだ、まだ死にたくない！
助けてこうにい！」

許せ愛、俺の力ではどうにも出来んのだ。

「まいねえ、ごめんなさい！
謝るから許して、お願い！」

愛は最後にそう懇願しながら、舞に引きずられていった。

第28話 クリスマスの予定は？（後書き）

テストのため少し投稿は控えさして頂きます。
いつでも、感想・意見は募集中です。

特に感想は作者のモチベーションに直結しますのでよろしくお願いします。

第29話 クモみつけ（前書き）

現実逃避と言う名の小説投稿。
季節外れのクリスマス編です。

第29話 クモみつけ

Side 山中 淳

「ここや、ここや」

約束のクリパの日、北川を除く1年野球部部員で会場となる神谷家へ。

北川は少し遅れてくるとか。

「おい、山中。」

神谷が舞ちゃんと幼馴染ってマジか？」

そついや、そのこと知ってから丸川はうるさかったな。

「おお、ホンマやで」

「見たら分かるだろバカめ」

「ああ!？」

関本てめえ、俺様にケンカ売ってんのか!？」

「うるさい、近所迷惑だ」

「きよ今日は仲良く行きましょうよ、ね?」

テンパリ過ぎやで桜井。

「さて、入るか」

一応、インターホン押すのが礼儀ってもんやろ。

……… 応答なしやと？

「おい、山中、時間合ってるのか？」

「合ってるはずやで、間違いなくこの時間の『どちらさま？』お、出たか」

神谷の声が若干、いつもと違うのは気のせいだろうか？

「わいらや、家入れてくれ」

『……… 分かった。』

玄関あいてるから勝手に入ってくれ』

「じゃ、お邪魔しまーす」

この靴サイズが小さいな……… 斉藤のか。

「おい、神谷あー！」

「な、なんだ！？」

神谷の奴、驚き過ぎやろ。

「舞ちゃんは今来てるのか？」

「んあ……… あー、もうすぐ来るんじゃない？」

はあ？　じゃあ、あの靴は一体……

「山中、気づいてるか？」

丸川の言葉に頷く、神谷をよそに関本が耳元でそつと聞いて来た。

「なんや、関本？」

「玄関にあった靴、あれはおそらく斉藤のだ。

と、なるとこの家に居ることになるが、神谷の発言にあの少し挙動不審な言動。

怪しくないか？」

「そうやな……少し、探るか。

神谷あ、お前の部屋って2階か？」

「え……？」

おお、そ、そうだけど？」

「関本、決まりみたいや」

このアホは家で一体何やってたんだか……

「そのようだな、神谷、お前の部屋を見せろ」

「そ、それより、準備しようぜ」

「アカン、お前の部屋が先や」

「今は汚いからダメだ」

「関本、桜井。
ちよっち、抑えとけ」

「な！？ 離せ、お前らあ！」

さて、見に行くかの。

「いくで、丸川」

「おう！」

「やめろお！ 開けるなあああ！」

そんな、言われ方したら好奇心そそられるわ。

神谷の部屋のベッドで斉藤が寝てたら、面白い話のネタに……

ーガチャー

「え……？」

「な……？」

「あ……」

そこに広がっていたのは、予想外の光景だった。

「ス、スマン！！」

Side out

ああ、ややこしい話に……
別にやましいことはしてないのに。

「神谷あ！！」

お前、家で何やってたんや！！？」

「殺す！！」

落ち着け2人とも！

特に丸川！

「殺す」は言い過ぎだ！

「待て、待て、待て！

俺の話を「死ねえええ！」ぐは！」

やろお……本気で殴りがやがったな。

「さーて、神谷。

事情を説明を説明してもらおか」

「山中、お前ら何を見たんだ」

「……Tシャツ1枚姿の斉藤や」

「か、神谷君、不謹慎です」

「ま、待て……俺の話を聞け」

「遺言は短めにしとけ」

俺はなんでいじめられてるんだ？

「いいか、よく聞けよ」

話は、山中たちが来る数分前にさかのぼる。

「なあ、舞。

これ、どこに置いとけばいい？」

「ん？ その辺でいいよ」

クリパのために、俺と舞は飯の準備をしていた。
来る人数が多いので、俺が舞を手伝っていた。

「愛は結局どつちなんだ？」

「来るって、あの子毎年楽しみにしてるから」

「愛もまだまだ、ガキだな」

「それは、あんたもでしょ。」

それより、早くしないと間に合わないわよ」

ホントだ、時間がもう無い……あ、クモだ。

「クモみつけ」

「うそ！ どこ!!?」

そーいや、舞はクモが苦手だったな。

「お前の足元にいるぞ」

「いやあ！」

少し、からかってみたら、激しく転倒。

拍子に近くに置いてた牛乳を頭からかぶった。

「お前、何やってんだよ！」

「だってえ、クモだめなんだもん」

そんな、半泣き状態で言わなくてもいいだろ。

「いいから、シャワーでも浴びて来い！」

・ ・ ・ ・ ・

舞に俺のジャージを貸してみたが、当然サイズが大きいみたいだ。

「大きすぎない？」

「文句言っな」

「……功って、部屋に服あったよね？」

ちよっと、着替えてくるから、皆きたらよろしくね」

「お、おう」

この直後インターホンが鳴り、今に至る。

思い返せば、「着替えてるから」と一言、言えば万事解決したんじゃないか？

「あれ？ 沙希ちゃんは？」

俺たちの前に現れたのは、ジャージ姿の舞。
結局着替えなかったのか……俺殴られた意味なくね？

「遅れてくるそうや。」

それより、斉藤、さっきはその……すまんかったな」

山中はそう言って、顔の前で手を合わせた。

丸川は……目を閉じ天の仰ぎ、何やら妄想中。

何を考えてるかなんて言うのは、大体想像つくが。

「え？ 別に気にしなくていいよ。
その功^{バカ}が悪いんだし」

なんですと？

「おい、こら、ちょっと待て。」

俺が悪いってどうゆうことだ？」

「だって、そうでしょ？」

女の子が着替えてる部屋に男を入れるなんて、情けないやつだわ」

「女の子？ それは誰のことだ？」

「っ！　そう、土に帰りたいみたいね」

やば、山中たちが居る前では何もしてこないと思っていたのに！

「ま、待て！

おちつ、「ふっ！」　うわあああ！」

背負い投げだと？

いつの間にそんな……投げ技を……

しかも、おまけに肘を腹に落としていきやがった……

「さっ、皆、中に入って。

そこに倒れてるバカはほっというて」

皆、俺をそんな哀れな目で見ないでくれ。

「神谷、舞ちゃんっていつもああなのか？」

「学校とのギャップに驚いてんだろ？」

まあ、あんなもんだ、だから、舞を狙うのは、やめとけ丸川」

「いや、気の強い女の子の方が俺は好みだぜ！」

丸川^{こいつ}Mだったのか。

第29話 クモみつけ（後書き）

感想お待ちします！

第30話 聖なる夜に（前書き）

現実逃避投稿第2弾！

祝30話です、読者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。
これからもよろしく願います。

第30話 聖なる夜に

ああ、もう駄目だ眠い。

もう、11時だぜ、なんで皆そんなハイテンションを保ってられるんだ？

「こうにいい！」

話聞いてる！？」

愛は途中参加だから、体力が残ってるか知らんが俺はもう限界なんだよ。

そう言えば、今回で関本が年下好みと言ったことが判明した。

愛が来た瞬間の関本の固まり具合と言ったら……思わず笑ってしまった。

「なんだあ？」

眠いから短めにしろよ」

「北川さんっていい人だね」

「今さら、何言ってるんだ？」

どうやら、今回のことで北川に対する愛の敵意は消えたようだ。どんな話をしたかは知らんが。

「うっん、なんでもない♪」

それより、愛の作ったクッキー食べてくれた？」

「え？ あー、食べた、食べた」

「美味しかった？」

「……ああ」

「こうにい、ホントは食べてないよね？」

クツ、あんな、危険物を俺に食えと言うのか！？

これは余談だが舞に比べ愛の料理はひどい。

それを本人が認識してないだけに余計に質^{たち}が悪い。

ちなみに、愛にすすめられて食べた、関本・桜井は体調を崩し今は再起不能となって寝ている。

「今回の自信作なんだ、食べてようこうにい」

「腹いっぱいなんだ、だから、今度な」

「神谷君、食べてあげなよ。」

愛ちゃんが一生懸命つくたんだよ？」

「北川さんもそう言ってるし、だから……ね！」

こんな、危険物进行处理しろと言うのか！？

何が楽しくて危険物処理班の気持ちを体験しないといけないんだ！？

「食えや、神谷。
意外とうまいで」

なぜ、山中は平気な顔で食べているんだ？

「淳さん、意外は余計だよ」

そして、愛はいつの間に山中のことを下の名前で……しかも、淳さんって。

ほんと、今日、愛に何があったんだろう……

俺が意識を取り戻し時には、山中たちは居なくなっていた。どうやったら、愛はあんな味を出せるのだろう……味の大虐殺とはあのことだな。

「調子はどう？」

まだ、家に残っていた舞が聞いてきた。

「頭が少し、クラクラする」

はい、と言って彼女は水を一杯くれた。
それで喉を潤すと、俺はあることを思い出した。

「そっぴゃ、お前さ、なんで俺の制服のシャツ着てたんだ？
おかげで、山中たちに殺されかけただろ」

着替えたんならまだしも、結局そのままのジャージで降りてくるし。

「えっと……その……」

頬を紅潮させて、言葉につまる、その姿は俺の加虐心をくすぶつた。

「お前のせいで、俺は変な疑いをかけられて山中^{あいつ}たちの信頼がガタ落ちだ。

……こりゃ、責任とってもらうしかないよな？」

「責任……？」

「聖夜に男女が誰もいない家に2人きりだぞ？
状況を把握してるのか？」

俺の言葉の意味を理解したのか、じりじりと壁際に後退する舞を追いつ込み、顔の両横に手について逃げ道を塞いだ。

我ながらなかなかの悪役っぷりだ、はたから見たら完全に俺が舞を襲っている。

「ま、待って！」

目をそらしながら彼女が声を上げる。

「やだよ、舞が理由を説明してくれたら考えるけど?」

「……だから」

「聞こえない」

「功の服……着てみたかったから」

……はい?

「意味がわからないんだけど?」

「うるさいなあ!」

功の匂いがどんなのか知りたくて、いつも着てる制服なら……その……」

どんどん、弱くなる語勢。

はあ、ホントこいつは何考えてんだか。

でも、せつかくだからもうちょっと、いじめてみよう。

「だったら、いくらでも教えてやろうか?」

「え?」

頬を少し紅潮させ、こつちを見たきれいな瞳に整った顔立ちにドキッとしたのは俺と君だけの秘密だ。

やべえ、超かわいい……

「功、それってどうゆうこと？」

俺は自分の出した言葉を少し後悔していた。
なぜなら俺の中では、2つの派閥に分かれ脳内会議が行われていた。

その2つは、もちろん『理性』と『本能』だ。

『もう、襲っちゃえよ。』

今日は聖夜、明日も休み、条件はそろってるぞ』

しかし、こうゆうのはお互いの気持ちが……

『ダメダメ、彼女でもないのにヤッてしまつて責任とれるの？』

そ、そうだよなあ。

『ちょっと、だけじゃねえか。』

ワンナイト・ラブってやつだ。

それに、お前は自分のその衝動をいつまで抑えられるんだ？
性欲は人間のもっとも強い欲の1つだぞ？』

そうか、一夜限りか、その考えがあつたな。

『言い訳して逃げるのかい？』

彼女には日頃の事と言ひ、昔の事といい、色々恩があるんじゃないのかい？』

それもそうだな。

お楽しみは、置いとくか。

「なんでもない」

舞の脱出路を塞いでいた、手をどけて、背を向けた。
これ以上はマジで危ない。

「待つて」

服の袖をつかまれた。

「なんだ？」

まさか、襲ってほしいとか言っんじゃないだろうな？」

「そこまでMじゃない！

えっとね……クリスマスプレゼント欲しいな」

「はあ？」

じゃあ、明日でも買いに「今、欲しい」は？」

舞は「動かないでね」と言っつて、距離を詰めてきた。

「功の味も知りたいと思っつて……」

「おい、何言っつて、んっ！」

おい、ちょ、舌が！

「はあ、ごちそうさま」

「何、考えてんだ？」

「ん？ 攻略するにはもうちょっと、積極的になろうと思って」

「はあ、恥ずかしいなら、しなきゃいいのに」

実際、言葉は冷静だが顔の様子は言葉とは真反対だ。

それに、舞が女の子らしいことを言うと、どうも調子が狂う。

「うるさい！」

お、いつもの調子に戻ったか。

「なに、にやにやしてんの！」

「いんや、舞は今みたいに怒ってるほうがらしいと思ってな」

「けんか売ってるの？」

「そうやって、気の強いところは昔からかわらねえな」

「あんたは生意気になっただけやない」

「根は変わってないよ」

「そっか……じゃあ、前みたいにならないでね」

「たぶんな」

今年も、もうすぐ終わりか。
1年って早いよなあ。

高校生活もこの1年のように、あっという間に終わってしまうの
だろうか？

……今はそんなことよりも、一瞬一瞬を頑張ろう。

こんなどうしようもない俺を支えてくれる、幼馴染のためにも。

第30話 聖なる夜に（後書き）

功の過去についてはいずれ本編で扱う予定です。
にしても、そろそろキャラ紹介でも作った方が良いでしょう？

第31話 ウォークマン貸してや（前書き）

冬が明け、春の甲子園が終わった。

2年生に進級した、功たちの2度目の夏が始まるうとしていた。

少しずつ変わりゆく、彼らを取り巻く環境と心。

高2編突入です。

第31話 ウォークマン貸してや

5月病とはよく言ったものだ。

去年の今頃に比べると、体がだるい。

「ふあ、ねみ」

「ごめんこうにい！
待った？」

「いんや、来たばっかだ。

それより、早く行くぞ。

愛が朝練に遅刻して、飛鳥あすかの奴にぐちぐち言われるの俺なんだから
な」

「福島先輩は良い人だよ？」

「はいはい、分かった、分かった」

高校生活2年目に突入。

愛は結局俺や舞と同じ、開成に入学した。

宣言通り、ソフト部に入り毎日練習に励んでいる。

「でもさあ、こうにいとこうやって登校できるなんて夢みたいっ」

「中学の時もしてたろ」

「2人きりってのは、無かったよ」

今、俺は愛と部活の朝練に向かっている途中。

野球部は基本的に朝は自主練なので、参加自由だ。

グラウンドの大部分をソフト部が使うってのも、理由の1つ。

公立校だから放課後なんかは、サッカーとかと共同だから、いつでもどこが使うかはキャプテン同士で決めているらしい。

「おっはよ！」

神谷は今日も愛と仲良く登校か？」

「あ、おはようございます、福島先輩」

学校に着いた俺と舞に元氣よくあいさつした女こそ、ソフト部2年生エース、福島^{ふくしま}飛鳥^{あすか}、ポニーテールに髪に運動部らしい、引きしまった身体。

顔は相当可愛いと思う、黙^{もく}っていればの話だが。

「おいおい、神谷あ。」

せっかくウチが話しかけてんのに、愛想無さ過ぎひんか？
それとも、ウチが美人やから照れてるんか？」

相変わらず、朝がよくしゃべるやつだ。

あつの口には、休みが無いのか？

「照れもないし、愛想が悪いのは昔からだ」

「ウチのこと、下の名前で読んどいてよく言っわ」

「お前が呼べと言っただろう」

飛鳥^{こいつ}と知り合ったのは、一か月前。
愛の入部した後だった。

「お前が神谷か？」

クラスの隅にある、自分の席でいつも通りウォークマンを聞いている時だった。

声の主は、声が聞こえてない俺の机を叩き叫んでいた。

「おい、ウチの話を聞け！」

っ！ イヤホンごと引っこ抜きやがった。

「なに？ 何か用？」

「さつきから呼んでんですけど?」

舞以上に気の強そうな視線は俺にある気持ちを抱かせた。

——めんどくさいやつに絡まれた——

「ウチの名前は福島 飛鳥。」

呼ぶ時は飛鳥でいいから」

「はあ、で、何?」

「最近ソフト部に入った、愛が神谷と幼馴染ってホンマ?」

「ああ、ホントだけど?」

それがどうかした?」

「じゃあ、神谷!」

愛のことは任せるで」

はい? コイツナニッテンダ?

「えっと、どうゆう意味?」

「いいか、あの愛ってのはかなりの逸材や。

だから、お前が責任もって管理しいや。

じゃ、頼むでー」

「福島待て! なんで俺がそんなこと」「飛鳥でいいって、言ってるやろ」「文句言つのそこ?」

「ええい、いちいちうるさいなあ！

お前は黙って愛をしつかり管理しとけ！
分かった！？」

「はい、了解です……」

やっべ、超こわい……気が強いと思ってたけどここまでとは……

「おい、生きてるかー？」

「んあ？ ああ、バッチリだ」

「何、考えてたん？」

「ちょっとした回想だ」

変な妄想すんなつと、飛鳥は俺の頭を殴ってきた。
どうして、俺も周りの奴は変わった奴が多いんだろうか？

2年に進級した際、俺は丸川と同じクラスになった。
舞・関本・桜井は理系だから同じクラス。
んで、北川と山中が同じになった。

ちなみに俺のクラスには、オマケにこの女も。

「神谷あ、ウチにウオークマン貸してや」

H R中に暇そうにする、飛鳥に話しかけられた。

「嫌だね、俺の昔っからに愛用品だ」

厄介な女と知り合ってしまった、しかも、隣と言うダメ押し。
悪夢だ、席替えが1年無いと言うから余計に絶望する。

「功、これ昼ごはんね」

「おう、サンキュ」

昼休み、いつも通り舞が弁当を持ってきた。

「神谷あゝ、舞の愛妻弁当か？」

そして、飛鳥は相変わらずうつるさい。

「飛鳥！ 変なこと言わないでっ」

「ほー？ ウチにそんなこと言っているのか？
神谷あ、舞が話ある「黙って！」「ふが！」

舞はもの凄い速度で飛鳥の口をふさいでしまった。
何やら弱みを握られているらしい。

「飛鳥、ちよつと話があるの」

「ウチいゝ？ 堪忍してえな」

「ダメ！」

2人は廊下へと消えていった。
俺には関係ないし、ほつとくか。
2人を見送り、舞から渡された弁当のふたを開けた。

おお、相変わらずうまそうな弁当だ。

俺は箸でタコの形をしたウィンナーを口に運んだ。

Side 福島 飛鳥

「で、話って?」

「えっと、その……功の前であんまり変なこと言わないでっ」

「例えば、神谷のこと好きとか?」

「~~~~っ!」

おお、面白いくらいに顔が赤くなっていく。

ホンマ面白いなあ、舞こいつは。

積極的に行けとウチが指示して、クリスマスにキスまで行ったなら最後まで行けばよかったのに……まあ、そのらが舞の可愛いところでもあるんやけど。

「でも、神谷との距離はつまってるん?」

「全然……てか、ここまでして気づかない男っている!?」

確かにいくら幼馴染でも、身の回りの世話をここまでするのは舞くらいやろな。

神谷も鈍すぎるわ。

「舞はスタイルもいいんやし、体で迫ってみたら?」

「でも……そうゆづのって……」

恥ずかしそうに声が地小さいさくなっていくあたり、舞はこの手の会話は苦手のような。

「功からがいいっていうか……」

「はあ、何言ってるのや」

呆れて物も言えへんわ。

「いいか舞、欲しいものを奪うのに手段は選ぶな。

それに神谷の競争率は半端や無いで。

気をつけてないと誰かにネコばばされる恐れだっである」

「分かってるよ、分かってるけどさ！

普段一緒にいるから、キツカケがいまいちつかめないって言うか…

…それに、クラスも別になっちゃたし」

うーん、何か言い手は無いもんか。

S i d e o u t

第32話 落ち込む少年！

放課後、昨日が練習試合だった、野球部は今日はオフだった。
朝練で身体をある程度動かしたから問題無しと思い、帰る準備を
している時だった。

「神谷あ、もう帰るん？」

飛鳥が悪そうな笑みを浮かべ話しかけてきた。

「ああ、そうだけど、なんか用か？」

「1人で帰るん？」

「そーだよ、なんか文句あつか？」

「ウチと帰ろうや」

……なんか、ややこしい話になってきたぞ。

「神谷は好きな相手とかおらんの？」

「……いねえ」

「ほー、より取り見取りやからか？」

飛鳥に脅迫と言う名の誘いを受けて、一緒に帰っているが、飛鳥はずっとしゃっべている。

「あのなあ、お前の口はマシンガンか？
少しは静かにしろ」

「いいやん、せつかくやし神谷に色々聞いたと思って」

それが、面倒なんだ。

そーいや、こいつ今日の練習はどうしたんだ？

「お前、今日の練習は？」

「うち、今日は病院行くから休み」

「へー、色々大変だな」

「肩は、今年の大会までって言われた」

飛鳥の声のトーンが暗くなった。

「どうゆうことだ？」

「今の3年が引退するまでってこと、新チームになったら愛に投げてもらわないと。」

ウチはもう投げられないし……でも、ファーストぐらいなら問題ないかな」

それで、俺に愛の管理を任せたのか。

こいつはこいつで色々考えてるんだな。

「まあ、頑張れや」

「今の話、愛には内緒やからな」

そんなこと、俺に話してよかったのか？

「あ、あれ」

飛鳥はそう呟くと突然足を止めて、車道を挟んで向こうの歩道を指差した。

その、指先の向こうには開成うちの制服を着た男と歩く舞の姿だった。

「舞！？」

「あの男は確か……」

「知ってるのか？」

「うん、確か舞と同じクラスの村上やったかな？
バスケ部のイケメン。」

でも、なんで舞とおるんやろ？」

……なんでなんだろうな。

その日の夜、舞から帰りが遅くなるからとメールがあった。
夕食は自分で何とかしろと言う、意味だろう。
理由は尋ねなかった、了解と一言だけ返した。

「こうにいのご飯久しぶりに食べるね」

「味は知らないぞ」

「言ってくれば愛が作ったのに」

絶対にやめてくれ。

しかし、村上だっけか、なんで舞と居たんだろうな。
ついに、舞に彼氏か？

まあ、あいつも高2だもんな、外見は可愛いと思うし今まで彼氏

がない方が不思議だったしなあ。

「こうにい？」

どうかしたの？」

「ん？ なんでもないよ」

「まいねえのこと？」

相変わらず鋭い。

だが、ここでボロをこぼすわけには……

「まいねえ、最近クラスの男の子とよくメールしてるみたい。
この前は電話してたみたいだし」

こりゃ、決定的か。

「功、これ今日のお昼ね」

「おう、サンキュ」

次の日の昼休み、いつも通り舞が弁当を持って来てくれた。
昨日のこと、村上とのことを聞くべきか俺は迷っていた。

「どうかした？」

「いや、なんでもない」

俺が首を突っ込むことでも無いな。
舞が言っ気が無いなら聞く必要もない。

・ ・ ・ ・ ・

「さてっと、部活でも行きますか」

放課後、HRが終わり背伸びをして、身体を伸ばしている俺の横
で飛鳥が不思議そうな顔をしていた。

「お前、ホンマに行く気なん？」

不思議な顔をしていた飛鳥はそう聞いて来た。

「なんかあったっけ？」

「今日から文化祭の準備やろ」

あー、そついや昨日そんなことで、練習開始時間が遅れるとか山
中が言ってたような気もするな。

「じゃ、俺はサボりってことで」

全体練習が始まるまでにもやれることはあるしな。

「ほー、ウチにたてつく気か？」

なぜそうなる？

「落ち着け、俺は別にお前の敵になるつもりはない」

「なら、残れ」

誰か俺に自由をくれ。

「ちくしょー、なんで俺はパシられてんだ？」

何が職員室に必要な物があるから取ってこいだ。
飛鳥のやろっ……俺をこき使いやがって。

「それホント村上君？」

「うん、そうだよ。」

それでさあ……」

職員室へと向かう俺の耳に入ってきた声は、聞きなれた声と始めて聞く男の声。

名前は知っているんだがな。

2人の楽しそうに会話する声を聞いた俺は、反射的に2人から見えない位置に身を隠した。

気づかれないようにやり過ごし、2人が去つたのを確認してから、身を出した。

俺の一連の行動を見られていることにも気づかず。

「神谷君……なにやってんの？」

「北川！？ 違う、これには深い意味は無い！」

「はい？ そんなにてんぱること私した？」

確かに……俺は1人で何焦ってんだろ。

「神谷君も職員室？」

とりあえず頷く、俺。

「じゃあ、一緒に行こ」

「
おう」

・ ・ ・ ・ ・

「失礼しましたー」

「神谷君、ごめんね。」

私の分まで持ってもらっちゃって」

「別にいいよ。」

「ついでだし」

と、言ってみたもの段ボール2つは前が見えん。
しかも、結構重いし……一体何入ってた？

「……ねえ、さっき廊下でなんで隠れてたの？」

「別になんでもないよ」

「ふーん、舞ちゃんのこと？」

俺は顔に思っていることが書いてあるのか？

「もし、そうだって言ったら？」

「ちょっと、妬いちゃうかな」

なんか、嫌な予感が。

「舞ちゃんが嫌いなわけじゃないよ。
でも、神谷君が他の娘のこと考えてるってのは、ちょっと嫌だな」

彼女は、廊下のガラス張りになった窓の外を見て行った。
外の景色は、茜色の夕空だった。

「北川……」

「私の個人的なわがままって、ことは分かってるよ。
でもさ、『神鳥 哲也の妹』じゃなくて、私自身を見て欲しいなっ
て、どうしても思っちゃうんだよね」

何も言い返すことが出来なかった。

北川の言ったことは、俺の心の核心をついた言葉だったからだ。

「舞ちゃんと神谷君のやり取りを見てると、羨ましいなって思う。
神谷君は私に気を使って、いつも優しいもんね」

Side 北川 沙希

君は優しすぎるよ。

君の心の内側を覗いてみたい。

私には見せてくれない表情だって、きっとあるんだろうね。

「ごめん……」

そんな、暗い顔しないで、君のそんな顔は見たくない。

でもね、見たくないと思う一方で、色んな表情を見たいと思う、
私も居る。

「落ち込むな少年！」

「っ！

いきなり背中叩くなって」

そんな、驚いた表情も好きだよ。

……絶対振り向かせて見せるからね。

Side out

第33話 打ち返すぜ

Side 加持 幸一

「ここか」

やっと、見つけた。

藤井の奴が行き成り来いと言うから来たのに、約束の居酒屋がこんな分かりにくい場所にあるとは。

「加持！ こつちだ、こつち！」

店内に入ると藤井が元気よく手を振ってきた。
元気なのは相変わらずだ。

「で、行き成り呼び出してなんだ？」

「少し、話がしたくなつてな」

「個人か？ それとも……」

「個人の方だよ。」

実は俺の所に、神谷君たちが加持おまえの正体を聞いて来た。
去年の秋が終わったところだ」

「なんで今更そんなこと言っただ？」

「そんな話をあつたことを俺が忘れていたんだ」

本当にこいつは、昔から適当だ。

こんな奴が自分のチームの4番を打っていたと言っから笑えてしまっう。

「別に隠してるつもりはないんだがな」

「お前の正体知ったら、驚く奴もいるじゃないか？

春の優勝投手そして、夏の準優勝投手ってな」

今となつては過去の栄光だな。

当時は、自分たちが最強だと思っていた。

4番の藤井に俺と久木のバッテリーは、甲子園でも圧倒的だったしな。

俺の肘さえ、満足なものなら……最高の結果で終わることが出来たのに。

「そう言えば、久木は元気にしているか？」

俺の問いに藤井は、胸から取り出した煙草を吹かしながら答えた。

「ああ、なんせあの神鳥君を獲得したんだから、今年の夏は頂点を狙いに来るぞ。

センバツは準優勝だったしな」

いつの間にか、神奈川の聖王高校になっちまってるしな。

高校野球の監督をしていることすら知らなかったというのに。

「それで、今や近畿最強の公立校の呼び声高い、開成高校はどうなんだ？」

今年の3月に行われた、春季近畿大会。

夏の予選のシード決めも兼ねた大会だった。

兵庫大会の優勝校として乗り込んだうちは、ベスト4と言う成績を収めた。

……主力を温存した私立相手にだが。

「報明も新井は出してこなかったし、春のシード決めの大会は、強豪にとつてはただの遊びだ」

「それでも……だろ？」

実際、神谷君と山中君のバッテリーは、全国でも屈指だ。

後は層の厚ささえどうにかすれば、甲子園だって夢じゃない」

「そんな、簡単じゃないことは俺たちが一番知ってるだろ？」

現役時代、俺たち館鳳高校のメンバーがそれほど苦勞して、甲子園舞台にたどり着いたか……

あの頃の苦勞を今の教え子たちに、押し付けるのは正直氣が進まない。

「俺は個人的に神谷君は、加持を超える逸材だと思っているが？」

「残念だが、同意見だ」

ほらな、と言って藤井は笑みを浮かべた。

そして

「まあ、今日は野球のことなんか忘れて飲もうぜ」

そう言つて、ビールを頼むのだつた。

この男は、ただ飲みたかっただけつと、言うことに気付いた時には、俺はすでに酒豪のテリトリーに足を踏み入れていたらしい。
今日は、どうやら朝帰りになりそうだ。

S i d e o u t

「ストレート」

「はいよ」

投げたボールが高めに外れた。

山中が立ち上がつてなんとかキャッチ。

「わりい、ちよつと抜けた」

「氣い抜けとるのちやうか？」

山中はそう言つて、ボールを返してきた。

「何やら考え事してるか知らんけど、夏まで時間がないんやぞ」

「分かってるよ」

春の県大会で優勝した開成は当然ちよつとした注目校になっている。
る。

春の甲子園ベスト4の報明を倒しての優勝だったから尚更だった。
新井や主力は甲子園の疲労を考慮して、出場してなかったがな。

「ほれ、開発中の変化球投げてみ。
ストレートとスライダーだけじゃ、夏は勝てんぞ」

「へいへい。
じゃ、行きまーす」

山中がミットを構えるのを確認し、大きく振りかぶった。

Side 関本 陽一

フリーバッティングの待ち時間、俺はずっとブルペンで投球練習
をしている神谷を見ていた。

バッティングゲージでは、先輩が2か所で2人同時に練習してい
る。

「関本さん？」

ずっと、ブルペンの方を見てどうしたんですか？」

同じように順番を待っている、桜井が不思議そうな顔で尋ねてき
た。

その横では、丸川が素振りを繰り返していた。

「いや、改めて神谷の奴は化け物だと思ってな」

「そりゃ、今やプロ注目の2年生投手ですからね」

「それでも、神谷は異常だ。

他の投手とは違う何かを持ってる。

それくらい、桜井だって感じるだろ？」

「僕がいつも後ろで守っていて思うのは恐怖と歓喜だけですよ。
もし、敵だったら絶対に勝てないと言う恐怖と頼もしい味方だと言
う歓喜です」

俺も桜井に同意見だ。

しかし、1つ疑問がある。

今のチームには神谷と同格と呼べる、山中と言う選手がいる。

もし、そのような同格の選手が居なかったら？

神谷は間違いなくチームから孤立する。

あいつの力と才能はそれほどのものだ。

「俺様なら敵になったとしても、打ち返すぜ」

「丸川……盗む聞きとは、見損なったぞ」

「丸川さんは打てるんですか？」

「今の、神谷だったらな」

丸川だって、中学時代は山中ほどとは言わなくてもそこそこの有名

な打者だし、高校に入ってから数段進歩しているが……神谷はそれ上回る速度で成長している。

「癪だが、神谷^{あいつ}はどうも底がしれん。

それに、たまにだが中学の時にまともな指導を受けてたのどうか疑うプレーもするしな」

「いい意味で、めっちゃくちゃに未完成だな」

「でも……神谷君っていつから野球を始めたんでしょうか？中3の最後だけ、居たような印象をうけますよね」

確かに、神谷の名前を知ったのは中3の最後の大会。もう少し早めに知っていてもおかしくないと思うだが……

「神谷の過去か、面白そうだな」

丸川がそう呟いて悪そうな顔をしている。
この顔時はロクなことを思いつかない。

「舞ちゃんに聞くか？」

「俺は興味ないからパス」

「僕も神谷君が話さない以上、知るつもりもないんで」

丸川は1人だけ意見が食い違い、驚いた表情をしている。
貴様は斉藤と話がしたいだけだろうに。

お、ようやく俺のたちの打つ番か。

1 人佇む丸川を置いて、俺と桜井は打席に入った。

第34話 ただの幼馴染だよ

「神谷あゝ、早く終わらせー。」

「ウチが暑さで溶けるぞー」

無視だ、自縛霊がいると思え、そこに人はいない。

「早くうー」

無視だ……無視……

「舞の奴が村上に食べられるぞ」

「うるせえ！ 飛鳥は俺の邪魔をしたいのか！」
おまえ

「最後のが一番声小さいのに反応したな」

ちくしょう、なんか負けた気分だ。

俺と飛鳥は現在2人で教室に放置プレイ。

うちの学校の文化祭は、2・3年は演劇すると決まっている。

俺と飛鳥は、くじでどの役も当たらなかったため、裏方に回りク
ラスの皆が体育館で練習をしている間に劇で使う小道具でも作って
いると言っ訊なんだが……

「お前も少し働け」

「ジャンケンで負けた神谷が悪いんやろお」

ちくしょう、ジャンケンで負けると逆らえる気がしない。
ジャンケンの持つ不思議な魔力ってやつだな。

「そういえば、理系の方はヒロインが舞で主人公は村上でやるらしいで」

「あっそう、興味無いね」

「あの2人付き合つてのかなあ？
どう思います？ 神谷君」

「舞が誰と付き合おうと俺には関係ないだろ」

「それ、本気で言ってるの？」

飛鳥の口調が変わった。
少し怒りを含んだ口調になった。

「どうゆう意味だ？」

「いい加減舞の気持ち、気づいたりいや」

「なんの話だ？」

「舞は神谷のこと」「福島せんぱーい」「っち、なにい？」

廊下側の窓を開け、飛鳥を呼んだ声の主、愛が姿を現した。
何やら今日の練習についての話してみたかった。

愛は最後に、差し入れと言って、自販機に売られている紅茶を置

いていった。

「で、なんだっけ？」

「もうええわ。

ただなあ、神谷あ、今のままやったらそのうち全てを無くすで」

本当に飛鳥は何言っただ？」

「何を意味のわからないこと言っただ？」

「もういい」

そっぽ向く飛鳥をよそに、愛が持ってきた紅茶で喉を潤した。

なんで、俺は飛鳥に怒られるんだろうなあ……

機嫌悪くなるようなことしたかな？

「功、居るー？」

噂のヒロインが現れた。

廊下側のドアを開けて、愛と同じような形で入ってきた。

……やっぱ、姉妹だな。

「居るけど何？」

「今日さ、文化祭の練習で遅くなるから、愛と一緒に先に帰って
て」

「へいへい」

「愛のことよろしくね」

「わかって「神谷く、ウチちょっと席は外すから」いきなり、どうした？」

「大丈夫、すぐ帰ってくるから。
舞もちよっと待っていて」

じゃ、と言って飛鳥は教室を出て行った。
誰も居ない教室と廊下に教室の窓を挟み、俺と舞だけになった。

身体の距離は数メートル。

でも、高2になって俺と舞の距離は、もっと遠いような気がした。

——舞に甘え過ぎてたのかもしれない——
最近そう思うことが多くなった。

周りに馴染めなくて、いつも1人で居た頃に舞に会わなければ今の俺は居ないと思うし、野球もしていなかった。
今になって、自分ことは自分でするべきだと思い始めていた。

「ねえ、何かしゃべってよ」

彼女は、窓際に身を乗り出してそう言った。

「……最近さあ、功とあんまり話してないよね？」

「ん？ ああ、文化祭とか色々忙しいしな」

「そうだね」

また、会話が途切れた。

間に沈黙と言う名の音のない時間が流れる。

その空気を破ったのは、あの男だった。

「さいとー、練習再開したいんだけど？」

そう言って、舞の後ろから村上が現れた。

「ごめん、すぐ行くね」

舞は忙しく教室へと戻って言った。

ただ、村上は俺の方を見て廊下に立っている。

その目の色は明らかに好意を抱いている目ではない。

「君が神谷か？」

「そうだけど？」

「斉藤とは、付き合ってるの？」

「ただの幼馴染だよ」

「そうか」

口数は少なかった。

ただ、その表情からは喜びが見て取れる。

「君はあんないい子が近くに居て何とも思わないのか？」

「そーだな」

「…………俺は、彼女のことが好きだよ。
人当たりも良くて、芯の強い彼女が」

なぜだろう、その時鈍器で殴られたような衝撃が頭を走った。
ドクンと心臓の鼓動が強く打ち付ける。

「あつそう、俺には関係ないね」

「どんな手を使っても彼女は手に入れて見せる。
たとえ、君と彼女の仲を引き裂こうともね」

村上は、そう言い残して去って行った。

誰も居なくなっただけの廊下からは、聞き覚えのある男女の声だけが響いていた。

功と愛はもう帰ったかな？

すっかり周りは、暗いし早く帰ろう。

「斉藤、聞いてる？」

「え？ ごめん聞いてなかった」

軽いため息を1つした後、村上君は再び口を開いた。

「送って行こうか？」

「1人で大丈夫だよ。」

それに、村上君家が反対「送ってくよ」「え……？」

彼の雰囲気威圧された、有無を言わさないつと言っばかりの才
ーラが出ている。

「えーっと……じゃあ、お願いしようかな」

結局、あたしは雰囲気負けした。

・ ・ ・ ・ ・

・
・
誰も居ない夜道を村上君と並んで歩く。
歩き出してから黙るあたしを彼は不思議そうな顔で見ている。

「どーしたの？」

「なんでもないよ」

「俺と居るの面白くない？」

「そんなことないよ」

村上君の問いにあたしがひたすらに答えた。
そんなことを繰り返しているうちに家に着いた。
功の部屋からは、愛と功の声が聞こえる。

「じゃあね、今日は送ってくれてありがとう」

「……待ってくれ」

呼び止められたことに疑問を抱きながら、再び村上君の方を向いた。

「斉藤は、神谷のこと好きなのか？」

「え？ いきなりどうしたの？」

「……まあ、いいや。」

ねえ、俺と付き合わない？」

「え……？」

「ごめんなさい、あたし村上君のことそうゆう風に見れない」

「もうちよつと、真剣に考えてよ。」

「斉藤に興味が無い神谷よりは、マシだと思つよ」

「言い返せなかった。」

「功は、本当にあたしに興味なんて無いように思ってしまったから。」

「出会った時は、功のことをこんなに好きになるなんて思わなかった。臆病なあたしは、功に気持ちを伝えることも聞くことも出来ない。ならいつそ、今のままで……」

「じゃあ、真剣に考えといてね。返事はいつでもいいから」

「ぎこちなく頷くことしか出来なかった。彼が去ったあと、夜空を見上げて呟いた。」

「ねえ、功はあたしのことどう思ってる……？」

S i d e o u t

第35話 そんなこと言わないで

「んあ……あ、気持ちいいよ、こっくに……」

「……」

「ダメダメ、そこはだめえ……」

誤解されてるかもしれないが、断じてやましいことはしていない。

「紛らわしい声出すな」

「だって、耳弱い、ん！」

何故か俺は、現在愛の耳かきをしている。
高1にでもなったら、自分でしてほしい。
つか、俺には結構刺激が強いわけで……

「ほら、終わったぞ」

「ふぁーい」

……いつまで膝枕をさせる気だ？

「早くどけ」

「余韻で動けない」

「……」

「いたっ、急にどかないでよっ」

愛は、どこで道を踏み間違えたんだろうか……
高1にもなつて、最近妙に危ない発言が多い。
悪影響を及ぼしている友達でもいるのか？

「そう言えば、まいねえ遅いね。」

まいねえのことだから夜道も大丈夫だろうけど」

「そりゃ、言えてるな。」

あいつの強さは超越したものがあるからな」

その後も愛と他愛もない会話をしている時だった。
愛が外に舞と村上がいることに気がついた。

「あの人、最近まいねえと仲いい人だよな？
2人で何してるのかな？」

「さあな」

しばらく愛と2人で舞たちを見ていた。
表情は、見てとれるが会話は聞こえない。
何回か言葉を交わした後、舞がぎこちなく頷いた。

……まさか。

「まいねえ、告白OKしたんじゃない？」

だよな、ついに舞に春が来たのか。

「こうにい、どうするの!？」

まいねえが変な男と付き合っちゃよお!！」

慌て過ぎだ。

あと、暴れないでくれ、振り回してる拳がマジで危ない。

「どうも何も、舞の勝手だろ？」

俺たちが首を突っ込むことでもないし」

「でもでも、付き合ってたってことは……その……色々しちゃうんでしょ……?。」

愛の頭の中はどうなっているんだろう。

話がぶっ飛び過ぎだ。

誰も居なくなつた部屋の天井を見つめていた。

暗い部屋は、不気味だけど心は落ち着いた。

1人の時の方が落ち着いているように思えるあたり、心を閉ざしていた頃の名残があるようだ。

ーコンコンー

窓をノックする音が聞こえた。

この部屋の窓をノックできる人物は1人しかいない。

「こんな時間になんだ？」

鍵を外し窓を開けた。

そこには、見慣れた幼馴染の顔があった。

「そっち、行ってもいい？」

話がしたくて」

「このままじゃダメなの？」

「もういい、そっち行く」

相変わらず俺の意見は無視かい。

俺のテリトリーに侵入してきた幼馴染は何故か俺の隣、すなわちベッドに座った。

「何やってんだ？」

「客人を地べたに座らせる気？」

「お前は客人じゃないだろ」

「うるさいっ」

「っ！ 相変わらずのボディブローだな……」

Side 齊藤 舞

あたしの大好きな人は、腹を押さえて深呼吸を繰り返している。
強く殴りすぎたかな？

「大丈夫？」

「まあな。」

「っ」か、彼氏いるのに他の男の部屋入って大丈夫なのか？

はい？ 何言ってるの？

「なんの話？」

「さっき、玄関で村上に告られてOKしたんだろ？」

見られてたのか……しかも誤解してるし。

「保留したの、でも多分断るかな」

「なんで？」

付き合えば？」

功にそう言われて突然悲しくなった。

遠まわしにあたしのことをなんとも思っていないと言われたようで。

いつの間にこんなに好きになってしまったんだろう？

功を独占したい、自分だけを見て欲しい。

年月を重ねるほどにその想いは強くなっていく。

嫌な女だとつくづく思う。

功が他人と関わるのが苦手なことをどこかで喜んでいた。

誰も知らない、功を知っているのは自分だけと少しだけ喜んで
いた。

でも、高校生になって、君はあたしの知らないところでどんどん
成長していく。

いつか君の隣にはあたしじゃない誰かが立ってるのかな？
近くて遠く、そして脆い『幼馴染と言う距離感』

「あと……もう、俺のこと気にかけてくれなくていいよ」

「え……」

下をうつむき彼は言った。

「俺さ、舞に頼り過ぎだなんて思うんだ。

それに「……ないで」舞？」

「そんなこと言わないで！」

立ちあがって、功を見下ろしながら言った。

彼は、依然として下を向いている。

「でも、これ以上舞に負担をかけさせるわけにはいかない。

俺自身がもつとしつかりしないと」

聞きたくない、お願いだからそれ以上言わないで……

「あたしが居なくなったら功が困るよ？」

朝だつて遅刻するかもしれないし、ご飯だつて1人だつたら大変でしょ？

部活で疲れて帰って来た後に全部してたら……」

いつか壊れちゃうよ。

「大丈夫だ。

舞がいなくても俺はもうやっていける。

昔とは違う、野球部の奴らだっている」

功の新しい場所にあたしの場所は無いんだね。

「そつか……そうだよね！」

精一杯明るく、虚勢を張って言った。

「功だつて、もう高2だもんね。

あたしなんか居なくなつて……大丈夫だよね……」

お願い、必要だと言って、傍に居てもいいと言って。

「ああ、大丈夫だ」

あたしの中で何かが壊れた。

この場に居たくない。

「そっか……あたしもう寝るね、おやすみ……」

功に別れを告げてあたしは部屋に帰った。
何かが壊れたまま……

S
i
d
e

o
u
t

第36話 ダメです！

文化祭が終わり、梅雨が明けた。

高校生活二度目の夏、それは俺にとって野球部として迎える初めての夏。

長い甲子園への道のりの始まりだ。

「ちょっと、神谷君動かないで」

俺の右腕のアイシングをしている北川は、そう言って俺を注意した。

「すみません」

「初戦コールド勝ちだからって、ちゃんとケアしないとダメでしょ？
神谷君の右腕に開成うちの開成の甲子園かかってるんだから」

「以後気をつけます」

「……ちゃんと聞きなさい」

やべえ、北川の後ろに般若のようなものが見える……体中汗でびっしょりだ、

「はい、終わり！

明日の投球練習は控えること、分かった？」

「軽くならいいだろ？」

「ダメです！」

ぐう……目を盗んでしてやる。

「どうせ練習は私が付きつきりなんだから無理だよ」

大会の1週間前くらいに北川は、加持先生に俺の目付役を頼まれた。

なんでも、肝心のエースが無理のし過ぎで故障したらこまるとか。おかげで何の不安も無く大会には望めたが……

「もっと、投げこまないとこの先不安だつて」

投げ込み不足は否めない。

勝ち進む連投になれば、肩を酷使するから練習からの無駄の消耗を避けるつてのは理解できるんだけどな。

「男だつたらつべこべ言わない。

ほら、行くよ。

皆バスで待つてるし」

「へーい」

北川は、荷物を持って元気よく立ちあがった。

この夏、俺はどうしても北川を神鳥と再会させてやりたかった。

甲子園に出場できればそれが叶うと思っていた。

神鳥の居る聖王高校は、春のセンバツで準優勝したし、激戦区の神奈川とは言え春夏の連続出場は揺るがないだろう。

問題あるとしたら開成うちの方だな。

.....
「で、今日の反省は？」

「あー、初回、先頭に四球ファボールだったとか？」

「正解や」

バスの中で隣に座る、山中と今日の試合の反省会。
歩きで帰る時は、近くの店、バスを使つての遠征の時帰りのバス
の中。

その日のうちに振り替えるつてのは、どちらでも変わらない。

「初戦やから緊張したんは分かるが、力りきみ過ぎや。
結果は文句なしやけどな」

今日の試合結果は、12対0で開成の5回コールド勝ち。

俺は、5回を投げて被安打1の無失点。
フォアボール
四球は3つほどだしたがな。

「まあ、これからだって」

「足元すくわれるのだけは勘弁やで」

「分かってるって」

反省会を終えて俺は、帽子を深くかぶり直した。
耳に愛用のウォークマンにつないだイヤホンをつけて、重い目蓋を閉じた。

Side 山中 淳

「山中君、これ昨日のスコアブックと頼まれてた次の対戦相手のデータ」

「すまん」

北川からスコアブックと一冊のノートを受け取った。
データ集と書かれたノートには対戦校の特徴や選手のことまで細かく書いてある。

「油断は禁物だけど、今のウチの力なら問題ないと思うよ」

「せやな」

このノートのデータをもとにワイは、いつも配球の組み立てを考
える。

神谷は、感覚で野球するタイプやからなあ……このノートを見せ
ても覚えへんしな。

ワイがデータを頭に叩き込むしかないんやけど……

「もうちょい、キャッチャーの苦勞を理解してほしいわ」

「頑張れ少年！」

「ん？ どこ行くんや？」

「エースの栄養管理」

「はいはい、行ってらっしゃい」

そっぴや、もう昼飯か。
ワイも何か食べるかな。

S i d e o u t

「丸川は、今日何食べんの？」

「俺様は、うどんだな」

昼休み、俺は丸川と2人で食堂に来ていた。

「ふーん、じゃあ俺はかつ丼でも食べるか」

「北川に野菜食えって、言われたんじゃなかったのか？」

「大丈夫だろ、ばれなきゃ「何が大丈夫だって？」……」

後ろを振り向かな、今振り向いたら取り返しのつかないことになるぞ。

「その右手に持った、カツ丼との引換券を渡しなさい」

「はい……」

俺のカツ丼が……

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・
「バランス良く食べないとダメって言ってるでしょ？」

俺は、昼飯を食べながら北川に説教をくらってる。

隣には美味しそうにうどんを食べる丸川、そして、美味しそうに食べているのもう1人。

「神谷あ、カツ丼御馳走さん。
今度なんかおごったるわ」

俺の買ったカツ丼をたいらげた飛鳥。

北川は弁当持参につき、俺のカツ丼は飛鳥の胃袋へ。
食べたかったカツ丼……

「飛鳥の口約束は期待しないでおくよ」

「うっさいわ。」

人の善意は黙って受け取れ」

「はいはい」

「で、私の話は聞いてた？」

「も、もちろん、これからは気をつけます」

舞に弁当を用意してもらわなくなって、俺の食事バランスは偏った……らしい。

せめて、学校でとる昼飯くらいはバランスよく食べろとの加持先

生のお言葉。

「舞ちゃんが弁当作ってくれてた方が楽だったのに」

北川がため息交じりに言った。

「まあ、舞の奴も自分のことで忙しいからな」

自分から舞の援助を断ったことは誰にも言っていない。

「……神谷あ、次の数学当たるけどウチのノート写さんでいいの?」

「マジか!？」

丸川、わりいけど俺先教室行くわ」

「そのノート後で俺様にも見せるよ」

「分かってる」

Side 福島 飛鳥

「ほい、ノート」

「サンキュ」

ホンマ、神谷のノートを写す速度は天下一品やな。
右手つかれへんのかな？

「神谷、最近舞と話してる？」

「ん？ 最近はあるまじだな。

野球中心に今は特に生活動いてるし」

最近……ね、舞がウチに泣きながら電話かけてきたのは一か月前
なんですけど？

「舞とケンカでもしたん？」

「別に何もねーよ。

それに幼馴染ってだけで全部把握してるわけじゃないし」

それは神谷が分かってうとしないからやろ。

舞は、諦めるって言ってたけど結局村上と付き合ってたのかな？

一緒に居るのはよく見かけれるけど、噂は何も耳にしいひんな。

「飛鳥？ どうかしたか？」

「なあ、神谷って舞のことどう思ってるの？」

「いきなりなんだよ？」

「いいから、答えて」

「どうって、言われてもなあ。

ただの幼馴染だろ？」

向こうだってそう思ってるって」

なるほど、舞が諦めるって言ってた意味が分かったわ。

「神谷……舞に身の回りの世話を断った？」

「んー、まあな」

やっぱりな、それで舞は自分なんて必要ないって言ってたんか。

「もし、舞が他の男と付き合っても、お前は何も思わんの？」

「俺が口出すことじゃないだろ」

やるなあ。

「ただ……いい気はしないのは確かだ」

……それを舞に言っただれよ。

Side out

「つーか、邪魔すんな。

俺は今写すのに必死なんだよ」

たく、ホント飛鳥は邪魔ばっかしやがる。

舞が他の男と付き合ったらか……そんなのいくらでもあり得るだろ。

でも、深く考えてたこと無かったな。

隣に居るがいつの間に当然になってしまったのかもしれない。

俺にみたいなどうしようもない奴には、勿体無いのに。

「今の発言、舞に言っただれよ」

「はあ!？」

嫌だね、舞が好きなのと付き合っただから、俺が邪魔してどうすんだよ」

「ヘタレ」

ほっとけ。

「座れー、授業始めるぞー」

先生来ちゃったじゃねえか！

まだ、半分も写してねえのに！

ちくしょう、飛鳥のやろっ……覚えてろよ。

第37話 再会は波乱と共に

「ショート！」

「ぐっ！」

センターに抜けようかと言う痛烈な当たりを関本がダイビングキヤッチ。

セカンドにトスでボールを渡し、試合終了。

ツアアウト満塁のピンチを脱し、3対0で逃げ切りベスト16入りを決めた。

「ひやひやさせんや」

「勝ったんだからいいだろ」

まったく、山中は心配性なんだから。

中学時代はあんまし、あれこれ言われなかったのになあ。

俺がド素人って言うのもあったんだが。

「なあ、中学の時はどんなキャッチャーと組んでたん？」

山中が帰りのバスで聞いて来た。

「そーだな、山中と違って細かいことは気にしない奴とだな。ただし……」

「ただし？」

「俺はどうもそいつの野球観が好きになれなかった」

俺に細かいことを言ってこなかったのは、俺を嫌ってからかな？
でも、俺があいつのことあんまり好きじゃないからな。

「仲悪かったんか？」

「さあ？ 学校も違っつかたし、面と向かって話したことはあんまり無かったな」

「そいつの名前は？」

「いちのせ ばると一ノ瀬 春斗」

S i d e 藤井 高志

「とんでもないのが現れたな」

「藤井さん、彼は一体何者ですか？」

県予選の4回戦、シード校である、神戸西が敗れた。
春の県大会でもベスト8に入るほど強豪だ。
それを破ったのは1人の2年生投手。

「津佐高校の2年生、一ノ瀬か……あんな投手どこにも居なかったはず……今年の夏から投手に転向か？」

「調べときます」

相変わらず飯村が仕事が早いなあ。
俺も少しは見習わないと。

しかし……神戸西のエースの負傷退場はアクシデントか、それとも……

Side out

Side 山中 淳

「神戸西が負けたあ!？」

「うん、スコアは2対1で津佐高校の2番手の投手が好投したって練習の休憩中に北川はそう言って、再抽選が終わったトーナメント表を渡してくれた。」

どこやねん、津佐高校って……

しかも、神戸西のエースはプロ注目の投手のはず。
春の県大会で唯一、神谷と互角の投手戦を演じた好投手やったの
に。

「エースの人は打たれたんか？」

「ううん、3回に負傷退場で試合にはほとんど投げたてない」

「運が無かったんか……ところで津佐の2番手投手の名前は？」

「一ノ瀬って2年生。」

試合のスタートはキャッチャーで、接戦になった試合は全部リリースで投げてるみたい」

「北川……それってホントか？」

近くで黙って話を聞いていた神谷が声をあげた。

S i d e o u t

「うん、間違いないよ。」

知り合い？」

「まあ、少しな」

エースを負傷退場させたのか。
相変わらず勝つためには手段を選ばない奴だな。

「神谷あ、昔の仲間との再会に浸るのはええけど。
津佐と当たるのは準々決勝やぞ、次の試合に集中せえよ」

「わーってるよ。
ちよっと、聞いただけ」

「なら、投球練習再開すんで。
水分は補給したか？」

「バッチリ」

にしても、ホント暑いなあ。
こりゃ、明後日の試合も猛暑日だな。

「ボール！ ファボール！」

この試合5個目の四球。

タイムをとって、山中がマウンドまで来た。

「一昨日まで晴れてたのに、なんで今日に限って雨が降るんだ？」

「一時的な雨や、それよりも次が4番やで、しっかり低めに集めんと火傷するで」

ベスト8入りを目指す試合は、現在2対1で開成こうちが勝ってる。相手の8回の攻撃時に天気が崩れた。

連続フォアボールでツーアウト・二塁。

長打が出れば逆転という場面で、先ほどの打席で長打を打たれた4番を迎えた。

「スライダーはまだ打たれて無いだろ？」

「暴投だけは勘弁せえよ」

「任しとけ」

審判の合図で山中のサインに頷く。

ストリート2球で相手の4番を追い込んだ。

山中の出したスライダーのサインに小さく頷いた。

これで決めると言わんばかりに山中は軽く一回ミットを叩いてから、ミットを構えた。

一塁ランナーに目で牽制を送り、セットポジションから足をあげた。

「はぁー、疲れた」

勝った後の取材は、疲れる。
柄じゃないだけに余計にだ。

「神谷君！ お疲れ様」

北川か、待っててくれたのか。

「神谷あゝ、トイレ行こうや」

山中よ待っててくれたのはありがたいが、先に何か飲ませてくれ

……

「待てって、先に何か飲み物……北川、ちょっと取って来てくれない？」

「え？」

そこに自販機あるよ？」

「頼む」

「分かった、待っててね」

Side 山中 淳

神谷の奴は何考えてんねん。
北川をパシリに使って……

「よう、久しぶりだな」

っ？

神谷は誰に向かって言ってるんや？

「春斗」

「やあ、会えて死ぬほど嬉しいよ」

春斗って、まさかこいつが一ノ瀬か！？

身長は、170くらいでそんな高くない……けどなんや、この何とも言えない圧迫感ほ。

「僕が偵察に来てたのは予想したのかい？」

「ああ、お前は昔から偵察は手を抜かないからな。
それに、前の試合エースの人に何しやがった？」

険悪なムードだな。

ホンマに元チームメートか？

「ハハハ！

相変わらず、まじめ過ぎて困るよ、功は」

こいつ……まさか。

「中3の時だって、僕の言うとおりにしとけば神鳥 哲也は、壊れ

たままだっ たのに」

「……ダメだ。」

どうも、お前とは考え方が合わないみたいだな」

「まあいい。」

今の功は、僕の敵じゃないよ。

そこに居るキャッチャーでは、功の力は3割減ってとこだからね」

言ってくれるやんけ。

黙って聞くほどワイは、大人しくないで。

「待てや。」

考え方が合わないキャッチャーよりも、ワイが神谷と相性が悪いとでも言う気か？

一ノ瀬、お前よりも少なくともワイは「そうだね、全然ダメだ」っ
「！」

「山中だったな、君は功の本質を理解していなさ」

「本質やと？」

「そうだ。」

まあ、昔と雰囲気も違うし分からなくても仕方ないと思うけどね。
じゃあ……僕はこれで……功、準々決勝で会おう」

右腕をあげ、一ノ瀬 春斗は去って行った。

「神谷あ、あいつの言ってた本質って何のことや？」

「……さあな。
俺に聞くなよ」

本質を理解していないつか……それに、神鳥が壊れたままやった
つて。

まさか、あの事故は……

「神谷君、頼まれてた物……あれ？
2人してどうしたの？」

北川か、場を外してたのは幸いやったな。

S i d e o u t

「なんでもないよ。
飲み物ありがとう」

「え？ うん」

あの夏の事故は、本当に春斗が仕組んだろうか？
そう、信じたくはない。

でも、確かめる勇氣もない。

ただ、俺に出来るのは、今度こそ春斗を止めることだけだ。

第38話 神谷 功です

Side 山中 淳

「山中君、話つてなあに？」

補習が終わり練習までの時間にワイは、斉藤を呼び出した。

「一ノ瀬 春斗って、知つとる？
そいつが次の相手なんや」

「一ノ瀬君か……知ってるよ。
あたしが、彼に功を野球始めるように頼んだし」

「あの二人の間には、何があつたんや？」

「何も無いよ。
むしろ問題あつたのは、功の方」

どうゆうことや？
さっぱり意味が分からん。
神谷に問題があるやと？

Side out

Side 斉藤 舞

山中君はさっぱりって感じの顔をしてる。
仕方ないよね、誰も分からなくて。

功が中学で野球を始めるまで、内向的だったことなんて。

「功の過去知りたい？」

あたしは、何を言ってるんだろっ……あたしだけが知ってる功で置いておくつもりだったのに。

……違うかな、誰かに聞いて欲しいんだ、あたしが功のことをどれだけ知ってるか。

自慢したいだけなんだ……

「ああ、教えてくれ」

少しだけあたしの自慢に付き合ってね。

「あたしと功が出会ったのは……」

「まいー！」

ちよつと、来なさい」

小3の5月。

部屋で宿題をしていたあたしは、母の声を聞いて玄関へと向かった。

「なあーに？」

「新しく隣に引っ越してきた、神谷さんよ」

「どうも、神谷です」

キレイな人だ、それが功の母に対する最初の印象だった。

「ほら、功。

あいさつしなさい、あなたと同年だって」

「……どうも」

そのキレイな女性の息子は、下を向いてそう言った。

暗い奴だ、あたしとは絶対に合わないタイプ、それがその男の子の最初の印象だ。

「あたし、舞。

よろしくね！」

同い年の男の子と言うことで、期待を込めて手をだした。もちろん、握手するつもりで。

「……」

相手の男の子は、無言で去って行った。

……何なのあいつ！

「ごめんなさい、あの子、少し人付き合いが苦手で」

神谷君の家は、親の転勤が多いせいで転校も多く友達が出来にくいらしい。

仲良くしてやっつと、おばさんに頼まれたけど正直あたしって暗い奴嫌いなんだよね。

やっぱり、男の子って頼りがいがあって遅しくないと！

「神谷 功です……」

次の日の学校。

転校生の神谷君は、あたしと同じクラスになった。
名前を名乗っただけの自己紹介に周りは少し騒がしい。

「じゃあ、神谷君は斉藤さんの隣の席使って」

あたしの隣！？

なんでまた、こんな暗い奴……

「……」

また、無言……昨日会ったんだから何かしゃべりなさいよね！
イライラする、教科書も出さずに窓際の席だからって、外ばっかり見て。

「神谷君、教科書は？」

思い切って聞いてみた。

「……」

一瞬こっちを向いたけど、すぐにまた外を眺め始めた。
何こいつ？ ケンカ売ってんの？
イライラを押さえて一時間目の授業を受けた。

休み時間、転校生恒例の質問攻めが始まった。
皆色々、質問しているけど神谷君は何も答えず教室を出て行った。

皆驚いている、一部の女の子はかっこいいと言ってるけど、何
考えてんだが……

次の日から神谷君は、ウォークマンで音楽を聞く毎日。
校則違反だけどあまりに堂々としていて皆何も言わない。
いつも1人で居る彼を周りは自然と避けて行った。

学年が上がるにつれて、学校に来る回数が減少していった。
6年にもなれば来てる方が少ないかもしれない。
あたしの部屋から見える、彼の部屋にはいつもカーテンがしてあった。

暗いところが嫌いだけど、何も知らないことも事実だった。

だから、先生にたまっていたプリントを渡すように頼まれた時、
いつもはポストに入れておくだけなのに興味本位でインターホンを
押してみた。

「……無反応かい」

ドアにも鍵がかかってんだろうな……開いてるし。

「おじゃまして……神谷君いるー？」

誰も居ないリビングは、不気味な雰囲気醸し出している。

「ちょっと……不気味すぎ」なに？」「うわぁ！」

行き成り出てこないでよ！

2階に居るなら返事なさいよ！

「そんなに驚く？」

「もっと、存在感を出しなさい！」

あれ？ 神谷君普通に話してるじゃん。

「これ、頼まれたプリント。」

学校来いって先生怒ってたよ」

「どうも……」

相変わらずの無表情で彼は、プリントを受け取る。

「ねえ、いつも家で1人なの？」

「まあね……昔から、だから慣れてる」

妙な親近感がわいた。

あたしの家もパパがすでに他界していて、ママが仕事で遅いから
愛と2人きりってことが多い。

神谷君も親が居ないこと多いんだ。

「今度、遊びに来てもいい？」

「勝手にしなよ」

これって、OKってことだね？

今日ドッキリやられた仕返しに、今度隣接してる窓から入ってみようかな。

「さいとー、今度皆で野球するんだけど来ない？」

クラスの男の子に誘われた。

あたしは、割と運動神経が良い方だし身体を動かすのは、好きだからよく参加してる

昔からやってる空手のお陰ってこともあるけど。

「いいよ、今回も参加で」

「これで8人だな……斉藤あと1人誰か連れて来てくれない？
妹でもいいからさ」

「……いいよ。」

男の子連れてく

「は？ クラスの男子はほとんど当たったはずだぞ？」

「任しといて」

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
「神谷君」

「っ!!」

面白いなあ、窓から入った時の驚くリアクションがたまらない。

「斉藤、毎度驚かさないでくれ」

そう言いながら、窓の鍵はいつも開けてくれるね。

「明日暇でしょ？」

ちよっと、付き合って」

「……却下だ」

何言っても、断るのは織り込み済み。

力づくで連れていくのが神谷君を連れだす唯一の方法。

「黙ってついて来て!」

「めっちゃくちゃな……」

君は、内向的で人と関わらないけどホントは優しく、良い人。
あたしと話してるときぐらいの感じで話せばいいのに。

あたしはこの時、この誘いが彼の人生を大きく左右するなんて知るよしもなかった。

第39話 甲子園（前書き）

前回に続き、舞視点でスタートです。

第39話 甲子園

「神谷君、端っこに居ないでこっち来なよ」

ベンチの隅の方に1人座る、彼に話しかけた。

「なんで、俺がピッチャーしなきゃいけないんだ？」

「投げるだけだから、気楽でしょ？」

キャッチャーは、あたしだから楽に投げなつて」

どんなボール投げるんだろ？

スポーツしてるとこ見たことないし、楽しみだな。

・ ・ ・ ・ ・
「ねえ、あいつ何者なの？」

打席に入った、相手バッターがそう聞いて来た。
名前は、確か一ノ瀬君。

このあたりじゃ有名な野球少年。

「ただの同級生だよ」

「小学生の投げるボールじゃないっしょ」

一ノ瀬君が驚くのも無理はない。

神谷君の投げるボールが、ここまで速いなんてだれも予想してなかったはずだし。

ヒットどころか、ボールが前に飛ばない。

試合は、結局神谷君の活躍で、圧勝に終わった。

「ねえ、中学行ったら野球しなよ」

帰り道、2人乗りした自転車の後ろで、彼の身体につかまりながら言ってみた。

「めんどくさい。」

あと、重心ずれるから動くな」

「こんな感じ？」

「っ！！」

冗談半分に身体を揺らしたら、急ブレーキをかけられた。

「……歩いて帰るぞ」

神谷君は、相変わらずの無表情でそう言った。

途中で「疲れた」とわがままを言って、河川敷で休憩した。

神谷君は、何も言わずに川を見ている。

あたしは、座りながら彼の後姿を見ていた。

「野球やりなよ」

「しつげな。」

第一、お前は俺に野球をやらして何が目的だ？」

「甲子園」

それは、今は亡き父が高校時代目指していた場所。

女の子では、立つことに出来ない場所。

そして、限られた一握りの球児だけがたどり着ける場所。

神谷君ならもしかしたら……今日のピッチングを見てそう思った。

「甲子園で投げる神谷君、見てみたい」

「……どうして、俺にそこまで関わるんだ？」

振り向いて、彼はそう問う。

「なんでだろうね？」

「物好きなやつだ……」

その時、あたしは、初めて彼の笑みを見た。

中学に進級してからは、彼とはクラスも違うし忙しさで話す機会も減っていった。

学校には、一応来ていた。

でも、たまに彼の姿を見かけてもいつも1人だった。

「斉藤さん！ 僕と付き合って下さい」

「ごめんね、あたし誰とも付き合っ気ないんだ」

中学になって、告白されることが多くなった。

何これ？ モテ期ってやつ？

付き合うなら、あたしが甘えることのできる男の子がいいなあ。

空手をしてるせいか、男子相手でもケンカは負けない。

この前も学年で偉そうにしてる、男がしつこく絡んできたので実力行使したばかり。

パパが居なくなつて、愛を守りたくて始めた空手……今では、強くなりすぎたと思う。

実は、誰かに守ってもらつ状況なんか懂れてたり……まあ、あり得ないんだけどね。

「あれ？ 神谷君今帰り？」

生徒が誰も居なくなつた、下駄箱で彼に会つた。

「……ん？」

なんだ、お前か」

入学して、10か月振りの会話だった。

「なんだとは何よ。」

せつかくだし一緒に帰る」

「勝手にしろ……」

彼は、下靴に履き替えて出て行った。
急いで上靴を履き替えて彼の後を追った。

「いつもこの時間に帰ってるの？」

「……まあな」

「そう言えば、2組の上原さんに告白されたんだって？」

同級生の中でも異彩を放つ、神谷君に惹かれる女子は多い。
顔は、結構カッコいいしね。

「情報のお早いことで」

「なんで、断ったの？」

「別になんだって「お前が、斉藤 舞か？」ん？」

変な男2人に絡まれた。

こんな明らかに悪そうな男の子との知り合いは、居ないんだけど
な。

「あたしがそうだけど何か？」

「うちの狩野を可愛がってくれたらいいじゃねえか」

狩野……？

ああ、あたしが実力行使を使ったあの男か。

「女の方で生意気なんだよ！」

女だからって、なめないでくれる？

「おい、斉藤。」

どうする気だ？」

「神谷君は、見とくだけでいいよ」

あたしが負けるわけないし。

・ ・ ・ ・ ・

「噂は、本当だったのか……」

驚く神谷君の目の前には、あたしが倒した不良×2。

「ザコも片付いたしかえろ」

「お、おう」

神谷君が少し引いてるのは、気のせいかな？

第39話 甲子園（後書き）

8月中旬に完結させます。

第40話 やるよ

「舞ちゃん、狩野君の仲間殴り飛ばしたってホント？」

昼休み、同じ班の子に聞かれた。

「うん、ホントだよ」

「なんでも、仲間を集めてるって噂だよ。
気をつけてね」

「大丈夫、大丈夫。
余裕だって」

数を集めなきゃ、何も出来ない男に負けるわけなんて無いし。

「ん？ あれは……」

廊下から神谷君の様子を覗いた時だった。

彼は、珍しく誰かとしゃべっていた。

……狩野君じゃん。

「なに話してんだろ？」

何やら、険悪なムードって言うか、狩野君が一方的に熱くなってる気がする。

あたしがしばらく眺めていると、狩野君が何やら吐き捨てて去っていった。

「狩野君と何話してたの？」

1人になって、再びウォークマンを聞こうとした神谷君に聞いた。

「別にたいしたことじゃねーよ」

「あ！」

これ売り切れてたカレーパン！」

食べたかったんだよね。

「やるよ」

「ホント!？」

食べたかった、カレーパンを貰い機嫌よく自分の教室へと帰った。
あ……何話してたか聞くの忘れてた、まあ、いつか。

Side 神谷 功

さて、どうしたもんか。

狩野の奴が、斉藤への反撃を仲間を集めて目論んでいることを伝えるべきか、どうか……

「俺には、関係ないつか……」

本来なら伝えるべきことを自分は、関係無いと言い聞かせ逃げ込む自分が嫌になる。

親の転勤が多いから、昔から転校を繰り返してきた。

いつからだろう……他人と関わることを避けて1人で居るようになったのは。

他人との距離感が分からないけどそれでいいと思ってた。

斉藤に誘われて、皆で野球をするまでは……あんな風に皆で何かするなんて今までの俺の人生では、無かったことだ。

残念ながら、楽しいと思ってしまった、また野球がしたいと思ってしまった。

そんなことを放課後になるまで、外を眺めながら考えていた。

「帰るか」

いつもより、少し早い帰途についた。

S i d e o u t

「ん……？」

あたしが、目を覚ますとそこはうす暗い倉庫のような場所。
後頭部が痛い、ずいぶんと手荒な方法で連れてこられたもんだ。

「目が覚めたか？」

倉庫に響く、低い男の声。

顔をあげるとそこには、数十人の男と1人だけ体格が大きい男。
その体格の大きい男がリーダーかな？

「あたし1人つぶすのに人数多くない？」

「クック、中学生の小娘のくせに肝が据わっているじゃないか」

「どーでもいいんだけどさ、あたしの手足縛らなくてもいいの？
後悔するよ」

「大丈夫だよ、お前は今から俺と一対一^{サン}で勝負してもらっからな」

そう言つて、リーダーの男は、前に出てきた。

体格差は明らかだったけど、スピードならあたしの方が上だと思
うし問題ない。

「最初は、小娘から来な。

一応、女なんだしな」

「じゃ、遠慮なく」

後悔してもしらないからね！

Side 神谷 功

部屋から見える、斉藤の部屋の電気は以前暗いまま。
まさかとは、思っただけだな。

「斉藤なら、大丈夫だと思うだが……ん？」

耳に響くインターホンの音。

誰だろう？

「お前は……」

ドアを開けてそこに居たのは、斉藤の妹の愛。

「どうかした？」

「……」

無言って、しかもこの子泣いてね？

「まいねえが……」

「斉藤の奴がどうかしたのか？」

「知らない男子に連れて行かれちゃった……」

っ！

マジか、不意打ちとかせこくないか？
いや、ケンカならなんでもありか。

「愛ちゃん、場所分かる？」

「うん……」

「……あそこか、俺が連れて帰るから、俺の家で良い子にして待
ってて」

一言俺が言っておけば、こんなことにはならなかったかも知れな
いのに。

責任と後悔を胸に家を飛び出した。

S i d e o u t

「はあ……はあ……」

「どうした、もう終わりか？」

この男、こんなに強いなんて……足を痛めてからもなんとか避け
ていたけど、もう限界……

どうしょ、助けなんて来ない、この圧倒的不利な状況をどう切り

抜ければ……

「動きが鈍いぜ！」

「うっ！」

男の拳が腹にめり込んだ。

一瞬宙に浮くほど衝撃、その場にうずくまり肺に酸素を送った。

「所詮は女か、この程度とはな」

「はぁ……はぁ……なめないでよ……」

絞り出した精一杯の言葉。

「クツク、この状況でよくそんなことが言えるな。それに、よく見るとお前可愛いじゃねえか」

男は、あたしを起き上がらせると腕を片手で押さえて壁に押し付けた。

「いたっ、ちょっと、離し、ん！」

空いていた、もう一方の手で口を押さえられた。

「この人数で、まわしたら何時間かかるかな？」

言葉の意味は、分からなかったけど男の眼は興奮していることだけは分かった。

今、あたしが直面している危機もなんとなく想像できた。

「んー！」

「動くんじゃねえ!!」

怖い……逃げ出したいのに身体が動かないよ……いや、誰か……誰か助けて。

心の中で誰かの助けを求める。

誰も来ないって、分かっているけど……でも、そうでもないとなたしの心は恐怖に飲み込まれそうだった。

「その子を離せよ！」

「ぐっ！」

鈍い音と共に男が吹き飛んだ。

誰なんだろう？

拘束から解放された、あたしは、涙がたまっていた眼をこすり目を開けた。

「神谷……君？」

「ギリギリ、間に合ったみたいだな」

どうして？

彼がここにいるの？

でも、そんなことより。

「なんで来たの!？」

この人数だよ！
早く逃げて！」

「分かってらあ！
だから、お前が立つの待ってんだろ！
早く立て！」

「足痛めてるから立てないの！
だから、神谷君だけでも「マジかあ」「え？」

あたしが今この状況で逃げられないことを知っても、彼の反応は軽いものだった。

「だったら、しょうがねえな」

「なにしてるの！？
逃げて！」

おたしのせいでこうなったの。
だから、君は巻き込まれないで。

「そんなボロボロのお前を置いて行けるわけねえだろ」

やば、こんな時なのに心臓の鼓動が速い。
神谷君ってこんな、頼れるやつだったけ？
だって、いつもは……

「なんとかすつから、任しとけ」

そこから数十分、あたしの眼には彼しか映らなかった。

「重くない……？」

「多分、大丈夫」

「そこは、嘘でも軽いつて言いなさいっ」

あたしをおぶってくれてる彼の頬を突いた。

「っ！

降ろすぞ」

青紫に内出血してる場所だったみたい。

「ごめん、ごめん。

でもさ、なんで助けに来てくれたの？」

「さあ？

勢いってやつかな？」

「それでも、ありがと」

彼につかまってる腕に少し力を込めた。

その背中が、温かくて安心できる場所だ。

あたしの心臓の音伝わってるかな？

すごい、ドキドキしてるから結構恥ずかしんだけど……

「ねえ、幼馴染なんだし下の名前で呼んでいい？」

「なんでだよ。」

今まで通りでいいじゃねーか」

「いいでしょ、これから功って呼ぶから、あたしのことも舞でいいよ」

「気が向いたらな」

「いいから呼びなさい」

「ぐ……首を絞めるな」

少し苦しそうにもがく、姿も可愛い。
功の背に乗ったまま家へと帰った。

S i d e 神谷 功

「こんな所に何しに来たんだよ？」

「いいから早く」

舞に連れられ隣町まで来た。

このあたりは、近隣の市の中でも野球が盛んな地域だけど……

「一ノ瀬君、連れて来たよ」

「御苦労さま」

一ノ瀬……？

確か一回野球した時いたな。

「君があ那时的ピッチャーか」

「そーだけど、なんだよ？」

「僕の友達の知り合いである、斉藤さんから君に野球を教えて欲しいと頼まれてね」

水面下でそんな話が進んでいたのか。

「功は、運動神経いんだから何か運動しなって友達も出来るかもしれないし」

「断つても無意味っぽいな……」

「商談成立だね、よろしく神谷」

そう言われて、差し出された手を握り返した。

これが一ノ瀬との出会いであり、神鳥とも出会っキツカケとなった。

団体スポーツを本格的にするのも初めてで、仲間と呼べる存在が出来るのも初めてだった。

この時の俺は、ただ楽しみだった。

4年後、一ノ瀬と同じグラウンドで敵同士で会うことになるなんて思いもせずに。

第41話 決戦前夜（前書き）

功視点に戻ります。

第41話 決戦前夜

Side 齊藤 舞

「あたしが知ってるのはここまで。

功がチームに入った後に一ノ瀬君と何があったかは、知らない」

洗いざらい話して気持ちが楽になった。

別にやましいことを隠してわけじゃないんだけど。

「繊細だけど何処か猛々しい、そして、傷つきやすく脆い……それが、功なの」

「けど、あいつはそんな態度は一度も見せへんかったぞ?」

「決して、周りに自分の心の内を見せようとは思はないもん。いつもバカみたいのため込んで、いつか壊れる……」

神鳥君の事故の時も何も口には出さず、再び自分の殻に閉じこもってしまった。

出会った時の功のように暗く、無反応になった。

立ち直らせるのには、苦労したなあ。

「齊藤は、そこまで神谷のことを……」

「いいの、あたしの気持ちは功には届かなかったみたいだし。陰ながら、甲子園に行けるよう、応援させて頂きます」

それが今のあたしに出来る精一杯だと思うから。

Side out

Side 山中 淳

陰ながら応援するやと？

なら、なんでそんな悲しそうに笑うんや？

「神谷をホンマに諦めれるんか？」

「……出来るよ」

「嘘やな、知ってること全部話したのも神谷を諦められないからやる？」

「じゃあ……どうしろって言うの！」

彼女は、泣いていた。

「今の功の居場所に、あたしの場所は無いの！
ひとりよがりの気持ちを押しつけて、どうしろっての！？」

「打席にも立ってないのに、そんなこと言うなや。
しっかり勝負に出てから、諦めろや」

ワイの近くには、無理と分かっているでも頑張ってる奴もいるんやで。

「じゃあ、ワイは練習あるから。」

神谷と一回ゆっくり話しろよ、ほな」

S i d e o u t

「ねえ……ねえってば！」

「ん？ なに？」

「何じゃなくて、さっきから呼んでるんですけど？」

北川は、ご立腹のようだ。

昔の感傷に浸っていた俺は、現実に取り戻された。

「わりい、聞いてなかった」

一度、俺の目を睨むように見つめ彼女は口を開いた。

「今日、山中君なんか様子おかしくなかった？」

「少し静かだったけど、大丈夫だろ。」

「明日はちゃんとやってくれるだろ」

部活が終わったらずくに帰るし、今日は機嫌が悪いかどうかは知らんがな。

関本たちもすぐに帰っちまうから、北川と二人きりなんだよなあ。

「そうだね。」

でもさあ、明日勝ったらベスト4だもんね。

とうとう、甲子園も射程圏内だね！」

「そーだな」

「どうした、少年？」

「嬉しくないのか、ん？」

挑発的な視線かつ、嬉しそうな顔で彼女は聞いて来た。

「逆に聞くけど、北川は嬉しいか？」

「当たり前じゃん。」

でもね、それ以上に神谷君がマウンドで投げる姿が好きなの」

これは、思わぬカミングアウトになったな。

「だから、先輩たちのためにも少しでも長い夏にしようね」

「そーだな」

「反応鈍いなあ。」

勝つ気あるの!？」

「あるよ、満々だ」

Side 北川 沙希

その声は、ハッキリとした意思を示していた。

瞳は、目の前に居る私じゃなくて、別の何かを捉えている。

君の瞳にいつも私が映らないことは、知ってるんだけどね。

暇な時ですら私のことは頭の片隅に無いことは知ってるんだよ。
君がホントは、誰のことを想っているのかも分かっている。

きつと、私がどれだけ頑張っても君の想う人には追いつかない。

私なんかには優しくしないで、その人に気持ちを打ち明ければいい
のに……でも、ごめんね。

君の隣は、居心地がいいから……その優しさに甘えてしまう。
ずるいよね、だから……私は……

「じゃあ、明日も快勝だね」

「まーな」

彼は、そう言って笑った。

Side out

「じゃあ、私こっちだから」

「おう、じゃあまた明日」

「うん、あ、そうだ」

何かを思いだした彼女は、俺の首をつかみ身長差をなくすと、耳元でそつと呟いた。

「自分の気持ちに正直になりなよ……」

Side 一ノ瀬 春斗

「こうやって、見れば見るほど悲しいな」

家で明日の対戦相手、開成のエース神谷 功のピッチングを見ながら呟いた。

まるで、別人だ、僕の知ってる功とは……
勝つためには、手段を選ぶなと教えたのにまだ、神鳥に当てたこ

とを引きずっているのか？

確かにあれは、僕が誘導したことを差し引いても、想像以上の事故だった。

しかし、神鳥は復活したんだ、気にすることなど何一つないと言
うのに……

「退場してもらうよりも早く試合が終わるな」

今の功は、僕の敵じゃない。

彼の中に眠る、獣を起こす前に試合を終わらせよう。

本来の功が目覚めると厄介だからね。

ただ……なんだろう？

功の今のピッチングを見るたびに感じる、このイラつきは……何
も関係ないか。

邪魔するなら、全てを潰すまでだ。

S i d e o u t

第42話 俺たちの明日

津佐高校との試合前、いつも通り山中とブルペンで試合前の投球練習をしていた。

向こうの先発は、春斗ではないみたいだ。
背番号1の3年生。

「おい、サインはいつも通りでええな？」

「もちろん」

舞は……まだ、来てないか……

「さっきから、応援席ばっか気にしとるけど、どうかしたんか？」

「なんでもない、大丈夫だ」

あんな酷いこと言つて、突き放しといて、行き成り試合見に来て欲しいなんて言つても来るわけないか。

北川に怒られるなあ。

「なあ、山中」

「なんや？」

「怪我で退場とかだけは、やめてくれよ」

「行き成りなんやねん、気持ち悪いぞ」

「お前が終われば、俺も終わりってことさ」

言葉では、言い表せないくらいお前には感謝してる。

「潰れるときは、一緒だぜ」

昨日、北川に言われた言葉は、俺を突き動かした。

北川には、もう俺の気持ちをその時に伝えた。

まあ……ほとんど、流れに言わされただけなんだが。

・
・
・
・
・
・
・
・

「自分の気持ちに正直になりなよ……」

「どうゆう意味だ？」

北川は、拗ねたように背を向けた。

「正直に……正直に答えてくれる？」

「……答える」

彼女は、一度大きく息を吸って、空に向かってゆっくりと吐いた。

そして、

「舞ちゃんのこと好きでしょ」

「だから、あいつとはただの幼馴染で「いつも、舞ちゃんのこと考えてるくせに」っ!」

その笑顔は、妖しくそして、どこか悲しい。

「神谷君と舞ちゃんに距離が出来るようになって、チャンスだと思っただのになあ」

北川は、俺が舞を突き放したことを知っていたみたいだ。

「でもね、神谷君のことを知れば知るほどその目は、私に向いていないと知っちゃうの。だから……」

俺は、この子を泣かしたのか……

「優しく……しないでよ……」

下を向き、震えた声でそう言った。

北川に言われる前から、答えは出てかもしれない。

でも、きっと自分の身が愛しくて、罪悪感から北川に優しくしてたんだ。

最低だな、俺は……

一ノ瀬と再会してから昔のことを振り返る時間が増えた。そのたびに思う、いつも舞が居て、俺に小言を色々言ってくる。

当たり前のように思っていたけど、無くなった今では少し寂しい。

自分の気持ちと向き合えば、答えは簡単に出た。

俺が今、北川になんて言うべきかも。

「ごめん……俺は……北川の気持ちに答えることは出来ない」

「そうだよな、知ってたよ。

だから私は「でも！」え？」

正直な気持ちを言うんだ。

「北川と話してると本当に楽しかった。

隣に居てくれるのが、嬉しくって。

でも、俺は、北川の気持ちに応えることは、出来ない」

自分からの返事は、君の名前ではない別の人の名前を言っていたから。

それでも

「北川が俺にとって、特別な存在であることに変わりはない。

それに、夏の大会でここまで勝ち上がったのも北川のお陰だ」

「じゃあ……もう、好きなんて言わないからあ……神谷君のこと忘れるようにい……努力するからあ……今までみたいに、接してくれますか……？」

情けない、泣いてる北川を見てると逃げ出したくなる。

ホント、俺は情けない奴だ。

言葉が詰まる、言うしかないんだ、進むことしか道が残されてい

ないのに心は、まだ後退を求めている。

「うん、こちらこそよろしく」

ありがと、そう言っただけで彼女は、瞳を拭いた。

「だから、舞ちゃんと仲直りしなよ」

「どうやって？」

今さらだろ、村上和付き合ってるばいし」

「うだうだ言っただけで、とりあえず明日の試合見に来てもらえなよ」

「俺から言ったこと」「ええい！ 携帯貸しなさい！」「はい？」

俺から携帯を取り上げ、何やら色々といじっているそして、

「送信完了」

まさか……

「舞ちゃんにメール送ったから。」

後は、頑張りなよ。

じゃあ、また明日！」

先ほどまでとは打って変わって、晴れやかな笑顔で去っていった。

「神谷君、ロージン持った？」

試合開始前直前、ベンチで座る俺に北川が聞いて来た。

「持っていない、どこにある？」

「はい、新しいのだから紛失させないように」

相変わらず、準備がよろしいことで。

「へいへい、分かりました。

じゃあ、そろそろ整列だから」

「うん、頼みまっせ」

「任しとけ」

ベスト4進出をかけた試合だけど、今までにないくらい興奮してる。

久しぶりだなこの感覚。

何か色々吹っ切れた感がある。

中学の時の試合開始前は、早く始まって欲しくてウズウズしたものだ。

久しぶりに思い切って投げてみたいけど、試合をぶち壊しにしたらなんにもならない。

とりあえず、落ち着いていこう。

S i d e 齊藤 舞

昨日、功から送られてきたメールを見ながら、自室のベッドで寝転がっていた。

恐らく、試合はもう始まっている。

試合会場は、一番近いところだからすぐに行けるけど……
あたしが見に行けなかったら功はどう思うかな？

今更、見に行くのも気まずい。
それに

「最後の文みたいなの書かれたら余計にだよ……」

——試合後に話したいことがある——

メールの最後の一文にそう書かれていた。
何を話す気だろう？

今になって、あたしと話すことなんて何も無いはずなのに……

不安が胸を押しつぶそうとする、この話は、きっとあたしにとって嫌なことだとなんとなくそんな気がしていた。

それ以前に、試合への招待も……

「直接言ってこいよなあ、バカ……」

携帯を閉じて、頭の中を空にする為に再び瞳を閉じた。

二度寝するなんて、久しぶり、なんてことを思いながら。

S i d e o u t

第43話 眠れる獣が目覚めるとき

Side 神鳥 哲也

「神鳥君！ これで3季連続の甲子園だけど意気込みは？」

「春は、準優勝でくやしい思いをしたので今度こそ優勝を狙います」

「今や全国屈指の打者になったわけだけど、対戦したい投手とかはいる？」

「いますよ。」

今は、無名の公立校のエースで僕が唯一全く歯が立たなかった投手です」

神谷、君と対戦出来る日を楽しみにしているよ。

・ ・ ・ ・ ・

「今日もナイスバッティングだったな」

「久木監督！ まだ、待ってたんですか？」

取材陣から解放された僕を待っていたのは、我が聖王高校監督、
ひさぎ たたとし
久木 忠俊。

現役の頃は、館鳳高校のキャッチャーでキャプテン。
彼が居るから、今の僕は居る。

「俺の旧友が監督してる、高校が今試合、やってんだよ。
その経過をちょっとな」

監督の旧友であり、僕が対戦を熱望する神谷を有する開成高校の
監督、加持 幸一。

現役の頃は、当時高校生？ 1と言われるほどの投手だったとか。

「どっちが勝ってるんですか？」

「それが電波が悪くて初回の攻防で更新が止まってるんだ」

携帯を空にかざし色々しているが、反応がないらしい。

このままでは、ラチがあかないので監督の車にとりあえず乗った。

「加持監督って、指導者としてどうなんですか？」

さっき、そのコンビニで買ったイチゴオレを飲みながら聞いて
みた。

「高校を卒業してからは、一度も会っていないからな。
監督としては、どうなのかは知らん」

「加持監督が行方をくらました……でしたっけ？」

「そうだ」

春の近畿大会で神谷の名前を見つけたときだった。

その記事を読んでいる僕に加持監督のことを色々教えてくれた。

高校を卒業してから加持監督とは、誰とも連絡はとれなくなったらしい。

かつてのチームメイト、藤井と言う名の人から生きていると連絡を受けるまで監督は、加持監督の生存を疑っていたほどだ。

「お、データが更新されたぞ」

「経過は、どうですか？」

神谷が先取点を取られるとは、考えにくい。

同点か、リードしてるか……

「3 - 0で開成が負けてる」

S i d e o u t

S i d e 齊藤 舞

結局、気になって来ちゃったけど功が3点も取られてるなんて…
一体何が？

「まいねえ！ こっち、こっち」

応援席に居る愛に見つかった、隣には飛鳥も居た。

「神谷の奴、調子悪いみたいやね」

「どうやって3点も取られたの？」

「フォーボール四球で、出たランナーをヒットで返された」

「それに、こうにいの様子がなんかおかしいの」

愛に言われて、マウンドで投げる功を見た。

高校に入って功の投げる姿は、何度か見たけど今の姿は何処か懐かしい。

「そーかな？」

中学の時は、あんな感じのめちゃくちゃなフォームだったじゃない」

「フォームは、キレイな方がいいに「そうかなあ？」飛鳥先輩？」

「ウチには、今の神谷の方が違和感無いように感じられるけど？
ただ、本人がどう思ってるかは、知らんけどな」

「どうゆつこと?」

「公立校で主力投手が自分しか居ないって状況、加えて神谷元来の精神的甘さ……多分それが邪魔して、あいつ本来の力は、出し切れへんと思う」

じゃあ、高校に入ってフォームがキレイになったと言うより、大人しくなっただけのこと?

それなら、今の功は、昔の自分を取り戻そうとしてるってこと? ……分からない、功が何を考えているか。

いつの間にか、功の心の中は見えなくなってしまった。

彼があたしに見せないように、していただけと思っただけけど、ホントは違う。

あたし自身が功から目をそむけていた……だから、今は彼の一拳一動見逃さず見つめよう。

「ツアアウト、満塁やな」

横の飛鳥が呟いた。

S i d e o u t

S i d e 山 中 淳

「スイマセン、タイムお願いします」

今日、6個目の四球にた^{フォアボール}まらず、タイムをとってマウンドの神谷の元へと向かった。

「どこか痛めとんか？」

ボールに威力はあるのに、今日の神谷はどうもボールが荒れ過ぎてる。

試合前から集中力に欠けてる感があるしな。

「どこも痛くない」

「なら、いい加減ワイのミットに集中せえ。

次は、先制タイムリー打つとる一ノ瀬や。

中途半端なボールは、打たれるで」

「了解」

笑顔で言われてもなあ……

S i d e o u t

ミットを見るか……確かにいつもに比べると集中できていない自分が居る。

ロージンを拾い手で遊ぶ、目線を応援席に目を向けた時だった。

「来てたのか……」

眼に入っただのは、見慣れた幼馴染の顔。

不安そうに見つめる顔は、見たことが無かった。

まあ、こんな不安定のピッチングじゃそつもなるか……

「3点ビハインド……ツアウト満塁……よっしゃ！」

ロージンを地面に捨て、山中を見る。

今、追加点を取られたら試合が決まるかもしれない。

追い込まれた状況でも、焦りは無い、どうやら俺は高校に入ってから寝ていたようだ。

窮地に追いつめられて、背筋にゾクゾクした感覚が走る、俺の中で何かが眼を覚ました……

第44話 繰り返される悲劇

Side 山中 淳

「これが今の功の限界だよ」

打席に入った、一ノ瀬がそう言った。

「なめんなや」

「眠ったままの功は、敵じゃないよ」

今の神谷は、本来の姿じゃないって、言いたいんか？

ワイは、今が一番やと思ってる。

過去どうであれワイは、ワイのやり方で神谷を引っ張って見せる。

初球のサインは、スライダー。

しかし、バッテリーを組んで初めて神谷が首を横に振った。

残りの球種は、直球のみ。

慎重に変化球から入ろうと思ったが……神谷がストレートを投げたいなら投げさせるか。

右打ちの一ノ瀬から一番遠い、アウトコースにミットを構えた。それを見た神谷は、一瞬笑ったように見えた。

Side out

Side 一ノ瀬 春斗

「っ！」

どうゆうことだ……初球に身体スレスレのインコースだと？
それに今のボールを投げた功の顔は、笑っていた。

セットポジションに入った、功から発せられる獣のような野生の
ようなオーラ。

それを感じ取った時僕は、ある確信を得た。

——眠れる獣を起こしてしまった——

「ファール!!」

高めのボール球に手を出してしまった……そうだ、ボール発せら
れる圧倒的圧力……

生き物ように、唸るこのボールこそ功の本来のストレート。

……出来ればここで試合を決めたかったが、仕方ないか。

Side out

頭の中を空にして、山中のミット目がけて腕を思い切って振る。
今までは、無意識のうちに力をセーブしていたようだ。
指先に残るボールの感触、腕を振り切った後の解放感……

「フー……これで終わりだ……！」

3球目もストレートを投げ込んだ、乾いたミットの音を立てなが
らボールは、吸い込まれていった。

・

「さっきのピッチングがお前の全力か？」

ベンチに戻り喉を水でうるおしている時、山中がそう話しかけてきた。

「ん？ 別に昔のように思い切って投げただけだよ。どうやら、春斗が言うように俺は、寝ていたらしい」

「眼が覚めたんか？」

「まあな、この先は、1人もランナーを出さないつもりだよ」

「頼もしいなあ」

山中は、肩をすくめた。

さて、ボチボチ、反撃開始と行きますか。

S i d e 藤井 高志

5回の満塁のピンチを免れてから、開成に流れが傾いたか。ついに7回の開成の攻撃で同点、打席には3番を打ってる神谷君。

「藤井さん、津佐高校が一ノ瀬君をついに投入しましたね」

飯村が暑そうに額の汗を拭いながら言った。

「ツアウト2、3塁だからな、満塁策をとっても次は、4番の山中君だから勝負しかない」

同点の場面でクリーンナップ……しかも、打席の神谷君は、5回のピンチを切り抜けてからのピッチングのリズムがいいから、気分も乗っているはず。

「ここで決めるか……？」

打席の足場を均し、神谷君が静かに打席に入った。

S i d e o u t

「さてつと……」

春斗は、右のサイドスローだったな。

左打ちの俺からは、見やすいから欲張らずセンターから左方向を狙うか。

決め球は、スライダーだろうな……

俺に変化球を教えてくれたのは、春斗だ。

野球の師であり、初めて出来た親友……だからこそ俺の手でケリをつけてやるよ。

初球は、アウトコース低めギリギリのストレート、手を出してみたら打球は、バックネットへ。

タイミングは、大丈夫そうだな。

次は、打たせてもらおうか。

S i d e 一ノ瀬 春斗

功の奴は、相変わらずデタラメな打撃センスだ。

あんなストライクギリギリなんて、普通は初球でアジャストするなんて出来ないのに。

やっぱり、功にはここで舞台から降りてもらおうか……

君のように才能があるやつを見るとイラつくんだよ。

僕がどれだけ努力しても君は、どんどん先へと進んでしまう。
どんな秀才や天才も壊れたら、ただのガラクタってことを教えて
やるよ!!

「なっ!!」

抜けたボールを装って頭部を狙った……しかし、その顔面スレス
レのボールを大根切りで打ち返された。
打球は、幸いファールだったが……

「化け物め……!」

歯ぎしりしながらそう呟いた。

S i d e o u t

ついに頭部を狙ってきたか……
俺たちのしてる球技は、人を殺せるってことを分かってやってん
のか?

一歩間違えば、大事故につながるんだ。

お前が何を考えて、こんなことを始めたか知らねーが、ふざけた
ことをするのもここまでにしてもらおうか。

捕手とのサイン交換を済ませ春斗は、再びセットポジションへ。
カウントは、ツーナッシング……俺が圧倒的不利な状況だ。
おそらく、外角低めの真っ直ぐか……それとも……

S i d e 山 中 淳

今の一ノ瀬の投球は、意図的にか？
高校野球では危険球による退場は、無いにせよあからさま過ぎや
ろ。

「神谷！ 危ないと思ったら避ける！」

ネクストから声を送ったが、聞こえてないのか神谷は、反応しない。

少し間をおいて一ノ瀬が投球動作に入った。

ネクストから見てた、ワイにはその投げたボールの軌道がハッキリ見えた。

頭部へと向かうボールの軌道が……

「避ける！！」

しかし、神谷は打撃動作に入っていた。
打ち返す気か……！

Side out

2球続けて同じコースだと？
なめんなよ！

フェアゾーン打ち返すために、前方の足をオープン気味に開きバツトを叩きつけるようにボールへ。

——いただき——
そう思った、しかし、ボールは右にスライドし俺の顔面へ。
ス、スライダー……

S i d e 北川 沙希

声が出なかった、それは2年前に見た光景と同じだった。ただ、違うのは、当てられたのは2年前に当てた人。

「神谷！」

声を張り上げて、加持先生がベンチを飛び出した。割れたヘルメットの横で倒れた神谷君は、動かない。う、うそでしょ……そんな……神谷君が……

加持先生と山名君に肩を貸してもらい、重い足取りで神谷君が治療のためにベンチへ戻ってきた。そのまま医務室へと向かった神谷君は、数十分後に頭に包帯をしたらま帰ってきた。

「神谷君大丈夫？」

「まーな、当たった直後はフラフラしたけど大丈夫……と思う」

「神谷、医師にはなんて言われた？」

「……問題は無いと言だけ」

嘘だ、今だって足元は定まっていない感じだ。止めたい……もう一回当てられたらどうなるか……加持先生が止めてくれることを願うしかない。

「止めても無駄そうだな……」

「だから、大丈夫ですって」

「わかった、そうゆうことで采配をしよう。

ただし、少しでも俺が違和感を感じたら、そく交代だ」

「了解です。

北川、そのバットとつてくれ」

そんな危険な状態で本気でいくの？

君の帰りを待ってる人は、居るんだよ？

たかがスポーツでもう会えなくなることだってあるんだよ？

「北川？」

今、私が持っているバットを渡せば君は、また出て行くんだね。
なんでそこまでして、必死に甲子園を目指すの？

「大丈夫……打ってくるから」

耳元でそう言って、立ちすくむ私からバットを優しく奪い去り、
背番号1は出て行った。

S i d e o u t

第45話 終局

Side 神鳥 哲也

寮に帰ったあと部屋のパソコンで開成高校の試合経過を見ていた。

試合は最終回、津佐高校の最後の攻撃へと入っていた。

7回に神谷のヒットで1点を勝ち越した開成は、その1点のリードを保ったまま逃げきろうとしていた。

「今年の夏は、神谷に会えそうだ」

そう思うと嬉しさがこみあげてくる。

彼は、僕を熱くさせる数少ない投手だ。

中3の時の試合だって、楽しくてしょうがなかった。

僕の不注意で最後まで出来ずに残念だったが……

避けようと思えば避けれたが僕の身体は、石のように固まって動けなかった。

神谷の投げるボールに見惚れていた。

だから、もう一度打席で見たかった、彼の投げるボールを。

「最後の山場か……」

開成高校は、最終回ツーアウト満塁のピンチを迎えていた。点差は、1点……どうやって抑える気かな？

打席には、春斗が入った。

1点差の最終回、今ここを乗り切るには、最後のカードを切るしかなさそうだな。

前の打席は、ストレートで押しきれたが春斗のことだ、俺の細かい仕草から球種を判断するだろう。

アウトに仕留めるには、あいつの知らない切り札を使うしかない。

初球のストレートを見逃し、ストライク。

難しいのは、ここからだけど……山中のサインは、スライダー。

——キーン！——

痛烈な音を残して打球は、一塁線へ。

塁審の判定は、ファール。

危なかった、あと数センチで逆転タイムリーになるところだった。

「タイムお願いします」

山中がタイムをとって、マウンドに寄って来た。

「ナイスタイミング」

「ストレートもスライダーも打たれるような気がすんねやけど？」

山中の勘は、よく当たる。

この辺の感覚も凄いといつも思う。

「多分、考えてること一緒」

「使うタイミングは、ワイに任せてくれへんか？」

「当然任せるよ。」

頼むぜ相棒」

今さら、確認するまでもない。

信用し過ぎと言われても仕方ないほど、山中にリードは、まかせつきり。

まあ、今日は初めて首を横に振ったが。

「今日もキレイな夏空だな……」

帽子を取り、マウンドから見上げた空は、今日も広く高い。

照りつける日差しは熱く、帽子を取った頭に当たる風は、心地いい。

正直、野球を始めたのも再開したのも周りの人に後押しされた部分が大きかった。

でも、やっていてよかったと思ってる。

野球をしている時は、他人との繋がりをより強く感じられる。

マウンドに居る時にかけられる、スタンドからの声援、背中越しから聞こえる仲間の声。

色んな人に支えられて今の俺は、居るんだと強く思う。

でも、一番近くで支えてくれていた彼女を傷つけてしまった。

今さら謝っても許しては、もらえないかもしれないけど……それでも俺は……

「さてつと……」

帽子をかぶりなおし、ホームの方へ視線を移した。
先には、仏頂面をしている山中。
そんな、怖い顔すんなよなあ。

「楽しんでこーぜ……」

自分にも言い聞かせるように呟いた。

Side 一ノ瀬 春斗

僕を追い込んでからは、2球続けてストレートか。
釣り球のつもりだったんだろうが、もうボール球には、手を出さないよ。

どのみち、功は、もう限界に近いはず、延長になってもかならず
ウチが勝つ。

ミートに徹して、来たボールを叩く！

山中のサインを確認した功がセットポジションの体勢で、グローブ
の中 of ボールを握りかえる。

スライダーじゃない……3球続けてストレートか。

僕が当てた死球のせいでもう限界だろうに、今楽にしてやる。

功が足をあげた、少し捻りのきいたフォーム、しなった腕からボ
ールが放たれる。

投げた瞬間に分かった、甘いコースに来ていると。

——もらった！——

タイミングは、身体が覚えた、覚醒後の功のストレートのタイミングも完璧。

捉えたはずだった、ボールが予想を遥かに上回り遅いことを頭に入れておけば……

チエ、チエンジアップだと……！？

S i d e o u t

この夏に向けて練習した、新しい変化球、『チエンジアップ』。

実は、最初に春斗に教えてもらった変化球だ、当時は、ボールを抜くって感覚が分からなくて習得をあきらめた。

タイミングを外された春斗は、空振り三振。

割れんばかりの歓声が響く中、気がつく俺は、ガッツポーズをとっていた。

「まさか、チエンジアップとはね」

試合後のチーム同士のあいさつの後に春斗が話しかけていた。

「ちょっとは、成長したろ？」

「そーだね、完敗だよ。
頭、大丈夫かい？」

「多分な」

「相変わらず規格外れな奴だな」

「どーも。」

ただ、ナイスボールだったぜ」

「ハッハ！

本当に君は、面白いやつだよ！」

笑いながら春斗は、涙を流していた。
やり方は、間違っていたかもしれないけど甲子園を本気で目指していたことに疑いは、無い。

「ありがとな、春斗」

俺に野球を教えてくれて、試合を通して色々なことを思い出させてくれて。

「気持ち悪い奴だ」

……… 山中にも似たようなこと言われたな。

S i d e 一ノ瀬 春斗

ありがとうか……随分と大人になったもんだ。
昔は、僕の後ろに付いて来るだけだったのにな。

「これで高2の夏が終わったのか」

誰も居なくなったベンチで呟いた。
ベンチの外では、先輩たちが泣いている。
申し訳ないと言う、気持ちと同時に喜びが心の中に存在した。

「そうか……そうゆうことか」

気づいてしまった。
僕は、功のファンになってしまっていたんだ。
彼の見せる才能に惚れてしまっていたんだ。

才能のある選手なんて目障りだと思って、今まで潰してきた。
でも、功だけは潰れなかった、いや出来なかったの方が正しいか。
甘いな、僕も……

けど、この気持ちに気づいてしまった以上、もう野球は、出来な
いな。

これからは、陰ながら功の応援でもするか。

「行けよ、甲子園」

誰も居ないベンチで願いを込めて、呟いた。

第46話 夏空の下で

「さてつと、帰りますか」

ようやく病院から解放された。

試合後、頭部に死球を受けた俺は、念のため病院へと向かわされた。

一応、異常は無し、ただし今夜1日は安静にしとけとのことだった。

「頭のほかに、肩や肘は、大丈夫か？」

付き添いで来てくれた加持先生が聞いて来た。

「大丈夫です」

「そうか……迎えも来ているようだから俺は、帰るぞ」

そう言つて、加持先生は車へと乗り込んでいった。
迎えつて、一体だねが？

「舞……？」

その姿は、間違い無く彼女だった。

「大丈夫だったの？」

「え？ まーな。」

それより、なんでこんなとこ居るんだよ？」

「沙希ちゃんが病院行ったって、教えてくれた。それに試合後話があるって、功が言ってたから」

北川め……余計な一文を追加しやがって。
どうする？

この状況で今さら何も無いなんて不自然すぎる。
とりあえず帰りながら考えるか……

舞と並んで帰路につくが、会話が続かない。

と、言うよりも、俺の頭の中はこの危機的状況をどう乗り切るかに全ての思考が傾いている。

会話をしている、余裕など……無い！

隣に居る、彼女の横顔を見る。

昔と変わらない、いや昔よりキレイなった顔立ち。
気の強く、世話焼き所も昔より傾向が強くなったが……

「功？」

「っ！？」

「なんでもない！」

視線に気づかれたか、相変わらず勘と言うか第6感が鋭いと言うか……

「ねえ、話って何？」

S i d e 齊藤 舞

「あー……その……あれだ……」

恥ずかしそうに頭をかきながら、言葉は、ぎこちない。
なんとなく、察しはついていた、あのメールは功が送ったものじゃないってことが。

だから、今からする功の話は、きっとあたしにとって嫌なことに違いない。

「沙希ちゃんと付き合うとか？」

心の内側で思ってることを聞いた。
功のことは、遠くからでもずっと見てた。
だから、沙希ちゃんと一緒に居ることもよく見た。

彼女が功のことを好きなのは、飛鳥から聞いていたから仕方ないと、自分に言い聞かせた。

功が何も言ってこないのは、あたしには、関係無いからだ。

「北川？」

何言ってるんだ？」

まだ、とぼけるつもりなんだ……！

S i d e o u t

「だって、あのメール功が送ったんじゃないんでしょ？」

何故、ばれてるんだ？

北川が言ったのか？

「どうなの？」

無表情だけど、その目には、怒りが含まれてる。

「……………そーだよ、北川が送った」

「付き合ってるから？」

「それは、違う」

「じゃあ、なんで沙希ちゃんにあんなメール送らせたの……！」

今にも崩れそうな表情で彼女は、叫んだ。

俺の自業自得だな……

「ねえ……何か答えてよ……怒らないし、ぶたないからあ……お願い……」

泣いてる彼女を見るのが、つらいから、反対の側を見た。

今、俺たちの歩いている河川敷には、夕陽がキレイに差し込んでいる。

ちょうど今この場所は、俺が舞に野球を始めるように言われた場所。

そして、俺が甲子園を目指す出発点になった場所。

「舞、ちょっと寄り道してもいいか？」

戸惑う、舞の腕をつかみ半ば強引に川の近くまで連れて行った。

「少し、長くなるかもしれないから座りなよ」

「いや、早く本当のこと言って！」

「舞、頼む落ち着いて聞いてくれ」

「何を！？」

今になって、あたしに言うことなんて何も無いはずでしょ！
功が誰と付き合おうとあたしには「それ以上は、しゃべるな」っ！」

少し、威圧して言いすぎたかな？

彼女は、少し怯えた表情で俺の顔色をうかがっている。

「俺……お前のことが好きなんだ」

自分の正直な気持ちを口にした。
彼女は、目を丸くして俺を見てる。

「北川は、もう知ってる。
あのメールは、北川が俺とお前の仲を直したくて送ったんだ」

「それって……ほんと？」

「本当だよ。
今さら迷惑だよな、村上と付き合って「付き合ってない」は？」

「村上君には、ごめんって言った」

「……ことは、俺のただの勘違い……」

「なんで？
ずっと、一緒に居るからってつきり「どうかのバカが好きだからだよ！」「はい？」

涙目でそう叫ぶ彼女を不謹慎ながら、可愛いと思ったのは、俺と君だけの秘密だ。

「何？」

その不思議そうな眼は？」

拗ねたように口をとがらせながら、涙をぬぐう幼馴染。

「えーっと、舞も俺のこと好きだったの？」

「当たり前だ！」

でなきゃ、功の身の回り世話なんてするわけないでしょ！
この変態、鈍感バカ！！」

何故俺は、こんなに責められてるんでしょうか？

「へー、そうだったのか」

「もっと驚け！」

ぐっ、公共の場で殴らなくてもいいだろ。

「ねえ……もう一回、好きって言って……」

可愛すぎだろ……

思わず抱きしめちゃった。

「ひゃ！」

ちょ、先に言って「——」。」「っ！」

面と向かって言うのは、恥ずかしいから耳元で囁くように言ってみただが……舞が固まった。

「何か、反応してくれないと恥ずかし――」

俺の言葉を彼女が遮った、息苦しさと共に確信する。

――自分はこの人が好きなんだと――

いつも、自分の殻に逃げ込もうとする自分が嫌いだった。

自分が傷つくのが怖いから、他人とは距離を置くくせに誰から求められることを望んでいた。

でも、舞はそんな俺のそばにずっといてくれた、中3の冬に自暴自棄になりそうな俺を立ち直らせてくれた。

彼女の父の夢であり、いつしか彼女自身の夢になり、そして俺の夢になった『甲子園』。

最初は、舞が喜ぶ姿が見たくて必死だった。

中学に時には、1度は諦めた、1人の幸せを奪った痛みに関心は、耐えることは出来なかった。

けど、俺は今、その夢の途中に居る、新しく出会った仲間と共に……

きつと、どれだけこの道を進み、迷ったとしても、俺の歩みの出発地点は彼女なんだ。

「えつと……そろそろ離してくれない？」

「え？」

「ごめん」

「ううん、嬉しかったよ。」

ちよつと、恥ずかしかったけど……」

当たり前だ、俺としては恥ずかしすぎて2度と口にはしたくない。

「ねえ、どうするの?」

「何が?」

「……流れでわかりなさい」

「待て、そんなに殺気を振りまくな。」

……俺は、けじめがつくまで付き合う気はない」

「神鳥君?」

「そーだ。」

あいつとの再開を果たすまでは……他のことをする余裕はない」

甲子園に行くことすら、狭く険しい道であり、全てをかけるつもりで行かなければ到底たどり着けるものではない。

それに、このけじめを付けないと、俺は君の隣に胸を張って並べないから。

「だから、もし舞が村上と付き合っても俺は「なら、待つしかない……か」は?」

「あたしの方を向かせるのにどれだけ待ったと思ってるの? 1年と少しくらい、なんともないよ。ただ……」

最後の一言が発せられると同時に感じる悪寒……聞くなと俺の本

能が叫んでいる・

「他の女に目をくれたら……楽しみね♪」

こいつの笑顔ほど、破壊力のあるものは無いな……色んな意味で。

「了解しました」

「よろしい！」

あ、待つ代わりに1つ約束してほしいなあ」

「ごめんなさい、上目遣いで申し込まれたら断れません。」

「なんだ？」

「甲子園優勝のウィニングボール頂戴♪」

あ、もちろん夏の甲子園ね」

俺の道にゴールはあるのか？

「ふざけんな。」

甲子園に行くだけで、どれだけ大変か「ダメえ？」ぐっ！」

ダメだ！

この上目遣いと言う兵器の前に俺の闘争心はすでに折られている……！

「分かった、全力で頑張ります」

なんて、無茶な約束をしたんだ。

「よし！

楽しみにしてるね。

じゃあ、帰ろっか！」

……この笑顔が見ただけで約束をした甲斐があったかもしれない。

第47話 終末へのプロローグ

「功！　そろそろ起きないと時間遅れるわよ！」

「うーん……もうちょっと……」

「早く、起きろお！」

「バカ！　布団をめくるな今、何月だと思ってるんだ！！」

夏が終わって、秋も終り寒さが増した12月、俺は幼馴染と掛け布団の取りあいをしていた。

今年の夏は、予選決勝で報明に負けて甲子園出場は、叶わなかった。

しかし、新チームで臨んだ秋の県大会で優勝しその後の近畿大会も制覇した、開成は、春の甲子園出場がほぼ内定していた。

一方で神鳥のいる、聖王高校は、夏の甲子園を全国制覇を達成し、全国から狙われる立場になった。

そのせいか、秋の大会は、関東大会一回戦で負けて、春の甲子園の出場は、絶望的。

神宮にも出てこれないから、俺が神鳥と再開するには、最後の夏しかチャンスが無くなった。

「うだうだ、言わないで起きなさい。

それとも身ぐるみの無いその身体に、もみじでも残して欲しいのかしら？」

「いえ……起きます」

なんて、殺気だ……マジで、殺される。

「早く起きてよね。」

遅刻したらなんて、言い訳するつもりなのだから……」

「そりゃ、お前のせいだろ？」

お前がもっと、もっと、うるさいから昨日の夜は、大変なことになったんだろ。

まったく、ベットの中じゃ受身でかわいいの「っ！ 死になさい！」に？」

この後、数分間の記憶が俺の中から抹消された。

起きたら頭に痛みが走ったことしか覚えていなかった……

「神谷あ！ 10分遅刻や」

我らのキャプテン、山中が怒っている。

「えー、セーフだろ？」

「いんや、アウトや。」

まったく、夕方の6時から祝勝会やのに遅刻するってどうゆうことや？」

「いや、舞の奴がさ昨日の夜、色々とうるさ」「黙りなさい」「ぐ！」

「夜？」

「な、なんでもないの！」

功の奴なに言ってるんだろうねえ？」

とりあえず、殴り続けるのをやめてくれないだろうか？

結構、痛んだが。

「まあ、なんでもええわ。」

加地先生とみんな先入ってるで」

「へいへい」

確か、しゃぶしゃぶだったよな？

しかも、加地先生のおごりで、こりや暴食するしかないな。

「ねえ、山中君、あたし部外者なのに来てよかったの？」

確かに、何故舞も連れてくる必要があったんだろうか？

俺としては、嬉しいけど。

「大丈夫やで、練習試合帰りの飛鳥と斎藤の妹も来てるから」

それって、大丈夫な理由にならねえだろ……

.....

「丸川！ 貴様、人の肉に手を出したな！」

「うるせえ、この分析眼鏡！」

「2人とも落ち着いて下さい！」

丸川と関本は、相変わらず些細なことでケンカをしている。
止めに入った、桜井が一番びびっている。

「北川、お茶いる？」

「うん、ありがと」

そーいや、新チームになってから、山中と北川がよく一緒に居るのを見かけるんだが、もしや？

……俺には、関係ないことだな。

壁際の席に座り、みんなの様子を見てた。

みんなで居る時もたまに無性に1人になりたい時がある。

病気だな、ここまで来たら。

「ねえ、功。

いつもこんな賑やかなの？」

「ああ、そうだよ。

面白いだろ」

「面白いかどうかは、知らないけど、功が楽しそうに野球をする理由は、分かったかな」

「あつそう」

——つれないやつめ。そう言つて、舞は、少し拗ねてしまった。

今、俺の隣には舞が居て、仲間に囲まれて日々が進んでいる。

いつまで、この温かい場所は、続くのだろうか？

始めて出来た、強い繋がりへの消失への恐怖。

でも、心の中には、再び1人になりたいと思う自分もいる。

真反対の自分が存在する心の中。

矛盾が俺の本質なら、いつか俺は自分で今の関係を壊すかもしれない。

……今は、心配する必要はないな。

俺は、少なくとも今は、他者とのつながりを求めているのだから。

フツ、と口元を緩めた少年は、近くの窓から外を見た。

冬の始まりを思わせる空は、雲がかかり光は差し込んでいない。

木からその命を終えて、地に落ちた葉が風に吹かれ道行く人の足を転がっていく。

「そろそろ、冬だな」

そう呟いた少年が世間を賑わす、『甲子園の怪物』と世間に認知され騒がすことになるのは、この時は、まだ誰も知らない。

第48話 春の甲子園（前書き）

冬が過ぎ春が来た。

全国から選びぬかれた高校が聖地に集った。

それは後に語られる夏の始まり。

そして終わりの始まり。

第48話 春の甲子園

「緊張しとるか？」

試合開始前にベンチ前で選手みんなで並んで開始の合図を待っている時、我が開成高校、不動の4番、山中 淳がそう聞いてきた。俺よりも、淳の方が今にも朝に食ったものを吐きそうな顔をしている。

「お前が大丈夫か？」

「ほっとけ、これでも必死に緊張かくしとんねん」

肩を軽く叩かれて突っ込まれる。

大会初戦なのに淳とこうして、やりとりするあたり自分で思っていたよりも余裕があるらしい。

ベンチからスタンドの方をじっと見てみると、審判の人が出てきて集合をかけた。

「行くぞ！！」

山中の掛け声と同時に選手全員で飛び出す。

挨拶をすませ後攻の開成高校は、それぞれの守備位置へと散っていく。

俺は、ゆっくり自分の場所へ歩いて行った。

始めて投げる、真っ黒なマウンド。

歩数を計り、足場軽く均す。

夢舞台のマウンドの土は、抵抗なく足を流れて行く。

——ようやく、辿り着いたんだな。

ふと、そんなことを思い、スコアボードを見た。

甲子園独特の浜風は、スコアボードの上にある旗を、激しく振らしていた。

「功！」

振り向くと、淳から試合で使うボールを投げられた。

試合開始前の投球練習をしろと言う、意味なんだろう。

軽く6球を投げ、最後の1球を受けた淳がセカンドへ矢のような鋭い送球を投げる。

そのボールを内野陣が回し、最後に俺の元へと帰ってくる。

「しまってこっぜー!!」

淳がいつもと同じように声を張り上げた。

俺の後ろを守る全員が腹の底から返事をする。

スタンドから吹奏楽部が吹く音楽に背中を押され、先頭打者がボックスに入り、審判が試合開始の合図をする。

淳とサインを交換し、甲子園のサイレンが鳴り響く中俺は、振りかぶった。

俺にとって初めての甲子園、春の甲子園が始まった瞬間だった。

第49話 運命のイタズラ

Side 藤井 高志

仕事場のオフィスで担当している雑誌の記事の編集をしながら、脇にあるラジオから流れる甲子園の経過に耳を傾けた。

今日は、開成高校の初陣、つまりエースの神谷君が甲子園デビューするという意味だ。

秋の神宮大会を制覇して今大会、優勝候補としてあげられる開成。

神谷君の力に注目が集まり、神鳥 哲也と同様にその名が全国に轟くのは、時間の問題だと思っていた。

「藤井さん！ ちゃんと手を動かして下さい！」

ロングの黒髪を揺らし、眼鏡の奥にある強気な性格を相手に印象与える釣り目で、俺を睨みながら後輩の飯村は、言ってきた。

「少しは、ラジオ聞いたっていいだろお」

「締め切り迫ってるんですよ！」

3年目を迎えても彼女の真面目な性格は、相変わらずだった。

「そう言えば、今年入学の1年生凄いですよね？」

彼女は、手と目線は手元の作業に没頭している。

あれだけの作業をこなしながら話す余裕があるのか……

「全中2連覇をしたチームの全員が同じ高校に進学するってやつか？
噂では、新設校に行くって話だしな」

「その世代は、他にも結構なレベルの選手が揃っていて、黄金世代
と言われているそうですよ」

「ふーん」

「興味無いような感じですね」

俺は、有望な選手……1年となればたいがい興味を抱き、一度
は直接見に行く。

そんな俺が何も示さないことに疑問を抱いたらしい。

「今年の高3には、本物の化け物がいるからな。
その1年どもがどうしようが、今年の夏は盛り上がるぞ」

そう言った、自分の背筋にゾクッと、何かが走った。

こんなに夏が待ち遠しいのは、久しぶりだ。

ラジオからは、開成がチャンスを迎えて、大きな歓声がより一層
大きくなった音だけが聞こえた。

S i d e o u t

試合は、終盤に差し掛かうとしていた。

1対1で迎えた、7回裏のウチの攻撃は、2番桜井と3番である俺の連続ヒットで二死ながら一塁三塁のチャンスを迎えていた。
ツアウト

打席には、先制タイムリーを打った、4番キャッチャー、山中淳。

「淳、頼むぞ！」

「力^{りき}んじゃダメですよ！」

ランナーで塁に居る、俺と桜井の声に小さく頷くと淳は、右打席に入った。

肩にバットを寝かせた状態で相手ピッチャーと対峙し、フーッと息を吐いて身体から力を抜いて行く。

淳、独特の準備動作だ。
ルーティン

今となつては、見慣れた動作だし、何よりこの緊迫した場面で淳ほど頼りになる打者は、居ない。

俺を含めチームメイト全員が思っていることだと思う。

——キーン！

初球だった、淳が右方向へ打った打球が右中間を抜けて行く。
大きな歓声の中を俺は、ただ必死に走った。

試合後の取材から解放されたのは、チームメイト全員がベンチを去った後だった。

誰か待っていてくれてもいいのに……

一人で球場の外に出ると、腕を組んで不機嫌な顔をした北川が居た。

足元には、俺の荷物があつた。

どうやら、一人で俺を待っていていたらしい。

「遅いぞ！ みんな先にバスに乗っちゃったよ！」

「へいへい、すぐに行くよ」

「それより先に私に言うこと、あるんじゃない？」

「荷物ありがとう」

「ちがーう！」

一回戦勝ったことに、嬉しいのか普段よりも少しだけテンションの高い北川をよそに俺は、自分のエナメルバッグを肩にかけた。

「そつえば、淳君がなんで決勝タイムリーを打った自分の方が取材が短いんだって嘆いてたよ」

「知るか、こつちだつて楽しくてそうだったわけじゃない」

「淳君に言ったらなんて言うか……」

北川がため息交じりにそう言った。

淳と北川が付き合っているっていうのが、俺はイマイチ実感できていなかった。

部活中は、私情を一切挟まない淳は普段チームメートの前で自分のことを語らない。

……

「そうそう、舞ちゃんが——」

北川が言葉を言いきるよる前に目の前の人込みから、飛び出してきた人が俺にぶつかった。

「いた！」

女の子のようだ。

帽子を深くかぶっていて、顔が見えない。

「大丈夫？」

「ごめんね！」

一瞬だけ目があった。

その瞳の色は、蒼かった。

——キレイな瞳だ。

素直にそう思った。

明るい色では無いが、深みのあるその色は、俺の脳裏に瞬時に焼

きついた。

「私、急いでいるから」

少女は、そう言って去って行った。

「まったく、急ぎ過ぎ……ん？」

俺は、自分の足元に何かが落ちている事に気がついた。
拾い上げて見ると、ペンダントだった。
さっきの少女が落としたんだろう。

そう思っ、振り返ってみたがそこに彼女の姿は無かった。

「……まあ、宿舎訪ねてくるかもな」

みんなをバスに待たしていることもあって、俺はそのペンダントを後ろポケットにしまい、その場を去った。

第50話 前川 千紘

甲子園に出場したチームは、大会中は近畿圏内の宿泊施設に泊まるのが通例だ。

それは、地元である開成（ひらなり）も例外ではない。

「神谷、お前さっきからそのペンダントばっか見つめてどうしたんだ？」

同じ部屋の関本がそう訪ねて来た。

宿泊中は、2人1部屋に割り振られ俺は関本と同じになった。

昼前に終わった試合後、まだ夕食までの待ち時間、部屋で休みながら甲子園から引き揚げるときに蒼い目をした少女が落としたペンダントを手に取り眺めていた。

「拾ったんだ」

ハートのアクセサリーがついたペンダント。

もし、本人の大切なものなら甲子園の周りを探しているだろうか？

「関本、まだ夕食まで時間あるよな？」

「まーな、1時間ほどだが」

1時間が、だったら余裕だな。

俺は、ペンダントをジャージのポケットにしまい立ちあがった。

「どこ行く気だ？」

「散歩」

宿舎から歩いて15分くらいの場所に甲子園はある。
歓声が外まで聞こえている、そういえば今日は第4試合まであったような気がする。

傾き始めた日の下で、自分が球場から出てきた場所を目指した。
途中で少し周りの視線が気になったけど、気のせいだと言い聞かせて足を進め続けた。

そして、その場所に着くと、まず視界に入っただのは深めに帽子をかぶり、地面のほうを見ている人。

見つけた。

近づき、肩を2回たたく。

「探し物はこれ？」

「どうしてそれを！？」

印象的な蒼い瞳が俺の方へむけられた。
当たり前みたいだな。

「昼間ここでぶつかったときに落とした」

「一応、礼は言っておくわ」

……一応だと？

「あなた、開成高校の神谷君でしょ？」

「どうして名前を？」

「今大会、注目選手ですもの。
高校野球好きなら、誰でも知っているわ」

まいったな、俺の名前がそんな所まで広まっているとは。
目立つの嫌いなんだよなあ。

「私に知ってもらえるなんて光栄ね」

「……あんた何言ってるんだ？」

「もしかして、私を知らないの？」

その目は、大きく見開かれている。

本気で驚いているようだ。

もしか、この女頭がちょっとアレなのか？

「そう……ふーん。」

まえかわ ちひろ
前川 千紘って、聞いたこと無い？」

「知らん」

「自分で思ってるほど、売れていないのか……？」

目の前の前川 千紘と名乗る女の子は、一人でブツブツ言い始めた。

こいつは、マジで危ないかもしれない。

「落し物は返したから、俺は帰るんで」

「あ！ ちょっと！」

呼び止められたような気もしたけど、身体を反転させ俺はその場を去った。

「なあ、桜井」

「はい？」

夕食を向かいで食べている桜井は、口の中のモノをのどの奥に押し込んで答えた。

「前川 千紘って、知ってる？」

「アイドルですか？」

桜井は相変わらずの敬語で答えた。
どうして同じ年^{タメ}なのに敬語なんだろう。
……ちよつと待てアイドルだと？

「丸川さんの方が詳しいですよ」

そう言われ丸川の方を見ると、白飯を食べるのに必死だ。
あいつに聞くのは断念し、桜井に視線を戻した。

「なんか特徴的な所は無いのか？」

「そうですねえ……確か目の色が蒼かったはずですよ」

あの女、もしかや本物か！？

そうか……それならばすべての辻褄が合うぞ。

つーか、全国の高校生みんなが自分を知ってると思うなよ。

にしてもアイドルか……自分のような一般人とは到底縁の無い人種だな。

そんなことを考えながら、お茶で喉を潤した。
べつとりと脳裏に焼きついた、あの蒼い瞳だけが離れてはくれなかった。

「明日の起床時刻は、6時……つまり、今からのレム睡眠を計算すると……」

夕食後、部屋に戻ったのはいいが関本が得意(?)の分析を始めた。

2つ並んだベッドの上に座り、何やらブツブツ呟いている。
自分の世界に浸っているとの表現の方が正しいのか？

ベッドに背中から倒れこむ、ギシッと音を立てて自分の背がベッドに受け止められた。

頭の後ろに手を組んで枕にし、天井を意味も無く特に何も考えるわけでもなく、無気力に見つめたいた。

枕もとの携帯のバイブがなっている、しばらく続く事がメールで無い事を示していた。

ディスプレイに表示された、名前を見て無視するわけにいかない相手だったから少しため息が出た。

バイブが鳴ったままの携帯を手に取り、部屋のベランダへと出る。関本は依然として自分の世界に居る。

電話の主の名前をもう一度見た。
間違い無ことを確認してから、通話のボタンを押した。

「なんだ？」

『今、大丈夫だった？』

相手は、幼馴染の斎藤 舞だ。

「一応、暇してた」

『良かったあ』

去年の夏に俺は舞へ自分の想いを打ち明けたが、俺と舞の関係は依然として『幼馴染』に止まっている。

神鳥との再戦……自分なりに過去へのケジメをつける方を俺が優先したからだ。

それでも彼女が自分の中で特別で大切な人であることには、何も疑問は無かった。

『ちゃんとご飯食べてる？』

「俺は子供か。」

食べてるに決まってるだろ」

『そっか、そうだよねえ。』

功に早く会いたいなあ』

よくもまあ、そんなセリフを動等と……

「優勝てっぺんとるから少し時間がかかるかな」

『うん、怪我だけはしないでね』

「分かってる」

その後の舞との他愛のない会話を終えて、電話を切った。

ベランダから部屋に戻り携帯をベッドに投げた。

見事着地した携帯した確認した後、自分の世界から帰還していた関本と一緒に風呂へ向かった。

第51話 無駄を満喫してた

ベスト8進出をかけた2回戦。

0対0で迎えた7回の攻撃、ヒットで出塁した俺と四球フォアボールで塁に出た淳を1・2塁に置いて、打席には、5番センター、丸川。

ワンアウト

一死なので相手の守備はゲッツーシフトをしかれている、外野はバックホーム体勢で少し前進気味。

右打ちの丸川が打席に入りバットを構えた。

Side 斎藤 舞

功たちの試合を見終えた後、愛と飛鳥と3人で駅近くの喫茶店に寄った。

甲子園が地元、兵庫にあつてよかったとつくづく思う、遠い他県だと今頃バスで揺られるハメになるはずだ。

「こうにいたち、ベスト8だね!」

愛が嬉しそうに言った。

「そうやなあ。」

神谷の注目度も試合のたびに急上昇中やな」

飛鳥は、頼んでたパフェをつつきながら答えた。

なんで、飛鳥はいつも甘いもの食べてるのに太らないんだろう……

「どうしたん、舞？」

「一口いる？」

「ダイエット中だからいらない」

飛鳥が言くと嫌味にしか聞こえないような気がする。

愛は、嬉しそうに横から一口もらっている。

楽しそうにパフェを食べる2人を少し複雑な気分で見っていた。

家に帰ってテレビをつければニュースで今日の高校野球の試合結果が目に入る。

そこに功が絡んでいることが、少し遠い場所で起こっているような気がする。

功とあたしは、少なくとも今は、別の世界に住んでいる。

「まいねえ？」

愛が心配そうな目で見ている。

そういえば最近元気が無いようだと言われた。

心配するかわいい妹の為に今日は、愛の好きなものでもつくってやるか！

「大丈夫、今日は愛の好きな物作るから」

——大丈夫。

功とまた同じ時間に戻れると、自分に言い聞かせうように言った。

Side out

「フッフ……なんと言っても今日の主役は、決勝スリーランを打った俺様だな」

横の丸川が不気味な笑みを浮かべている。

新3年生5人の俺たちは、全員広間のテレビの前に居る。

就寝前に高校野球に関するニュースを見るのが、センバツが始まってからの習慣となっている。

「なんか、丸川さん不気味ですね」

「そう言ったるな」

桜井と淳が呆れるように言った。

普段、なぜがいじられ役に回ることが多い丸川が主役であることにすこし不満なようだ。

もちろん、丸川の実力はチームメート全員が認めている。

秋の地区大会では、淳が勝負を避けられても丸川が勝負強さを発揮おかげで勝てた試合も多い。

荒っぽい所は、相変わらずだが……

「始まるぞ」

かけていた眼鏡をかけ直しながら関本が言った。

・ ・ ・ ・ ・

「神谷ばかりだったな」

「やな」

「ですね」

「……なんか、ごめんな丸川」

「嘘だあああ！」

「なぜだ！？ なぜなんだ！？」

丸川は、頭を抱えて悶えている。

結局丸川のスリーランは、ほんの数秒映っただけで試合後のインタビューもカット。

なんか、こいつらしいと言えばこいつらしいが……

「さあて、寝るかあ。」

次の試合は、連戦になるからなあ」

「そうですね、神谷君、関本さんお休みなさい」

相部屋の桜井と淳は、自分の部屋に帰って行った。

丸川も暗い影を散らせながら、フラフラした足取りで部屋へ。

「俺たちも寝るか」

「先、行つといてくれ」

関本にそう言つて、自分一人だけ広間に残った。

別に大した理由は無かった、ただ常に周りに目を意識しながら過ごしている今大会は、いつも以上に神経がすり減っているような気がしている。

世間に自分の存在が広まるのが、俺にとってこれほど神経を使うこととは、思っていなかった。

その点、アイドルとかそう言う人たちに精神は、すごいと素直に感心してしまう自分が居る。

前川 千紘……あの心の内を見透かすような、蒼い瞳が頭から離れてはくれない。

「あれ？ 神谷君？」

入口の方で声がした、振りむくとそこには、北川の姿があった。

「1人で何してんの？」

「無駄を満喫してた」

——変なの。

彼女は、そう言っただけで隣の座った。

風呂上がりなのか、彼女の長い黒髪は少し湿っていて、シャンプーのいい香りが鼻を刺激する。

沈黙が空間を支配している。

何か話し始めると思っていた、俺は完全に話すタイミングを逃した。

適当を話題を頭の中で検索している時だった。

「さっきね、お兄ちゃんからメールがあった」

「神鳥から？」

「うん、『僕の居ない甲子園で負けるな』って、神谷君に伝えてくれた」

「一応、そのつもりだけどな」

「大丈夫って、返しといた」

そういえば、神鳥も見てるのか。

当然と言えば当然のことを今になって、再認識した。

隣に居る彼女は、髪が邪魔なのかポニーテールのように1つにくくり始めた。

「最近、舞ちゃんと話してる？」

「電話はしてる」

「ちゃんと、コミュニケーションとらなきゃ駄目だよ」

パツ、と音を立てて、髪を結び終えた彼女は、椅子にもたれかかっている俺の顔を覗き込んだ。

「んだよ？」

「……なんでもない、明日も試合なんだから早く寝なよ、少年！」

彼女は、元気よく立ちあがると「おやすみ」と言っ、広間を去った。

明日も試合か、甲子園に来て初めての連投だな。

立ちあがった俺は、窓に当たる雨の音にこの時始めて気がついた。

準々決勝は、雨の降る中での試合となった。

第52話 勝負にならん

後ろのポケットに入れておいたロージンを右手の指先に馴染ませる。

試合開始のときは小雨だった雨も試合中盤からは、本降りとなっている。

「巧！　しっかり叩きつけろよ！」

視線の先にいる淳がそう言いながら、右腕を振るデスチャーで指示を出す。

最終回、桜井のスクイズで1点を奪い取った開成うちは最後の守りで二死満塁のピンチを迎えていた。

打席には、3番の左バッター。

ミートが上手くて弱点が少なく攻めにくい打者だ。

今のカウントは、ワンボール、ツーストライク、つまり俺たちが追い込んだ形だった。

しかし、追い込んだ後に投げたチェンジアップを見逃され少し投げるボールの選択に困っている。

最初はストレートが待たれているような気配を淳も俺も察しスライダー2球で追い込んだ。

スライダーはタイミング捕まえられる気がするし……たて続けにチェンジアップを投げるのは、このバッターに対してはリスクが高すぎる。

腕を振り切れと言った、淳のサインはストレート。

あえて投げ込むか、じゃあ思いつ切り行ってみますか！

セットポジションの姿勢から3塁ランナーに目で牽制を送り、ゆつくりと足をあげた。

左手を3塁の方へ突き出し壁を作る、下半身から生み出した力を指先へ。

放たれたボールは、打ちに来たバッターのバットに当たることなく淳のミットへ。

大歓声が響く中、息をゆつくり吐き、表示された球速を帽子のつばから覗き見た。

151キロ……自己最速だ。

Side 前川 千紘

「へー、神谷って子凄いじゃん」

撮影の合間に携帯のワンセグで高校野球を見ながら呟いた。

ただの野球好きの素人にもわかる、圧倒的存在感とチームメイトからの信頼。

彼が普通ではない事は容易に想像できた。

まあ、私を知らないくらいだし忙しさに違いない。

でも、初対面で私にあんな素っ気ない対応をした人は同年代では初めて。

だから私は彼に興味があつた。

マネージャーに宿舎に行けないかどうか、聞いてみようかな……
大会が終わるまでは仕事で関西に居るんだし。

「千紘ー！」

来て頂戴！」

マネージャーが私を呼んでいる。

「はい」

携帯のワンセグを終了し自分のカバンに入れた。
マネージャーへの頼みごと忘れない様にしなくちゃ！

S i d e o u t

試合後のインタビューを終えて、甲子園内の通路を歩いている時
だつた。

帝羽学園と書かれたユニフォームを着た選手が1人で前から歩いてくる。
ていわ

あの高校のことはよく覚えている。

秋の神宮大会で決勝で戦った相手だ。

淳の逆転サヨナラスリーランで7対5でギリギリ開成が勝った。
うち

「よう、ナイスピッチング」

すれ違いざま、帝羽の選手が話しかけてきた。
見たことあるような気もするが対戦相手の顔を普段覚えないう俺は、
誰か思い出せない。

印象に残っていると言えば、4番サードで出ていた奴のみ。
なんせ完璧な当たりでホームラン打たれたからな……

男は続ける。

「帝羽^{ていふ}と当たるまで負けんなよ」

ベスト8決定の後に行われた抽選では、帝羽とは決勝であたるこ
とになっている。

「あいよ」

誰か分からないので適当に返事をした。

「じゃあな」

そう言つて、すれ違う男の背番号に視線を移した。
115番。

神鳥不在で今大会No.1スラッガーと呼ばれる男の背番号だつ
た。

準々決勝第2試合は、帝羽学園の圧勝に終わった。

「4番、横尾よこお剛たかしか……」

宿舍の広間で帝羽の試合を見終えた後、呟いた。

「強力打線の核になる人物やからな。
対戦するときはキーパーソンになるのは間違いないやろな」

隣にいる淳が今日の試合が載っているスコアブックを見ながら言う。

「それより先に準決勝あるからね」

北川が俺たち2人に釘をさすように言った。

広間には俺たち3人以外人の姿がない。

ほかの奴らは外でバットでも振っているんだろう。

俺もシャドーでもすつか。

そう思っただち上がり広間の出入口へ向かい歩を進めた瞬間上着の端を誰かに捕まれた。

振り向くと北川が俺の服を掴んでいた。

「どこに行く気かしら？」

俺の本能が警告を促している。

目が笑ってないとは、こうゆうことを言うのか……

「さ、散歩だ」

北川の性格はこの2年である程度は、把握しているつもりだ。
経験上、この感じは少し怒ってる……

「休暇が一番必要なのは誰か分かってる？」

「……監督？」

「そう……分からないなら身体で覚えるしかないようね」

や、ヤバい！

北川の後ろに般若みたいのが見える！

彼女は、俺との間合いを詰め。

「フッ！」

舞直伝のボディブロー。

声なら無い声を出しながら俺は、ひざをついた。

おのれ舞め……余計なモノを教えやがって。

「ただでさえ、開成は層が薄いんだからしっかり休んでなさい！」

「はい……かしこまりました」

結局、俺は北川の気迫に圧倒された。

「神谷、肘や肩に違和感はないか？」

夕食後、部屋へと向かう廊下で加地先生に話しかけられた。
我が開成高校の監督にして、現役時代は春のセンバツ優勝、夏の選手権準優勝の実績を持ち、高校野球史上最強チームの1つと言われた館鳳高校のエース……普段の緩い感じからは、そんなことは微塵も感じられない。

さらに藤井さんがそのチームの4番だったと言うから、凄さがイメージしにくい。

「淳が僕の疲労を考慮して、リードしてくれてるんで大丈夫です」

「そうか、確かに山中は心配性だからな」

そう言った、先生に俺は以前から思っていた疑問をぶつけてみた。

「今の状態で、開成と聖王が試合をしたらどうなりますか？」

先生は少しだけ目を見開き、腕を組んで目を閉じ廊下の壁に寄りかかり。

「率直な意見が欲しいのか？」

「開成高校の監督してではなく、個人の意見が聞きたいです」

少しだけ間が生まれた。

そして……

「勝負ならん」

そうハッキリと先生は、言い切った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0461t/>

夏空

2012年1月12日09時03分発行